

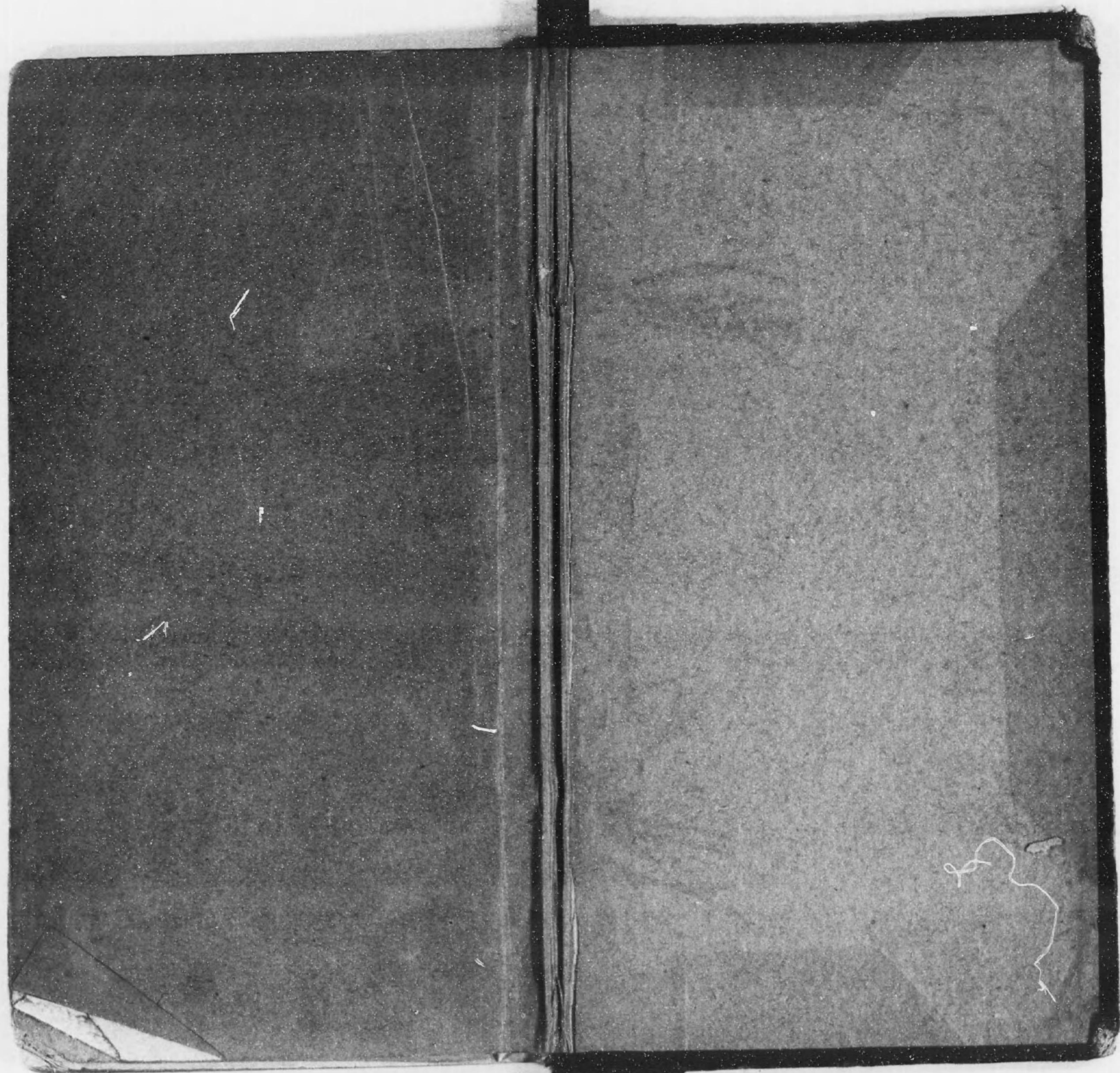
500

51



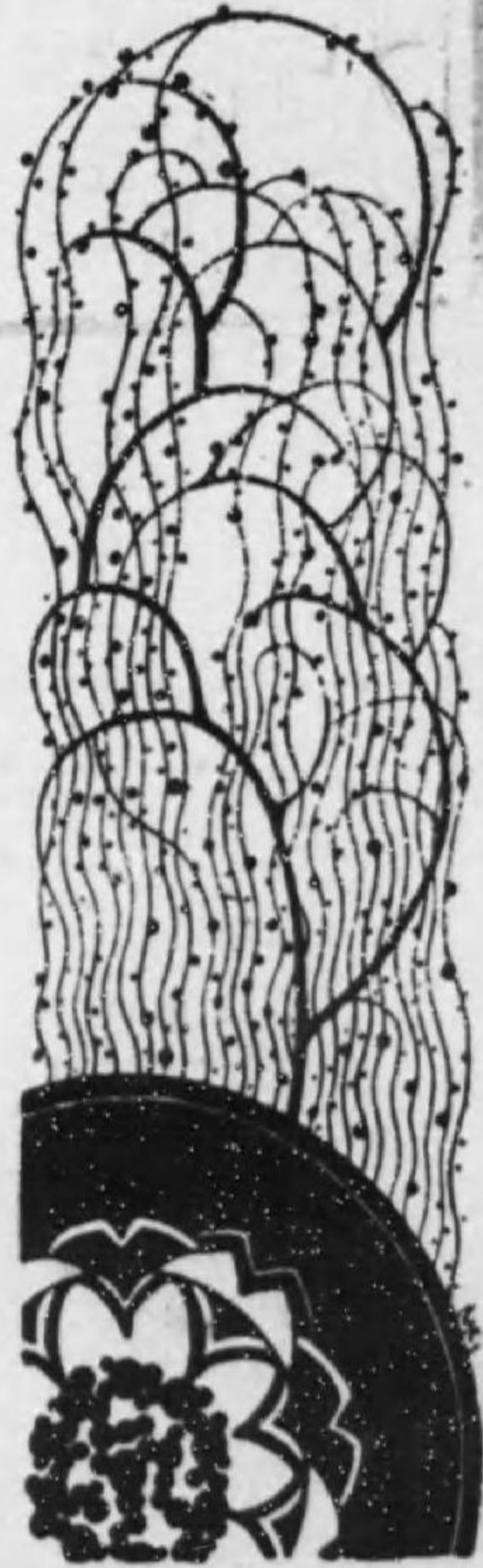
始





500-57

幹彦全集



大正
11. 8. 14
内交

幹彦全集第壹卷目次

草	笛	一
滂	一五四
寂しき日	二二三
零	落	二五〇
母	の手	三一九
尼	僧	三七五
砂	丘	四八三
船	客	五九七

草 笛

水郷の夏

Y 君僕は豫定のとほり、午後二時四十分佐原町で下車した。どうも、あの備い沼澤と平野との間を駛つてゆく汽車にはほと／＼閉口させられて了つた。いくら日本のツルゲネエフを以て任ずる人達でも、絶えず車窓に映つては消える、あの眞夏の日射しに照らされた單調には、流石に僻易せざるを得まい。それに又、乗つてゐる人物が男でも女でも、皆一様に千葉の地方色を遺憾なく發揮したタイプで、角ばつた額つきとその狡さうな眼光とは、散文的な僕の感覺を以てしても頗る感じが悪く、長く接してゐるのは一種の苦痛だつた。そのせいか、僕は妙な氣分になつて佐原の町へ入つた。

草 狭つ苦しい路次のやうな往來の兩側は皆醬油の醸造場で、灰色の色の禊めた高い並蔵の下羽目から濕つばい醬油の匂ひと豆糟の匂ひが溢れて来る。じめじめした路の面には太い荷馬車の轍の痕が幾條となく溝のやうに刻れて、處々に赤錆の浮いたやうな穢い水の流れた小流れがあ

笛

草

つた。僕はさうした街を潮來へかよふ船を探しながらぶらついて歩いた。
 やがて東京の場末で屢々見かけるやうな割合に賑やかな街へ出た。呉服店の飾窓などが半解
 な地方人の需用に應じて、お手軽な東京の假面を被ぶつてゐる容子が頗る不調和で可笑しい。
 とある角を曲ると石橋があつた。その袂のところには大きな柳の樹があつて、精一杯に生ひ繁つ
 たその葉は眞青な房のやうになつて水の中へ浸つてゐる。水と云ふのは町を貫流して大根根へ
 通ずる小運河のことだ。岸沿ひの片側には養賣店や、駄菓子店、又は酒屋の類が古めかしい家
 造りの軒を連ねてゐる。河の中へ一軒とび離れて懸出した葦簀がこひの氷店には「潮來鹿
 島行乗合船」と不格好な字を悪丁寧に書いた大きな看板が下つてゐる。その下にはもう仕度
 出来上つた一艘の荷足船が杭にまつてある。紅い毛布を敷いたその胴の間には、近在の酌婦ら
 しい浴衣姿の女が二人、オリブ色の洋傘をさしかけて、舷に倚つてゐる。家鴨の群は靜かに水へ
 下りて、餌をあさりながら船の周囲を泳ぎまわる。大きな波紋がいくつとなく滑らかな水面を
 敷ませて、その上にまどろんでゐた白晝の日射しが時々微笑むやうにきらきらと閃く。何處か
 て甘い風鈴の音が微かに鳴つた。

佐原の町はまあざつとかうした趣だ。平原の生活が水と接觸して辛うじて形作つた比較的
 複雑な脈膊を感じ得る土地だ。僕は態と便利な汽船よりも此の水郷にふさはしい乗合船を選ん
 だ。そして船宿の縁臺に腰をかけて生温いサイダを飲みながら此を書く。あ、早く美しい遊女
 の住む町へ行き度い。

「はい、又來た。」と、今迄暢氣に櫓を押してゐた老船頭は突然その手をやめて、空を仰ぎなが
 らきり／＼と帆綱を絞つた。帆はする／＼と柱を滑り上つて、小刻に身露ひをしながらやがて
 一杯に河風を孕む。

船は今丁度、水の中から眼だけ現はして臆然らしく河の面を偷み見てゐるやうな牛堀の家並
 を斜に見て、潮來へ通ふ小利根の水路へ入つたのだ。兩岸は強い綠色に光つた一面の蘆荻の原
 で、水郷の夏を吹く風が徐に息づく度にその白い葉裏が漣のやうに軽く揺らめき、その蔭で
 行々子が葉摺れの音につれて騒々しく啼しきつてゐる。

漸々と夕暮が近づいた。空氣の加減で非常に大きく見える不思議な太陽は霞が浦の沖に落ち

か、つて、眞紅に焼けた、れた夕雲と淡い暮靄とは互に纏れあつて、燻しをかけたやうな平な湖面を流れた。彼方此方の蘆荻の間から斑らな額を現はした白帆は、その反射で一樣に華やかに染出された。そして、河岸を泳ぎ廻つてゐる家鴨の群は、美しい黄昏の大氣の中にぼつとほの白く浮き出して、まるで穩かな夢の塊りのやうに見えた。その啼き聲がかすかな反響を後へ曳いて寂しく水の上へ響き渡ると、岸沿ひの街道を片肌ぬぎの旅人が急ぎ足に通つてゆく。乗合の女連は饒舌り疲れて、お互に顔を見合はせては頻りに欠伸ばかりしてゐるが、やがて中仕切に凭りか、つてうとくと居眠をはじめた。

灰色に褪めた夕雲が黒みを帯びた青い地平線と接した處に、白い小さな河蒸汽の姿が見える。旗棹が見える。やがて其の左手に寄つた蘆の影に潮來の町が少しづつ見えて来た。近づくに従つて、松の疎らに生へ續いた丘陵を背にして、地面に壓し伏せられたやうな雜然たる家々の屋根が漸々とはつきりして来る。殊にその中でも白壁が際だつて薄紅く輝いて黄昏は夢みるやうにほのかに町の上に澱んでゐる。

思ひもかけぬ蘆の繁叢から、笠を被つて白い手甲をはめた女共が二間足らずの手船を巧みに繰つて、ついでと漕ぎ出して来る。そして、鄙びた調子で互に言葉をかけあつて、油を流したやうな静かな水の上を皆町の方へ歸つてゆく。三艘、五艘、十艘と漸々其の数が増えて来て、僕の乗つてゐる船の周囲を抜いたり、遅れたり戯れながら漕いで通る。後の方でどの船で唄ふのか、節まわしのまろらかな鄙唄を若い女の透明な聲でうたふのが手にとるやうに水を渡つて聞えて来た。

白い月がのぼつた。

「旦那は、どうで潮來泊りがせう。」と、體のところはに跌坐をかい頻りに煙の環を吹いてゐた船頭が突然問ひかけた。「旦那方のやうなお若え衆は女郎屋へお泊んなさるがえ、てがすよ。旅宿へいくよりや却つて勘定で、一夜さ美しい女子を抱いて寝られるだあ。」と、聲高に笑つた。

乗合の女は黙つて顔を見合せながらクス／＼笑つてゐる。その顔がぼんやり水に映つた月の光で、薄闇の中にはの白く浮き出して見える。そのなかの一人は膝の上で紙袋をがさつかせて、

駄菓子か何かをこつそり絡味つてゐた。

「それ、彼處に灯のついてゐる二階家がありますべえ。あれが桔梗屋と云ふてな此の土地きつての女郎屋です。」と、指さす方をみると、廬の葉陰に點々と紅い灯が濡んで見える。僕はもうそれだけで何だか柔かな女の肌の匂ひでも嗅いだやうに妙に心の底に緊張を覺えた。美しい色街、その未見の國はすぐ眼の前にある！

僕は徹頭徹尾夢に迷はされたロマンチシストとして船から上つた。薄暗い吸路に來かゝると、浴衣がけに細帯一つのだらしない風俗をした女郎や遣手婆が途に要してゐて、うるさく遊興を勧める。それを防禦するのは一骨折だつたが、幸ひにして此のロマンチシストには多少皮肉な觀察力があつたので、彼等の執拗な誘惑の手も無効に終つた。

町へ入らうとする細道の兩側は女郎屋で、漆塗りの醜い羽目板や、鐵柵まがひの欄干が實に貧しい、寧ろ厭な氣持を起させるやうな色彩を現はしてゐる。船頭の教へて呉れた桔梗屋は左手にあつた。破れた塀の隙間から、夕顔の蔓が匂ひ出して、ほの白い花が咲いてゐた。二階の

部屋部屋には黄い煤けたやうな燈が點つて、まだ女の支配する暗い夜が更けないせいか、何處も此處もがらんとして笑ひ聲一つ聞えず、たゞ軒先に吊した岐阜提灯が微風にふらふらゆらめいてゐる許りであつた。

宿で夕餐を済ましてから又女郎屋のある本通りへ行つて見た。引手茶屋の軒を連ねた街には蝙蝠を追つて歩く子供の群が、宵暗の中で騒々しく騒ぎたて、ゐた。そのなかには悲しさうな聲をあげて泣いてゐる子もあつた。

とある一軒の引手茶屋の硝子戸になつた表戸から覗くと、奥の座敷の薄暗い行燈の影に、十二三歳の雛妓らしい娘と惜氣もなく諸肌ぬいだ年増の藝者が對向ひに坐つて、慵さうに三味線を弾いてゐる。その不揃ひな音はしつとりと水蒸氣を含んだ戸外の空氣の中へ宛もなく迷つてくる。僕は其の刹那女の肩から乳房の邊へかけてあらはに描き出された美しい曲線に眼を奪はれて暫らく立止つてゐるが、又妙な衝動に驅られてぶらぶら歩き出した。

ペンキ塗りの大きな銀行の廣告看板の角を曲ると、すぐ色街の入口だつた。往來に臨んだ女

郎屋の門口の柳の葉蔭には、態とけばくしい色を使つた繪摸様の暖簾が下つてゐて、肥つた醜い女がぼんやり客を待つてゐる姿が横ざまにちらりと見えた。朽ちか、つたやうな櫛子がら射して来る薄ぼやけた釣洋燈の光は路の面に不規則な縞を描いて、素見の嫖客も極めて寂しい。

僕は一通り見て歩いた後で非常な失望を感じた。あの『真蕪の中で……』の唄の底を流れてゐるやうな美しい哀愁が何處に表はれてゐるだらう。僕の眼に著しい刺激を與へたのは、寧ろ潮來へ来る迄の道程であつた。そして求むるものはつひに得られず、僕の眼の前にはたゞ最も露骨な人間の野獸性と、古びた色街らしくない荒廢が穢くるしい齒をむき出して嘲笑つてゐる許りであつた。

僕は喪心したやうな意氣地のない氣持になつて宿へ歸つて來た。潮來に於ける僕は到頭卑怯な鑑賞家とならねばならないやうな羽目に陥つて了つた。薰りのぬけた林檎は僕の憧憬に對してまるで反對の結果を齎した。

冷たい欄干に凭れてお君とお隆の惚話やら身の上話やらを謹聽する。二人とも人生の暗い路を態と眼を瞑つて漂泊して歩く女だ。褪せた唇と、粗れた肌とを彼等は公然取引の代物として生きねばならなかつた。二人の體に浸みこんだ安白粉の匂ひは確かに荒んだ彼等の過去の生涯を語つてゐた。

微風は何處からともなく吹いて來て、悪酒にほてつた頬を軽く撫でる。潮來の町の燈は更に少くなつて、絶えず寂しげに瞬いてゐる。薄暗い往來を白い顔をした女が幾人ともなく通つた。

小利根の河面にはほの白い河霧が浮んで、蛙のなく聲と共に、遠方から絃歌の聲が幽に聞えて來た。僕ははじめて涙の流れるやうなしんみりとした哀愁を感じた。

潮來の眞晝は一個の藝術品だつた。

まどろんでゐるやうなだらけた家々の前を乾き切つた白い道が斜にきつて、其上をきらめく午後の日射しが焼けつくやうに照りつけてゐる。道の側には處々に古池のやうな水溜

りがあつて、眞蒼にとろめいた水垢が浮いて、菖蒲や蓮の腐つた葉が餓え淀む毒水のいきれの中に、痣のやうな眞黒な斑紋をつくつてゐる。物賣る聲さへ聞えない明るい寂しさが町の隅から隅まで遍満してゐる。さうだ、明るい寂しさだ。

一疋の瘦犬が軽い砂塵をあげて歩いて行つた。その毛並の悪さと疲れた足調とは餓ゑと暑さに喘いでゐる動物の心をそのまま、表象したものであつた。その後から無智らしい顔容をした一人の肥つた女が、胸を披けて赤兒に乳を含ませながら、跣足でほとり／＼とやつて来た。

廣い蘆荻の海は青くきら／＼／＼つた。鋭い色彩の反映が汗をかいてゐるやうな大空へぼうつと種々な幻怪な形像を滲いてゐるやうに思はれた。

僕の潮來の印象は此れて充分だ。僕の藝術は全然視覺の影に没入して、一寸手も足も出ない貌だつた。僕は矢張り一個の異郷人として、臆病な鑑賞家として此町を去らうと思ふのだ。今日の夕方の汽船で利根を下つて銚子へ向ふ心算だ。そして美しい女と芳烈な酒とは猶ほ「青き花」として 行先に望みをかけて置かう。

氷海の月夜

……洛南の野には眞黄色な菜の花がまるで花むしろを敷きつめたやうに美しく咲き續いてゐる。浮舟の洲は青々と風に光る蘆荻の叢に包まれて魚供養の塔の上には十三日ばかりの大月が夢よりも淡く懸つてゐる。興聖寺の鐘はその黄昏を悲しむやうに明るい夕陽の光のなかを一

點、また一點、際涯もない大空の末へ消えぎえに響き渡つてゆくのである。私はいつか宇治川の下り船に身を托して、緋毛氈を打懸けた船へ手をかけたまゝ、快い夢路を辿つてゐるのである。柔らかな春の風は絶えず頬を吹いて、何處からともなく花の香がそつと漂つて来ては、私の夢を更らに濃く彩つてゆく。

「なあ、へ。あんたはん。あんたはん。……」と、誰か柔らかな手先で肩を揺りながら呼び起すのにふと氣ついて、我れに返ると、私の周囲にはいつのまにか四人の見も知らぬ舞妓が紅に金糸銀糸の縋ひを輝かしただらりを長く引きながら坐つてゐる。

「何んでそないにいつまでも眠つとるやすの？もうお起きやすな。」そのなかの一人は口紅の光る唇ににこやかな笑みを含みながら呟く。

私はその聲を聞くとふいに何とも云へぬ不思議な心持ちに襲はれた。昨日の黄昏どきにあの寂しい常呂川の谿間を通つてやつと北見の國へ入つた今、私の眼の前に京のほとりを流れてゐるこの宇治川が見えるのも不思議である。それに又今までは終ぞ出逢つたこともない舞妓達が私を取圍んでゐるのも猶更不思議である。

山の半面を包む残雪、蝦夷松ト、松の寂しい深林、それ等を思ひ起すにつけても眞黄色な炎のやうな菜畑の色彩が狂ほしいまでに強い誘惑を潜ませてゐるのが私には耐らなく不思議だつた。

私は舞妓達の顔をじろ／＼眺はしながら到頭口をきつた。

「お前達は何處から來たの。いつから此の船に乗つてゐるの？」さういふ口振りまでがいつもの私とはまるで違つてゐる。

「まあ、何をお云ひやすかと思ふたら、怪體な、ほ、ほ、ほ。あんたはん寢呆けとるやすのや

なあ。」と、ひとりが笑ひながら云ふと、皆はそれと一緒に譯もなくわつと笑ひ崩れる。友禪の紅い袖は花のやうに渦巻いて、花櫛の銀房がさつと皆の髪の上で波うつた。私はまるで物に憑かれたやうな氣持ちにならずにはゐられなかつた。

「あんたはん、もうお忘れやしたんか。「花やしき」のおかあはんはんに船をぶうて貰うて、あこの岸から此の船に乗つたやおへんか。京へ土産や云うてこないにたんと花を摘んどくれやしたやないか。」

なるほどさう云はれてみると、私にはかうして宇治の清瀬を下つてゆく段取りが一々はつきり分つて來るやうな氣がした。祇園の茶屋で遊びつかれて、昨夜宇治の「花やしき」へ行つて、今その歸路である。もう間もなく船は伏見の中書島へ着く。彼處から京までは電車だ。

「おう、さうだ。今宇治にゐるんだね。昨夕は皆して天狗俳諧や、歌留多をして遊んだんだね。」私は急に嬉しくなつて、いそ／＼しながら云つた。それと同時に今迄見知らぬ舞妓達だと思つてゐるのが、小君、松勇、春菊と、どれもこれも皆馴染みの愛くるしい顔になつてゆく。

「よんべはそれよりも調伏が面白うおしたわ。あんたはんお酒ばかりお飲みやすさかい、皆忘

れておしまひやすのやわ。」小君は睫毛の長い眼を据えてじつと私の顔をみつめる。
 「……吹けよ、川風、あがれよ……簾」何處か遠い處で舞妓達が聲を揃へて唄ふのが子守唄のやうに聞えて来る。

「……なかの小唄の主みたい……」静かな餘韻は綿々として河瀬の音と、もに咽んでゆく。
 と、みると、私の眼の前にはいつのまにか櫻の花に包まれた山が幾つとない峰々を霞の彼方に隠しさせながら立ち塞がつて来た。何處からともなく吹き誘ふ風は花瓣を雪のやうに斜に吹き散らして、樹蔭に懸け渡した緋毛氈の山臺がともすると花吹雪の彼方へすうつと隠されてしまふ。その山臺の上には藝妓や舞妓が都踊りの衣裳のまゝ、て幾十人となく端座して、繊細い手先で一様に小鼓を調べてゐる。

「此處は何處え？もう伏見どつか。」聞き馴れた小君の聲が直ぐ耳のはたでまたかすかに呟く。

「阿呆らしい。清水はんやないか。あこに山門が見えてるやないか。」別な舞妓の聲が聞える。

「お、ほんまにいな。」

花の雲の間には忘れもしない清水寺の塔と山門が毒々しいまでに鮮かな丹塗の肌を光らせな

がら聳立つてゐる。そして花蔭の石階を登つてゆく參詣の男女の姿までがはつきり眼に映つて来た。山臺の上で小鼓を調べてゐる藝妓や舞妓達と、石階を登つてゆく老若の群との間に何んな關係があるのか、じつとみつめてゐながら私にはさつぱり分らない。そしてその妙な光景が私の心に何等の不思議な感じをも喚び起させないのである。

「えらい賑やかなこと、すえなあ。今日の出番は種千代はん姐はんどすさかいに、あないにたんとく、都踊見にいかはるのやわ。」小君の聲は又ひそひそと呟く。

其聲に續いて、今度は急に陰氣な叩鉦の音がすぐその下から湧き起つて来た。ぼつん／＼と喘ぐやうに響いてくるその音は私の心に悲しくしみ入つて涙の出るやうな悲しさが漸次と喉元へ込みあげて来る。

「父母の、恵も、ふかき、粉川寺……」懐かしい兩親の行方を尋ねて見も知らぬ國々を漂泊して歩く「阿波の鳴戸」のお鶴の和讃が何とも名状することの出来ぬ悲調を帯びて歎歎するやうに綿々と浮上つて来る。それと一緒に東山の櫻雲も影のやうに消えて、忽ち氷結した網走湖畔の枯れ樹立が刺々しい裸形の姿で冬空をくつきりと刻みながらあり／＼と私の眼に映つて來

た。眼路の限りは荒寥とした雪催ひの暗雲に閉ざされて、數限りもない鳥の群が聲もたてずに遠く近く飛びつれてゐる。

「ち、は、の、恵も……」悲しい小君の聲は猶も執念く唄ひ續けてゐる。私は息塞まるやうな悲しさに壓せられて、思はず寢返りを打つた。その途端に、寒氣は針のやうに鋭く迫つて、いつか右の手の痺れをはつきり覺えて來た……

私はその時になつて初めて夢から覺めたのである。果敢ない腦底の空華は潰れて、現實の意識は鋭い寒氣とともにじいつと私の心に殺到して來たのである。——私は今、夢にみた京都とは似てもつかぬ極北北見の國網走港のかたほとりにある寂しい旅館の二階座敷にたつたひとりて旅寢をしてゐるのである。幾旬の旅路に疲れはてた體を冷たい褥に包んで、寢ねがての寒夜を、徒らな夢に弄ばれてゐるのである。

私は夢から覺めると同時に涙も凍るやうな冷たさを眼蓋に覺えて、思はずふつと雙眼を睜いた。東山のなごやかな春光を、幻に倒影してゐた私の瞳には、その刹那、餘りに傷ましい物象が映つて來た。寢る時には影さへ見せなかつた月がいつか枕許の玻璃戸から、ほそくと射し

入つて、凍てついたやうな蒼ざめた薄明りを四邊の壁の面へ反射させてゐる。すつかり焚き込んで置いたストーヴの火も全く消え落ちて、間うちには打てば音をたて、崩れさうな寒氣が一面に漲り溢れてゐる。

私は我にもなく、

「う、む。」と微かに呻いて、突如夜具を被つたまゝ、臥床の上へ半身起き直つた。そして見るともなく玻璃戸から彼方を眺めると、今迄夢寢にも想像しなかつた凄じい極北の冬夜の光景が忽然として脅かすやうに私の眼の前へ廣がつて來た。

残雪を載せた町の家並みの彼方は果てしも知れぬオホツク海である。千島の方から風波に誘はれて寄つて來る流氷は日毎夜ごとに陸地を壓して、今はもう能取岬からずつと外洋の方まで唯ひとつの不可思議な島影を除いてあとは見渡す限り海上一面に眞白く凍結してゐるのである。月光は皺ばんだその表面の起伏にきら／＼冷たく輝いて、處々にほの見える氷塊の罅隙は縁がかつた薄明に閉ざされてゐる。町にはもとより物の響きもなく、海は死んだやうに黙して波の呟きさへ聞えない。月光のほかには人住まぬ北極圈内の靜寂を思はせるやうな沈黙が天地の

間を領してゐるばかりなのである。

氷海の夜の静けさ。——それはあの寂しげなペンギン鳥の姿や、白熊の咆哮や、奇怪な極光の美を思ひ起させる前に、先づ我々の世界の最終の日を思はせるほど突詰めた恐怖を私の胸に與へた。世界絶滅の日には煦々たる太陽も月光の如くに色蒼ざめて、海も陸も唯一様にかうした堅氷の底に葬られてしまふのである。人類が營々として建設した文明も、思想も、藝術もすべて聲なき夜の眠りにつゝ、まれて、何等の記憶も、痕跡も止むることなく、一箇の形大な氷塊と化して無限の虚空を永遠に運行してゆくのである。それを思ふと、何とも知れぬ絶望に眼のあたりが暗くなつて、私はもう一刻も氷海を瞻視してゐるに耐へられなくなつた。唯このまゝ、ひたと心の眼を閉ぢて果敢ない夢に縋り、夢の魅力に耽溺して、その酔ひ心地に『生』を埋めてしまふよりほかには道がなくなつてしまつたやうに思はれた。

私はそれから幾時間の間、疼くやうな寒氣に脅かされながら、恐ろしい思想から思想へさまよつて行つた。もう京都ではあの東山の三十六峰に夢のやうななごやかな縁が萌えたつてゐることであらう。眞黄色な洛西洛南の菜畑にはあたくかく降る春の雨に濡れながら御影供の鐘が

鳴り響いてゐることであらう。さうかうしてゐるうちに祇園町には紅いつなぎ團子の提燈が灰めいて、都踊が花見小路の宵闇を賑す頃ともなるであらう。あゝ、生活の春、歡樂の郷國。さう思ふと南の國を思慕する情は熱火のやうに燃えあがつて來たが、併し唯焦だ、しい悲しみが胸を壓し塞ぐばかりで、佗しい旅寢の枕に匂やかな夢を再び呼び返さうとするすべての努力は悉く無駄になつてしまつた。そしてもう一度頭を擡げて氷海の姿を差し覗いた時には、既にすでに、曉が東の水平線に白みかけてゐた。月の落ちた空の彼方には大きな北斗星が爛々と異様な光輝を放つて濃綠色の神祕な薄明がぼうつと氷海の面にほのめいてゐた。そして雪よりも白い鷗り群は、幻のやうにちら／＼とその薄明の底に群れ飛んで、寂しい悲鳴が宙を裂くやうに斷れぎれに聞えて來る。私は悚然として戰いた。私の凍えきつた頬にはやがて譯もない涙が頬に流れ落ちて來た。

鎌倉より

俺の心は今宇宙のやうに空虚だ。なにひとつとりとめた苦悶もなければ歡喜もない。ともすると時折鈍色の法衣を纏つた若い禪僧の群や、土龍のやうな貧弱な農民の生活や、又は黒ずんだ緑色のみからなりたつてゐる單調な自然に對して激しい憎悪を感じるやうなこともないではないが、それも自己とは餘り交渉のない束の間の痙攣のやうなもので、すぐ後から又弾力性を失つた平安が俺の胸に歸つて來る。朝起きてから晩寝るまで、今までに餘り經驗したことのない不可思議な氣分が殆んど同様な週期律を示して繼續してゐる。云はば靈魂と肉體とが最も低級なそして最も幸福な飽和をなしてゐるのだ。一日中に心象の面をかき亂す最大事件といへばまあ電のやうに去來する華やかな空想ばかりと答へるよりほかはあるまい。机に倚りかかつて煙草を吸つてゐると、薄紫の煙が細くかすかな絲のやうになつて障子の棧から長押をつたつて眞暗な天井の方へ匂ひあがる。その夢のやうなゆらめきの末に溶けこんでゆく果敢ない

幻影、それが今俺の生命を培つてゐる貧しい糧なのだ。

俺は明日もあさつても又その翌日もその翌々日もかうした備い律を繰り返して暮らしてゆかねばなるまい。醫者が承諾を與へないうちは俺の自由は決して歸つて來ないのだ。そしてそれをひどく待遠しいとも思はないが、併しアンドレエフのやうな美しい顔つきをした俺のドクトルが時々やつて來て、病後の衰へを養ふには最も適當した生活だといつて俺の今の状態を激賞して呉れるのを聞く度に俺は遊戯を欲するやうな妙な氣分になつてひそかに苦笑を禁ずることが出来ないのだ。

氣が向いたら時々は都會の消息を聞かせて呉れ。健康を祈る。

鎌倉山の内より

その後はちつとも消息を聞かないが、一體毎日何をして暮らしてゐるのだ。あの酒蔵の多い河岸に沿つた小さな窓からイブセンのやうな冷たい眼つきをして常に世間といふもの、プロフアイルを偷み視てゐる君のことだから、又何か新しい事件を發見して、それにすべての興味を

奪はれてゐるのではあるまいかと思つてゐる。今迄の経験によると君が消息を絶つた時はきつと何か他の方面に於て最も敏活に活動をしてゐる時だつた。それならば尙のこと、偶には郵便と稱する貴重な三銭の文明をも尊重されんことを望む。

俺はやつと解放されさうになつて来た。二三箇月以前に俺を見捨て、いつた健康といふものが、また日一日に俺のものになつて来るのを自分で明かに感ずることが出来るやうになつて来た。それと同時にあの都會といふ恐ろしい悪魔に答たれて沸騰してゐた俺の血が漸々と氣のぬけた炭酸水のやうに沈滞してきて、今では一日に一反の畑を耕すことを一生の理想としてゐる忠實な農民のそれと大した差別がなくなつて来た。俺は已むを得ず自然を讚美する。それと、もに自然も亦飽くまで俺を同化させようと企てる。俺の周囲を取巻いてゐるすべてのものは氣味の悪い程温和な、それであるて何處か勝ち誇つたやうな微笑を浮べて、まだ生れない前からの知己のやうな親切な顔つきをしてゐるが、その善意に充ちた同盟が果して俺をどれだけ幸福にするであらうか、それは俺にとつて頗る明白な疑問なのだ。

俺は近き將來に於いて壁の様に痴鈍な神経を持つやうになるであらう観察と研究とを自己の

生命とすると同時にすべてを『ありの儘』といふカテゴリーのなかに追ひこんで、而もそれを大主観と稱する物々しい單色の顯微鏡で見ることが誇りとするやうになるであらう。美といふやさしい、あてやかな姿はもう見る影もなく衰れ果て、その代りに田舎紳士のやうな眞といふ絶対價値が嚴然たるタイラントになつて、俺の生命を慘酷に支配するであらう。その時に至つて、俺は初めて藝術の價値と、意志の價値とを Voluntarism の壘にたて籠つて輕重するものである。そして支那人の忍耐力を以て、牛の如くに健全な Trilogy を書くことが出来るであらうと信ずる。

お、讚嘆すべき健康よ、そして俺は斯くの如くに戰慄しながら汝の温き握手を待つてゐるのだ。俺を美の Air castle から奪ひ返して、力ある地上の勞働者にして呉れる汝の親切を感謝するために、俺は既に餘り多くの反感を蓄へ過ぎてゐるかも知れないのである。

俺は今トルストイの『コザツク』を讀んでゐる。今頃原始的なコルドンの物語りでもあるまいとは思ふけど、なにしろ『クロイツェル、ソナタ』の方を先に讀んで了つたんだからしかたがない。あの嚴かな猿のやうな、顔つきをしたヤスナーヤ、ポリヤナの聖人も嘗ては蘭燈ほの

暗き密室の中で、重苦しい哲學的な洒落をいひながら媚びを賣る女達と戯れてゐたのかと思ふと、俺は多少氣恥しいやうな心地もするが、併し彼が今一心になつて喧傳してゐる教理が往々にして火花の散るやうな若々しさを帯びて來るのを見る度に、偉人といふ偶像が近世の社會から漸次と消え去つて村が市になり、百姓が紳士になる悲惨な推移を思はない譯には行かないのである。そして俺は此頃人生觀とか、宇宙觀とかいふ重苦しい問題に對して餘り多くの價値を認めないのである。トルストイだつて、イブセンだつて、又この地球上に産れた幾十億の精靈を救つたといはれる偉いエス、クリストだつて等しく今の世に生きてゐたら矢張り毎朝新聞のルウタア電報を読む人間なのだ。彼等の親達や睦まじい契りを結んでゐるうちふと何等の豫期もなく生れ出でた戯れの副産物なのである。親達はそのとき必ずしも肉塊の出現を喜ばなかつたかも知れない。そののみか彼等はかゝる偉人を産んで置きながら、その後約一箇月の間夫婦互に別居しなければならなかつたのである。そして又偉人自身の上からいつても、彼等が初めて母胎に入つた時の價値は唯最も敏活な運動をもつた最も幸運な單細胞動物に過ぎなかつた。そしてその驚くべき分裂生殖が幾何級數的に個人といふ機官を形づくつてゆく途中に於いて、『戰

争と平和』が出来、『建築師』が出来、そしてあの浩瀚なバイブルの内容が出来たのである。

アダムとイブは悪魔の蛇に咬かされておそろしい禁制の木の實を喰つた。春の日にだらしのない顔つきをして夢をみてゐた。そして赤裸體でエデンの樂園を追れたさうだが、こんな簡単な論理が藝術の中心興味を占めてゐた時代には人間がみんなそのアダムとイブのやうに幸福だつたのである。今のアダムとイブは、エデキントが吾人に示してゐるやうに枯草小舎の暗闇のなかで苦しさに呻きながら生の神祕を偷み視なければならぬ。俺は『春の目ざめ』から道徳と教訓を蒸餾し得た批評家の努力を尊敬する。そしてその人達が自己の見識に安住して幸福な夢を續けてゐる間に、わが怖ろしき『覆面の人』は辛辣な洒落をいひながら懷疑家メルヒョオルを拉して地獄めぐりに出かけてしまふ。鳥のやうに嚴肅な批評家たちが青筋を立て、人生觀上の論議を戦はしてゐる卓子の陰にも、その二人の足音と物凄く苦笑の聲は聞えて來るのである。『馬盗人』のいひぐさではないが、なんといふ偉大な洒落だらう。そして神は確かに大膽な詐偽師だつた。

あ、併し俺は餘りに哲學を饒舌りすぎた。讀みかへしてみると、重大らしく見えてゐた俺の

思索がいつの間にか Jugend といふ安雑誌に載つてゐる漫談と同じ價値にまで低下されてゐた。少し恥しくもあるが、折角書いたものだから出す。

鎌倉には特別に通信しなければならぬやうな出来事はひとつもない毎日毎日雨が降つて、木の葉が散つて、風が吹いてゐる。

鎌倉山の内より

一昨日の手紙は確に受取つた。俺はあんなのを貰つたんではちつとも有難くない。あれではまるで離縁状態みたいなものだ。

俺の知らないお喋さんとか云ふ綺麗なひと、何處か遠い／＼西方の國へ旅立をするとかいふが、あれは一體何をサチエストしたものなんだい。あ、いふ抽象的な藝術は作者以外のものに餘り興味を與へないと同時に餘程忠實な説明を加へて呉れないと了解に苦しむ。俺は少くとも Moderns と稱せられる君から Romeo や治兵衛の科白を聞くことを餘り光榮としない。君といふ聯想と『こひなさけ、こゝを瀬にせん蜷川』といふ情調とは殆んど漫談に似たにがい矛盾

をもつてゐる。悪い洒落だ。心中ものでも書くつもりなら現實の生活から脱離した『天網島』でも参考にしたまへ。それともあれを Lyric にするといふのなら俺もそのつもりで聴く。近代人と稱する人種はともすると友誼を玩具に利用しようとするので、往々理解を複雑にしてこまる。

今夜もまた雨が降つてゐる。いつまでもいつまでも、この世界が生きてゐる限りやむまいとするやうに執念ふかく降つてゐる。じつと耳を澄ますと、何處か遠くの方から笛太鼓の囀がかすかにきこえて来る。さういへば村の祭がちかついたのだ。この二三日村の若い男や女はみんな二度目の Frühlings Erwachen を迎へてゐるやうに朝から晩までとりとめもなくはしやぎまはつてゐる。俺はその容子をみる度に原始時代の人間を思ひ出す。そしてかういふまとまつた材料を主として取扱つてゐる小説家の心理に對して多少疑問を抱かない譯にはいかないのである。

俺の宿を借りてゐる家のすぐ下に正右衛門といふ一家族が住んでゐる。祖先は昔建長寺に来てゐるたさる高僧に従つて遙々唐の國から移住して來た支那人なのださうだが、今ではもう全く

日本に根を置いて至極安泰な日を送つてゐる。殊に正右衛門は日本人たることを深く自覺しそれを誇りとして、毎日々々汗みづくになつて日本の土を耕してゐるのである。彼の長男に生れた若者は日清戦争のとき、最も忠勇なる日本の一兵卒としてその骨を遼東の野に埋めた。その次男も亦三十七八年の戦役に於いて旅順口に近いさる砲臺總攻撃のをり、抜群の功績をあらはして、戦死した。兄が勳八等で、弟が功六級である。そしてその弟は剃髪して蒼ざめた顔つきをしながら日がな一日経を誦んでゐる。今年十五になるその妹は道普請に來た道路工夫と墮落して今では何處の村里で日を送らしてゐることやらまるで音信不通になつてゐるさうだ。此等の子供を生んだ彼の妻は全身不随になつて物置のやうな家の隅つこに寢てゐる。それでも正右衛門は決して不幸な身の上ではないと信じてゐるらしく、跡に残つた豚の子のやうな三人の息子と娘を養ひながら村の住民を相手に漢語交りの恐ろしい氣焔を吐いてゐる。今朝俺の家へ馬鈴薯を賣りに來てこの村の村長さんが一村の模範だといつて讚めた三四年以前の話を繰返し繰返し聞かして散々俺をアテた。『旦那なんざあ學問は出来るかも知れねえけど、勳章ちうものう貰つたこたあなかんべい。』とさも自慢らしくいつて俺を侮蔑した。村の者はもうちき

この正右衛門が氣狂ひになるだらうといつて心配してゐる。俺は不幸にしてゾラの後繼者ではなかつた。俺はかういふ面白い材料に對して興味と同情とをもち得ないといふのではないが、唯ノオトと鉛筆とを忌むのである。餘りに藝術を尊重するために定着した研究と觀察とを恐れるのである。雨が晴れたら海岸へ出て眞晝の光に輝く砂丘を眺めたい、砂濱に群る鷗の歌を聞きたい。そして俺は詩人になるんだ。

鎌倉山の内より

俺の靈魂と肉體とは醜い休戦から再び干戈を執つた。俺はもうこの備い谷あひの修道院のやうな寂しい生活にはほと／＼倦きてしまつた。それに俺はこの二十日間といふもの唯の一度も太陽を見ないのだ。毎日毎日朝から陰鬱な空模様が続いて灰色の雲が低く山の頂きを掠めて通りすぎる度に時雨のやうな寂しい驟雨がしと／＼と降つて來る。がらんとした十疊の間にたつたひとりて坐つてゐるその寂しさ。殊に夜になると聞け静まつた村里は雨の音ばかりになつて、

家主の老人夫婦がたよりのなげな聲で観音經を誦むのが丁度地の底で歎息してゐるやうに聞えて来る。薄暗い洋燈の光が鈍色の壁の面に描き出す大入道のやうな黒影をみつめてゐると、もう泣き度いほど寂しくなつて来て、到頭物凄切通しの夜道を提灯の光で辿りながら燈の疎らな街の方へ出てゆく。町といふ名はあつても其處には町としての内容は皆無なのである。松並木と蕎麥屋と貝細工店。そしてあくの強い地酒と、馬のやうな表情をした賤しい女がゐるきりなのである。俺はいつでも停車場の近くにあるレストラントへ行つてウキスキイを飲みながら蓄音機を聞くことで満足しなければならなかつた。

實に寂しい。今夜は少しづつ、風が吹いてゐるので裏の雜木林が悲しげにうめいてゐる。建長寺の裏山から流れ出る水の音がまるで人の住まない深山を思はせるやうに響いて来る。俺は何をする氣もない。たゞ漫然と煙草を吸つて、煤けた天井をみつめながら空想に耽つてゐる。何處まで行つても際涯のない悲しみがかうした晩には必ず俺の心を包むのだ。——今までに逢つては別れ、別れてはもう二度とふた、び逢ふことの出来ないやうな女の顔がしやぼん玉のやうに浮んだり消えたりする。豊かな胸のラインや、美しい指がそれと、もに俺の Sensual な情

緒を衝きうごかして、終には俺からすべての道德意識を奪ひ去つてしまはうとさへした。併しそんな時でも俺の心の底には丁度美しい薔薇の花の下に潜んでゐる蛇のやうな性の悪い批評家が居て、決して俺の行爲を常識といふ Orbit の域外に逸せしむるやうなことはなかつたので、あの扇谷の別荘に来てゐる病める美しき mademoiselle に對してアンドレエフの情調を強るやうな Delirium には決して襲はれなかつた。

併し俺は寂しい。何といつても寂しい。

鎌倉山の内より

今夜は珍らしく雲ぎれがして、この浅い谷あひの村を照らす月の光が殊に鮮やかだ。俺は夕方から家を出て足に任せてそこいらを歩いた。建長寺の境内へ入つた。あの古い世の亡靈のやうな大伽藍の影が水にぬれた大地の面に黒くくつきりと描きだされてゐた。俺は本堂の冷たい柱に倚りかゝつてそつと中をのぞいた。蒼白い月光が四ツ目格子の扉をとほして奥深い龕のなかの黄金佛を夢のやうにかすかに照し出した。たゞひとつ現世から忘れられたやうに瞬く蠟燭

の光。——併し俺は自分で探してゐたもの、たつたひとつをもその中から見出すことが出来なかつた。さうしたロマンチックな詩は今の俺の生活にはあり餘るほどある。俺だつて歴史や、古美術品に對する嗜好をもつてゐない譯ではないが、それをもつと精神生活に餘裕があつての上のことだ。俺は今なにか建設しなければならぬ。何かを激しく求めてゐるやうな重苦しい氣分を感じる。

俺はそれから鶴ヶ岡八幡へ行つた。血のやうに黒ずんだ丹塗の門は堅くとざ、れ、廻廊には八百餘年の時の祕密を隠してゐる窓のやうな黒い陰影が出来て、何處をみてもことりといふ物音もしない。俺はふと「タンタジールの死」を讀んだ時のやうな透明な恐怖に襲はれた。その門の重い扉が悲痛な死の笑ひを浮めて、その裏でかすかな人の嘆息が聞えた。

併し一度ふり顧つて鎌倉の町にともつた寂しい燈の色と、町を越して向ふに廣がつてゐる銀色の海とを眺めたとき、俺の胸には激しい反感が燃えて來た。道徳的な鎌倉時代の素朴と、その貧弱な堅實な武士道文明と、頼朝と政子と禪僧とを背景にしてゐる古跡。俺は靜の舞殿で、在來の道徳的見地から見ても最も壯烈な節婦と稱せらる、一白拍子の舞姿を偲ぶやうな幸福な氣

分にならない前に直ちにそこを立去らなければならなかつた。俺の考へによると節婦は男性の變態である。肌麗はしく、血にほやかなるべき女が槍、薙刀の類を振りかざして馬上馳驅して歩くといふことは造化が殊更に設けた錯誤である。苦笑すべき悲劇である。そして而も有名な拜殿の傍には日本海の大戦の折、濃霧といふ自然現象と惡戦苦闘して驍名をあげた某將軍の寄贈にかゝる朔北の熊が、小春日和に餌を探しながら鐵檻のなかを彼方此方と漫歩してゐるのである。俺は夜、さういふ猛獸の唸聲を聞きながら、吾人の祖先が繼承して來た傳説の價値を是非するほどの忍耐力を養つて置かなかつたことを敢て恥としない。

あ、俺は都會を欲する。明るい燈のともつた街を欲する。群衆を欲する。今華やかな劇場の空氣とそのなかに生ける藝術の如く浮動する美しくしき女のプロフィールが幻想のやうに俺をとり圍んでゐる。彼等の紅い唇は音樂のやうに滑らかな言葉を語る。その纖やかな指は劇場の窓に劃られた空の一部を指す。そしてそこには深い夜の暗の底に神經の魔術のごとく明滅してゐるイルミネエションがあつた。舌を爛らかすやうな青い酒があつた。都會に對するノスタルジアはかくして到頭いかなる安全瓣をも打破するほどの高潮に達した。そして骨の髄まで蝕ばん

てゆく歡樂の匂ひが俺を一個の幸福な詩人に變形してしまつたのである。
 又雨が降つて來た。圓覺寺の鐘の音がその雨のなかをほそくと忍んで響いて來る。俺は今
 夜とても寝られさうにない。明日の朝爽やかな日の光をみない限り、俺はセンチメンタルなア
 イコノクラストとして何時何處へとびだしてゆくかも知れないのだ。

鎌倉山の内より

34
 昨夜から俺は江の島へ來てゐる。金龜樓の二階座敷で櫻正宗の壺詰を飲みながら、島の藝者
 の錆びた磯ぶしを聞いた。旅愁といつたやうな Conventional な情趣が頻りに湧く。
 雨の時間をみて窟へ行つてみた。最も平凡な自然現象を崇拜する人間の淺ましさが見え透い
 て何ともいへない厭な氣がした。それでも洞窟の奥へ奥へと響いてゆく波浪の音には暗示的な
 シムボリックな盡きない興味を感じる事が出來た。
 夜寝てゐると、吹き荒ぶ風の音とともに岩に碎ける波の叫び聲が凄じく聞えて來る。黒曜石
 のやうな暗闇のなかで自然がその暴威を逞しくしてゐるさまを想像して俺は幾度かぞつとし

35
 た。そして美しい味をもつた處女の姿を幻に描きながら安らかな睡眠を得ようとあせつ
 た。
 俺は又今日一日あの岩礁の上にとびかふ鷗の群を眺めながら物悲しい思ひ出にふけるんだ。
 そして幾分でも思索といふものから脱離することが出來たならばそれで満足しなければならな
 い。健康を祈る。

江の島より

草
 恐ろしい風雨がゆうべ一夜荒狂つて、今朝やつと離れたやうに靜かになつた。東の方の空
 から少しづつ、雲ぎれがはじめ、氣ぜはしさうにかけてゆく雲のきれ目から時折薄日がぼん
 やり落ちて來る。一帯の砂濱には潮烟が銀色にたちこめて、強い強い海の匂ひが室内までも流
 れ込んで來る。俺は久しぶりに頗るフレッシュな氣分を味はふことが出來て愉快で耐らなかつ
 た。

笛
 俺は今朝早く濱へ出て、去年の冬、西浦の岩壁の下で行はれた悲惨な情死の話聞いた。男

が無事に生残つて、女の方はふた目と見られないやうな恐ろしい姿になつて死んだんださうだ。語り手の位置にあつた漁師達は、その場になつて急に氣腫れがして死を脱れた男の事を丁度叛逆人でも評するやうな激しい調子で散々に罵詈雑言した。俺は彼等のやうな無智な、低級な階級の間にも猶厳存してゐる道徳觀念が、所謂教養のある高尚な社會のそれの如く規範的でなく、寧ろ赤裸々な本能の間から流露して來るのを見て多少快く感じた。そしてそれと同時に女の肉體の美しさを語つたその漁師たちの顔面に或激しい嫉妬と憎惡の表情が浮んでゐたのあり／＼と觀取することが出來た。

俺は今でも情死の美感に對してある價値を認めてゐる。碧玉のやうに澄みきつた波の面に漂よつてゐる裸體の女の死屍と蒼ざめた月光の深祕な美感とが理想的な苦痛になつて心の底に残つた。

なんだか物足りない、馴れしめたやうな淡い感じが全身を包んでゐる。

今朝隣室に新婚らしい二人の若い旅人がやつて來た。兩親、家庭、社會、これ等すべての束縛から開放された幸福な男と女とが丁度アダムとイブのやうに嬉戲してゐる。俺の感覺は妙

に多角的になつてきた。そして疲れたやうな顔つきをしながら勢ひよく下の宮の險しい石段をかけあがつてゆく二人の後姿をみた時、その病的な動作がひどく俺の心を刺激した。

俺は午後から鎌倉へ歸る。

江の島より

俺は到頭横須賀へやつて來た。今大通に近い小さな西洋料理の二階でこれを書いてゐる。ウキスキイの小さな盃と白い皿とそして毒々しい葎をもつた白百合の花が明るい電燈の光の中で爽やかに笑つてゐる。

久しぶりに都會的な氣分を味はつて愉快で耐らない。そして軍港と歡樂といふ皮肉な對照がいつのまにか俺を我儘な批評家にしてしまひさうだ。

横須賀へ着いたのは丁度午後の二時頃だつた。列車が停車場へ入るともう、俺の氣分はまるで別な律のなかへ溶けこんでしまつた。田浦驛あたりから一變して來た四邊の情調がブラットフォームへ下りたとき、すつかり完成して、所謂軍港といふ言葉の内容にしつくり當はまるや

うな重苦しい気分にかはつてしまつたのだ。その時から俺の客観性が少しづつ、不透明になりかけた。

停車場の構内に、而も貨車の列のすぐ後に香取と薩摩とそして橋立とが碇泊してゐた。そのほか港内には幾十艘の軍艦が列を亂して碇泊してゐたけれど、武器とは餘りは懸絶した生活を享樂してゐる憐れな藝術家の悲しさには艦名はもとより、その特殊な艦型の異同すら辨別することが出来なかつた。そして港といふものにさへ餘りよく馴らされてゐない俺の視覚は先づ最初にその壯大な光景に對して非常な驚異にうたれたが併し次の瞬間には陸地と交渉のないそれ等の近代的な海の Chimère——すべてを破壊するための恐ろしい武器の姿が何等の Illusion をも伴はない極めて虚喝的な形態としてのみ映つた。陰鬱な灰色の空の下に、泥灰色に濁つた海の面に恐ろしく Non Artistique な、そして徒らに尨大な姿を横たへてゐる右様は寧ろ一種の沈痛な Tragic な Caricature であるやうに思へた。幸福な國民等はそれでも柵のところへ目白烏おしに寄集まつて頻りに鋼鐵の偉大を讚美し、ドン・キホオテのやうな空想を享樂してゐる。さういふ俺も實は國家の權威や、人類の驚く可き創造力といつたやうな或民

族の社會的集團が個人に對して與へ得る極めて露骨な氣分に壓迫されて魂のぬけたやうな馬鹿げた顔つきをしながら偉大な光景を眺めてゐたのかも知れない。

併し俺はちやんと大地の上に立つてゐた。懐かしい Geisha の國の土の上に足を置いて、愛國者の熱誠な眼をもつて軍港の美しい印象を味はつてゐた。どの軍艦を見ても大和民族の simple な淡白な理想と趣味とを體現したかの紅き旭光の線條をもつて彩どられた國旗がひるがへつてゐる。幾多の光輝ある戦勝の Tragedy や Comedy とが吹く風につれてちら／＼隠見してゐる。血と涙と歡呼の聲が誇りにかに中空を舞ひあるいてゐる。俺は光榮ある明治の聖代が新にうみだしたこの偉大なる所産に對して多大の尊敬を捧げると同時に、その一つ／＼をかたちづくるに要する物質力を數個の劇場と美術館の建設に換算してみてもその餘りに偉大なる浪費に對して同等の敬意を表せざるを得なかつた。一個の彈丸は一國を亡ぼし得ると、また Bacchus や Venus を讚美する憐れな遊民の一生をも幸福にすることが出来るのである。そして俺は幸福の悲しみといふやうな不思議な感じを経験しながら停車場を出て町の方へ行つた。途上俺は中學生が修學旅行に出た時のやうな幼稚な觀察と、遊戯を好む文明批評家の態度を

擲たなければならなかつた。濕氣を多量に含んだ空氣と灰銀色の鈍い外光の効果が織り出す軍港の印象が俺のすべての興味を獨占してしまつた。殊に眞紅に塗られた工事中の巨大な戦艦を中心にして悪魔が怪しげな饗宴を張つてゐるやうな形に密集してゐる鐵工所やガウントリイ、クレインや方角形の岩山やその他すべての物質興味を方々の烟突から吐き出される煤烟が濃く淡くいろ／＼な Variation を以て染だしてゐるありさまが實に面白かつた。併し俺達はそれ等について餘り詳しい序述を費すことを禁ぜられてゐる。武器の文明に安住してゐる國民は其過剰な報酬として軍港といふ地區を一種低級な Labyrinth と思はなければならぬやうな義務を負はされてゐるのである。

俺は街から街を漫歩した。そして更に深い興味を以て水兵と勞働者のみによつて築きあげられた荒つばい市民生活をみた。雨に烟つた丘陵の谷々へ入江のやうに侵入してゐる貧民窟、焼け跡に再び建てられた大通りの殖民地のやうな賑はひ、その穢らしい家並は他の工業地で見られない一種の情調を含んでゐる。俺の漫歩は到頭三時間に餘るほど長く續いた。そして限りない豊富な經驗を得て満足するとともに非常な空腹を感じてやつとこの西洋料理店へ辿りついた

のである。

先刻から窓際の卓子に倚つて頻りに痛飲してゐた三人の若い海軍士官はいつのまにか歸つてしまつた。軍服の上衣を脱いでワイシャツのまゝ、盃をあげてゐた根元の士官たちは此の市の趣味生活を開拓し、善導してゆく唯一の革命家なのだ。そして海に馴れた高い聲で争ふやうに饒舌りあつてゐた話題は遂に Femme と L'Argent の範圍を出なかつたのを見ると彼等も矢張り高級の Labourer なのかも知れない。そして鋼鐵の棲處へ歸る前には國家が彼等に附與した體面といふものをもてあつかふ程生の寂しさを感じてゐるのだ。

もう横須賀の工業は休止してしまつた。鐵板をうつ音や汽笛の絶叫は嵐が吹き去つたやうに静まつてしまつた。そして十餘時間の間鐵の觸れる忙しい轟響に惱まされてゐた市街の上には恐ろしい夜がひそ／＼とその黒い翼をひろげてゆく。俺のウキスキイも最う六杯めのグラスが空になつた。これから俺は大膽な旅人になつてこの街の Vin et Femme の生活を探らう。

横須賀より

のうへ俺はかなり酔つた自分を諏訪祠の境内で發見した。明るいアセチリン瓦斯の光が俺の眼の前でぎら／＼輝いてゐた。活動寫眞がある。見世物がある。女相撲がある。囃しの樂隊が Bourgeois の心を咬るやうな卑俗な噪響をたててゐる。そして泥酔した水兵の群が獸のやうな聲で唄ひながら群集の間を右往左往に縫つて歩いてゐる。

俺はいつの間にか路を失つて妙なバラック建のやうな平つたい家並の續いた一劃の街へ出た。白粉を塗つた醜い女が薄暗い行燈の蔭から顔を出して口々に安價な媚びを賣つてゐる。そこは光の消えたやうな寂しい街だつたけれども水兵や勞働者にとつては最も簡單な形式で下級の歡樂を購ひ得られる恐ろしい Montmartre だつた。

「なに云つてやがるんだい。あがりたくなけりやさつさとおいでよ。お前さんひとりがお客ぢやねえんだ。」と、凄じい惡罵の聲が聞えて激しく突きはなされたと思ふと、又何處からか冷たい手が出て来て俺の腕を攫んで眞暗な露路の中へ引き込まうとする。そして冷たい自意識にひやりと觸れたと思つた時にはもう遅かつた。俺は穴倉のやうな薄暗い部屋に坐つて、火の消えた穢らしい火鉢にあたりながらモツバサンの「港」といふ作を思ひ起してゐた。妹ならぬ

フランソアは右の腕に錨の刺青をしたあばずれのお龍といふ年増だつた。生れは東京、育ちは群馬の機業地、そして十四の時情夫と一緒に驅落をした話まで問はず語りに話しだした。俺はたゞ黙つて冷たい盃を唇にあてながら西鶴が描いた一代女のやうな人生を遊戯化したその告白を聞き、耳馴れない寂しい海の小唄を聞いた。

併し俺は聰明な君に對して今更港の女のありふれた現實描寫を繰かへす必要を認めない。ただその結論として堪へ難い惡酒の酔ひと、最も醜惡な現實の一片を購ひ得て失望したことを附加へて置かう。

俺はそれから又燈の明るい街と眼を喜ばすやうな美しいものを求めて彼方此方をさまよひ歩いた。そしてもう十一時に近い頃、寒い風に吹かれながらたつた一人て眞暗な海沿ひの路を歩いてゐた。何處へゆくといふあてもなくたゞ足に任せて歩いてゐた。海はもう黒玉のやうに暗く更け靜まつて、あやめもわかぬ渚の何處からとも知らず寂しげな波の音がひそかに匂ひあがつて来る。そして遠く遠く東の空にたゞひとつ富津の燈臺らしい火光が人魂のやうに明滅してゐた。俺は歩きながら華やかな人の世から追放されたやうな悲しみに浸つてゐた。何處まで

行つても冷酷な自然が俺を圍遶してゐて、路は無限に絶ゆることなく、死といふやうな暗い事實が歩一步影の如くに俺の後へ忍び寄つて来るのをありありと認めることが出来た。——俺はゆうべ一晩越後訛を語る醜い Femme の部屋で亞鉛張りの屋根に降り瀧ぐ雨の音と、港へ入るかすかな汽笛の音を聞きながら、曉の光が戸にしらむまで美しいマドンナの眸を心に描いてゐた。

俺は今三階の薄暗い部屋で騒々しい重ね草履の音を聞きながらこれを認めてゐる。ヒステリ—に罹つたやうな白けた洋燈の火がたゞひとつ消え残つて、重苦しい苦痛がじり／＼と心の底で燻つてゐる。

現實は俺の敵になつた。そしてそれはまた俺の熱愛する藝術に對して詭計をたくらむ憎むべき叛逆者だ。俺はたゞいつまでも美しいもの、充ち満ちた郷國に住んでゐたい。美のなかに生きてゐたい。

横須賀より

東京灣は今濕つばい黄昏の夢を浮かべて油のやうに重くまどろんでゐる。そして護岸の下へ打寄せる波は子守唄のやうな備い獨白をつゞけてゐる。沖に繋つたスウクナア型の帆船のほとりに群れとんでゐた海鳥の姿ももう見えなくなつてしまつた。

俺の眼前には今『埋れ木』のなかのラアエスタインのやうな陰鬱な街が開けてゐる。俺はかくまでに歴史のない生活を生れて初めて見た。祖先もなければ郷土もない、唯現實の機械力と慾望のみに従つてその日その日の生命をつないでゆく暗い努力、俺はその絶望的な光景をたゞ一目みたゞけて苦痛に似た鋭い不安を感じない譯にはいかなかつた。一度この街の住民となつたものはもう一生涯明るい太陽の光のなかへ出ることを許されぬ。社會の制裁力もこの街の入口まではやつて来るけれどもそれから先へは決して入ることが出来なかつた。そして他の市民等が幸福に酔つてゐるやうな時でも彼等住民は盲目の運命に答たれ、縛められてたゞ生きる爲めに悪戦苦闘を続けなければならなかつた。そこには工業地を漂泊して歩く恐ろしいバガボンがゐた。零落した Peter がゐた Chelkash がゐた。そしてまた酒と女の毒に爛れた放蕩家の成れの果てといつたやうな男もゐた。鐵工所の溝から流れ出る油ぎつた悪水のなかで遊んで

るる子、帆布を被つて船の舳先に佇みながらぼんやり街の灯をながめてゐる子等の中には俺は幾多の「彼等の三人」の主人公を期待することが出来る。殊に裏町から丘陵の腹へのぼつてゆく不規則な狭い街にはハウプトマンの「機匠」の系統をひいたドラマの人物がぞろぞろ歩いてゐた。そしてもの、饅頭をゆくやうな廢滅の匂ひが何處からともなく湧きあがつて大地の面に壓しつぶされた街の上を暗く醜く彩つた。

夜が来た。濕つばい大氣の底に凍えたやうなロマンチックな色をした灯が幾つとなく瞬きだした。もう俺が愈々此の街を立去らなければならぬ時が来たのだ。さらばゴルキイの友よ、健在なれ。

横須賀より

停車場へ来たら急に氣が變つて、明るい東京の街が無上に戀しくなつて来た。餘ッほどその儘東京まで乗り越してしまはうかと思つたけどやつと我慢して鎌倉で下車した。際涯もなく澄み渡つた夜の空には星の嘆きが充ち溢れて、何處をみてもたよりのない悲しみが世の中を掩つ

てゐた。

俺はたつた一人ぼつちになつてしまつた。自分の間はまた火の消えたやうな心細い生活が続くことだらう。もうどうなつてもかまはない。唯小さな心の墓を築いてその墓守になつて日を送るつもりだ。そして朗らかな朝風に海が限りなく微笑むやうない、お天氣が續いたら、俺は戀人をつくるかはりに「男性の價値」といふ喜劇を書くんだ。そのあとでありもしない戀人と素破ぬきつこをしたつもりになつてもう一つ「塔」といふ悲しい小説を書くんだ。

暇があるんなら怠けないでこのあいだのお蝶さんの結末でも書いて寄越せ。俺は近松が讀み度いほど抒情詩に餓えてゐるんだ。

鎌倉より

奈良の一夜

奈良の一日は寂しい時雨の音に暮れてしまつた。

その晩、私は四季亭の二階座敷で、荒池にさめく雨の音と落葉の囁く聲を聞きながら、大阪から来る筈になつてゐる吉井勇氏を待つてゐるが、約束の時間になつても何の音沙汰もない。黄昏の薄明りは刻一刻に障子の面からうすれて、いつともなく日はとつぷりと暮れてしまふ。物音もない閑寂な古都の夜は春日の杜をこめ、荒池の面をこめ、終には燈影の瞬く奈良市街のうへまで際涯もないその翼をひろげてゆく。

階下からはやがて十八になるとか云ふ綺麗な顔をした仲居があがつて来て、

「ほ、旦那はん、電燈もおつけしまへんで、何をしとるやすの。ほ、、、」と、云ひながら薄闇のなかに白い腕だけほのみせながらばつと電燈をとす。紫檀の机や、大桐の火鉢や、床の間の掛地や、旅行鞆などがそれと一緒に眼が覺めたやうにちろ／＼輝きます。

所在なさに荒池の面をうつとり見詰めてゐた私は、それを見るとまるで別な世界へ甦つたやうな気がして旅路の夜の歡びを思ひ出しながら、

「姐さん、濟まないが支度はまだかね？」と云つて、先刻注文して置いた夕飯を急ぐ。

仲居は眞白な乳齒を出して愛想らしく微笑みながら、

「おうきに遅うなりまして、えらい濟んまへんどす。もうちつきに持つて参りますさかい、」と、云つて、そこらを片附けながら「あの、お連れはんえらい御ゆつくりどすなあ。電車やつたら四十分ほどで大阪から参りますのどつけど、、、」と、私の方を見る。

私は吉井氏のことだから又何處か南地あたりの茶屋へても引懸つて宗右衛門町の夜を讚美してでもゐるのではあるまいかと少しは氣が、りになりながら、

「さういへばもう六時だねえ。五時には確かに此地へつくやうに手順をきめて置いたんだが、…散財のすきな人だから、何處かで引懸つてしまつたのかも知れない。君のやうな綺麗な人がゐると知つたらもうちつと早くやつて来る筈だがねえ。」と、私は冗談のひとつも云はずにはゐられなかつた。

仲居はそれを聞くと艶めかしい嬌態をして、

「ほ、、、。阿呆らしい、旦那はんもようてんがうお云ひやすえなあ。ほ、、、。」

「いやてんがうぢやないさ、全く君は綺麗だよ。奈良の旅籠には惜しいねえ。」

「おうきに有難うさんで、ほ、、、。片頬に笑靨の入るその口には柔らかな京訛りがふさはし

い。

そこらですつかり片附けてしまふとやがて仲居は又階下へ降りていつた。それと引違へに今度は年老つた方の仲居が朱塗りの膳部を運んで来て、

「どうもえらいお待遠さんで。」と、云ひながら縁近く坐つて私の前へそれを据ゑる。時節もの松茸や牛蒡の鰻巻きが宿屋らしい匂ひを四邊へ漂はす。

酒の酌はさすがに若いのが代つてした。年老つたのが膳の形をつけて降りてゆくと、すぐ又若いのが盃洗のなかでちん／＼盃を鳴らしながら上つて来て、同じやうな言葉を繰り返しながら膳の向ふへ坐る。膳のうへには鐵哉ごのみの小さな盃が置かれた。

酒は稍口に苦かつた。その前の四日は宇治の花やしきで盃に咽ぶ興聖寺の鐘聲を聞きながら飲み明かしたので、今宵の酒はその酔ひを呼びかへすやうに胸にしみてゆく。この幾日の間、京洛の山河は酒間に映する幻想のやうにみえて、いつも酒氣なしに蒼空を振仰いだことがないので、記憶がまるで走馬燈のやうに慌たしく移つてゆく。

一杯、二杯と盃を重ねてゆくうちに私は漸次と氣の減入るやうな寂しい酔ひ心地を覺えて

来た。戸外では雨の音がひそかに歌歌いてゐる。吹く風もない秋の夜の静けさは遠い旅に出てゐる身を悲しめとばかり聾々と私の胸に迫つて来る。しかも待つ友は僅か一時間の行程にありながら何のたよりも寄越さない。

私が黙つて盃を啣んでゐるのをみると、仲居は自分も寂しくなつたやうに、

「ほんまになんだすなあ、おいでやすちうておいでしまへんのは可かんもんどすな。いといてやす先が分つてましたら、一遍電話で問ふとみやしたらどうとす。」

「さあ、それが何處と分つてゐりや苦勞しやしないさ。あれほど堅く約束して置いたんだから來ない譯はないが、……」

「そらお出でやすにはきまつてまつしやろけど、そないにしてお待ちやすのが難儀とすわ。」

「待つ身に辛き鐘の聲かね。それも待つのが男ぢやちつともはずまないね。」

「阿呆らしい、どうや分らしまへんわ。大阪から藝妓はんでもおいでやすのと違ひまつか、ほ、い、い。」

「冗談ぢやない、藝妓と一緒にならこんな奈良なんかへ來やしないよ、宇治なり、六甲山なり、

まだずつと粹なところがあるね。は、は、は。」
 「まあ、きつい云はれかたどつせなあ。そないにお云ひやすけど、奈良かて粹におつせ。そ
 ら京や大阪とは違ひまつけど、……恨みがましく云ふ其眼には春日の杜陰に住む鹿のやうな
 愛らしい光があつた。」

私はその時ふつと奈良の廓を思ひ出した。高御門、木辻、その名の古めかしさ。その昔梅川
 忠兵衛の淨瑠璃にも唄はれた奈良の旅籠や三輪の茶屋、三味線のしんみりと絃にからむ音じめ
 にふさはしいその情調が今も猶ほ紅殺の色褪せたそのわたりの格子先に残つてゐるやうな氣が
 して板屋にむせぶ時雨の音を聴くにつけても偲ばれるのは秋の雨に濡る、その廓の絃歌の聲で
 あつた。

私は仲居に廓の様子を訊ねたあとで、勸めらるゝまゝに二三人妓を招んでみる氣になつた。
 それがやつて来るまで私は仲居を相手に銚子の數を重ねながらさまんな藝術の都の思ひ出に
 酔つてゐた。

それから半時も経つたと思ふ頃、階段の方でひそ／＼と足音がしたかと思ふとやがて障子が

すうつと開いて、そこからこつてりとつくつた紅づくめの舞衣の袖がみえて、

「姐はん、こゝだつか」と、云ふ可愛らしい聲が聞える。

「ほ、誰れえ？」と、云つて仲居は銚子を置いて起つていつたが、

「お、駒菊はんか。姐はんは來やはらしまへんのか」と、廊下をさしのぞきながら云ふ。

「おうきに、姐はんもすぐに寄せて貰う云うてでした。」

「さうか、ま、お入り、お客さんはあんだの好つきやんどつせ。」

「ほんまだつか？ 嘘だつしやろ。」と、云ふ聲と一緒にそこから小さな舞妓がたつたひとりて片
 手に鼓箱を重さうにさげながら、

「おうきに」と、云つて入つて來た。そして私の傍へ來て坐ると、仲居の方をこましやくれた

眼先で睨んで、いきなり。

「厭やしい、姐はんで悪い人だつせなあ。」と、云ふ。

そこへ又つゞいて十八九の若い妓が、

「おうきに」と、云ひながら入つて來て、今度は座に着くとすぐに、

「姐はん、あの階下からこれを。」と云つて、一通の電報を襟の間からぬいて仲居に渡す。仲居はちよつと表書きを讀むと、

「あ、こら旦那はんのやわ。」と云つて私の方へ差出す。

封をきつて見ると、なかには唯簡單に、「コンヤソネザキドマリイサム」とある。

私はその曾根崎と云ふ言葉でなんとも云へない寂しさを覺えた。

仲居は私の顔色でそれと讀んだか、

「あのお連れはんおいでしまへんのか？」と、云ふ。その顔までが私には妙に佻しく打沈んでみえた。

舞妓が二人、若い藝妓が四人、これだけ揃つた頃には私はもう全く寂しさのどん底へ落ちてゐた。一番後から来た妓が、

「もう雨は霽りましたえ。」と、云つたので、私はそつと障子を細めに開けてみたが、ふと氣づくくと荒池の面はいつのまにか樹立の陰にほの白く光つてゐる。もしやと思つて東の方をさしのぞくと、丁度軒下の松が枝に十三日ばかりの月が雲のきれめから片破れ月のやうになつて浮び

出てゐる。そして小舎へ入りそびれた神鹿が、何處か遠くの方で啼きかはしながら春日の杜の奥をさまよひ歩いてゐる。

私は秋寂びたその雨後の風物のなかで、肌にしむ夜寒と、もになにかなしに薬師寺、西大寺、さては又秋篠の寺々で菊花の薫りをとむる梵鐘を撞き鳴らした往古の奈良の都の心持ちを思ひ出さずにはゐられなかつた。

港 か ら

到頭雪が来た。

二三日前から空の色が妙に薄暗く濁つて、晝なかでも黄昏のやうな陰鬱な影が何處となく四邊にどんよりたち廻んでゐるやうに思はれたが、到頭昨夜になつて海上から吹き寄せる寒風とともに恐ろしい吹雪がこの港街のうへに襲ひか、つて来た。そして夜ひと夜降りとはした揚句、今日もまた午過ぎから一層激しい降りになつて、今に至るまで小止みだにせず降り續いて

るるのである。

柱時計の針は今丁度午後の三時を指してゐる。それにもう泥灰色に混濁した寂しい黄昏が
 大空をひき包んで夜はすぐ眼の前に迫つて来た。硝子窓から戸外をみると、今朝までは形の見
 分けられた家々の家根が何時の間にかもう全く雪に掩ひ盡されて、遠くから眺めるとまるで吹
 き溜りのした丘陵のやうに寂しく建ち連なつてゐる。そしてその不思議な市街の彼方には港内
 に碇泊した汽船の櫓や、煙突が悉く雪に包まれたまゝ、氷柱のやうにとげとげしく林立し
 て、いつもならば高島の岬から防波堤を越えて一面に廣がつてみえる濃緑色の海が、今は唯
 鼠色に凍てついた氷原のやうになつて徒らに眼界を遮つてゐるばかりである。

俺は今窓の下へ机を持ち出して此手紙を書いてゐる。俺のすぐ側には鐵製の小さなストーヴ
 が微かな音をたてながら頻りに燃えさかつてゐる。俺は時々筆を擱いて、細かく割り砕いた松
 薪を一つづつ、そのなかに燻べなければならぬ。そして一つの薪を投ずることに眞紅な焰の舌
 は急に勢ひ得てめらめらと明るく燃えあがる。それとともに俺の頭には種々さまざま新しい
 考へが連鎖をなして漸々と湧きあがつて来るのである。

石狩以來長いこと消息を絶つたが、その後俺は相變らず文字通りの漂泊を續けてゐる。石
 狩へはあのあと一週間ほど滞在してゐた。格別これと云つて面白いこともなかつたが、それで
 も俺は何となく彼地を離れかねた。全く旅役者の氣持になりきつて、あの湊座の穢い樂屋に
 ころころしてゐる生活を俺はどうしても思ひ捨てることが出来なかつたのだ。

併し、俺達は愈々別れなければならぬ時が来た。一座は約定の日數を打ちきつて、越年の
 仕度をするために再び石狩川を廻つて旭川の方へ行かなければならなかつた。そして其處で
 幾らかの上り錢を残したうへで小樽の太夫元のところへ歸る豫定を立てた。

さすがの俺ももう一度あの石狩河畔の寂い町々を経て遠く旭川の町の方まで従いてゆく氣に
 はなれなかつた。殊に今にも迫つて来る雪と、膚馴れない寒氣とは俺を根底から威嚇した。て、
 種々思ひ惑つた末、到頭俺は千秋樂の日を名残りに一座と袂を分つことに心を決した。

可成長い間の馴染ではあつたし、それに一座にとつては最早なくてはならない者のやうにな
 つてゐること、彼等は誰彼の別なく、頻りに別離を惜しんだ。そして樂の晩には座頭がな
 けなしの財布を絞つて酒肴を買ひととのへ、舞臺裏の溜部屋で貧しい別れの宴を開いて呉れ

た。もう何時達はれるか分らないといふやうな悲しげな言葉が一座の人々の口に上つた。殊に扇昇は一番馴染みが深かつた。口にには云ひ盡せぬやうな深い感情を眼に表はして、盃の數を重ねながら頼りに唄つた。

その翌日の午後、俺は座頭や、扇昇や、田之助に取圍まれながら寂しい海沿ひの汽船宿で小樽通ひの船を待つてゐた。朝から寒い風の吹きしきつてゐた空には、時をり日の光がかげつて、蒼ざめた海の彼方には天鹽境の連山が雪を戴いたま、くつきりと浮きあがつて見えた。そしてすぐ下の砂濱には魚の市がたつて、異様な風體をした漁夫や、魚商人が此處彼處に打群れて、符牒のやうな言葉を聲高に云ひかはしながら右往左往にぞよめいてゐた。薄い日の光のなかに滑かな魚の肌や、秤の金具が時折思ひ出したやうにびか／＼光つた。

送つて来た彼等は妙に言葉少なになつて、時々取つて附けたやうな高笑ひをするばかりで、何處となくしんみりした感情が皆の眼のうちに滲んでゐた。俺は云ひ甲斐もない名残惜しさに胸を壓されて、幾度か決心を翻へさうとしたが、そのうちすぐ岸近くで發船を報ずる汽笛の音がなが／＼と響いて、同船の客は艇舟に乗り移る仕度をしはじめた。

愈々艇舟が濱を離れやうとする時、扇昇は波の水沫に濡れながら、
「てはまあ、御機嫌よう。體さへ健固にしてありや、又何時どこでお眼にか、れるか分りませんから……」

「さうとも、さうとも。ならば今度はどうにかして東京で逢ひ度いもんだ。」と、俺は聲の慄へを人に覺られまいとして態と大きな聲で云つた。

「まあ、どうなりますか、先のことは分りませんが、……」と、扇昇は急に先を云ひ濁んで、唯俺の顔をまじ／＼眺めてゐた。

船はひく波と一緒に岸を離れた。

「御機嫌よう、御機嫌よう。」と、いふ聲も波の音にかき消されて、濱に立つた彼等と俺との間は次第々々に遠のいて行つた。そして再び振り返つた時には、鼻頭を眞紅にしながら寒い風の吹きしきるなかにしよんぼりと突立つてゐる扇昇の姿だけが波の間に隠見した。彼はもう一度寂しく微笑みながら、双手を軽く打振つて手招ぎするやうな格好をした。俺はその時、もう再びこの年老つた憐れな旅藝人に逢ひ得る期のないことを固く信じて、心のなかに密かに最後の

別離を告げた。

お、憐れなる永遠の旅人の群よ。俺は到頭懐かしいその群を離れて、ひとり寂しく住み馴れた自己の生活の方へ歸りゆかねばならないのである。その寂しさをしみじみと感じた時、俺の双眼には涙もない涙が湧いて彼等と出會つてから別れるまでのさまざまな面白可笑しい出来事が電光のやうに閃めき過ぎた。そして俺は小樽へ着くまで冷たい船室の板壁に背を寄せかけて、蒼ざめた悲しみと暗い悔恨の念に責められながら頼りに彼等のうへを思ひつゝけた。

小樽へ着いたのはもう夕陽が後志嶽の西へ沈んだ後のことであつた。

遠く近く列を亂して碇泊した多くの汽船には眞蒼な燈がいくつとなく怪獸の眼のやうに瞬いて、山の中腹まで這ひ上つた市街には濃い青闇のなかに小さく劃られた燈火の列が無数の縞を描いてゐる。そして時折何處からともなく街のどよみが海を渡つて、かすかな汽笛の聲とともに淡い悲しみが港の隅々まで廣々と瀰漫してゐた。甲板に佇んでその賑やかな光景を見渡した時、俺は久しい間叛いてゐた別世界へ連れ歸られたやうな氣がして云ひ知れぬ懐かしさを覺

えない譯にはいかなかつた。

一時間ばかり経つて後、俺はやつと小さな舢舨に乗せられて、人氣の薄くなつた棧橋へ上ることが出来た。氣忙はしい一日の勞働を終へて、海岸の荷揚場は何處も皆ひつそりと靜まり返つてゐた。そして荷揚場も聞えない石舗の廣場には、薬屑や、紙片が寒い風に追はれながふらふらと其處此處にふためき歩いて、貨物の蔭を縫つて来る宿引の提灯も何處となく頼りなげにみえた。俺はその時、急にたつた獨りになつた心細さをしみるゝ感じて、世の中のすべてから突き離されてしまつたやうな寂しい氣になりながら、夜航の汽船で樺太へ送られる移民達の休んでゐる待合室へ入つて行つた。そして彼等と肩を並べて坐を占めながら、此れから先の旅程をどうしやうかと頼りに思ひあぐんだが、格別にこれと云つて定まつた考へも浮ばないので、ひとまづ小樽へ落着くことにして、氣持の好き、うな海沿ひの安宿を探して歩くことにした。海岸通りから少許小路へきれると、もう其處邊は石造りの倉庫とこま／＼した飲食店の建続いた港特有の穢らしい町だつた。往來の人々は皆異様な外套を頭から引被つて、體の周圍にはいづれも寂しい海の匂ひを運んでゐる。そして何處の店口からも潮風に錆た調子の高い聲音が

殊更に耳にたつやうに聞えて来た。

爪先あがりの狭い小路を右左に折れ曲りながら上つてゆくうちに、俺はとある崖端に建つた三四軒の飲食店の間に旭屋旅館と書いた紅い軒燈が出てゐるのに気が付いた。表口は二階建の西洋建築で、青く塗りつぶした板羽目の間には小さな硝子窓と、煤けた烟突がみえて、不格好な露臺が店口を掩ふやうに低く突出してゐる。そして店口の硝子戸のそこには汽船の出帆時間を書いた黒板が幾枚となく懸かつて、船積の荷物らしい菰包みがその後には堆かく積み重ねてあつた。

俺は港といふ空気にふさはしいこの古びた建てかたがひどく気に入つてしまつた。と、店の奥に點つた笠の大きな洋燈までが何となく深い情趣を含んでゐるやうに思はれて、殆んど何等の躊躇もなく少時の假寓としてこの宿を選ぶことに心を決した。

合宿の客はひとりもなかつた。俺は港に面したこの貧しい、天井の低い室を借りて、朝夕顔を出す俱知安生れの小婢を相手に寂しい日を暮すことになつた。そして食物の不味いものも今ではさして氣にもならず、窓掛けのない硝子窓も却つて港の展望を恣にするのに便利だつた。

小樽へ来てから今日でもう五日目になる。俺は毎日晝の間は漫然と時を過ごし、晩になるといつても此土地の人々がするやうに頭から毛布を引被つて、海に近い小路を當てもなくぶらぶらと歩いて歩く。氣に入つた店があればそこへとび込んで、小商人や下級船員と云つたやうな種類の人間と膝を突き合せながら、口を引緊めるやうな悪酒を飲む。そして彼等の間に語られる港の物語をその日その日の新しい興味を以て聴きつくす。そして酔へば必ず棧橋へ出て、刺すやうな寒風のなかに佇みながら、黯ずんだ汽船の姿や、蛇のやうに長く延びた防波堤の姿を時の移るのも打忘れて眺めつくすのである。

かういふ時、俺の胸には未知の異境にさまよひ歩いてゐる憐れな自己の姿が、傷ましいまで鮮かに描き出される。そして、油のやうな重々しい孤獨の悲しみが自づと胸に充ち溢れて、今はもう遠く別れ去つた旅役者の一座が無上に慕はしくなつてくる。扇昇はどうしてゐるだらう。田之助はどうなつたらう。俺は戀人の名を繰返すやうな氣持で彼等の懐かしい面影を幾度となく心に憶ひ起してみるのである。

併し、俺にとつてはそれももう餘り新しい経験とは云へないのである。それと同時に漂泊の道程をよく知つてゐる君にとつてもこのくだくしい哀傷的な叙述が餘り深い興味を與へまいと信ずるので、俺は更に筆を進めて、小樽で得た事實の一つを君に報告しなければならぬ。その事實といふのは此の宿屋の主人の身の上である。

彼はとつて四十九だと云つてゐるが、日に煙け黯んだ面貌をみると、どうしても六十より若くはみえない。それに人一倍むつ、りて、始終陰鬱な底氣味の悪い眼眸をしてゐるので、初めて逢つた人は必ず一種の恐怖を感じない譯にはいかない。若し彼に油染みたボロ洋服を着せて、シヨベル片手に鼓風爐の前へ立たせたならば、彼は暴動の主謀者として絶好な兇漢を寫し得るだらうと思はれるやうな男なのである。

長い散歩を終へてふらりと宿へ歸つて來るとき、店口の硝子戸を騒々しい音をたてながら引開けると、薄暗い帳場の隅から、

「お歸んなせえ。」と、愛想氣のない、棒のやうな聲が聞える。そしてぼんやりした薄闇のなか

に彼の險相な長い顔がふつと浮び出る。彼はいつても定まつて十五ばかりの醜い娘に酌をさせ、そこで晩酌をやつてゐるのである。

「馬鹿に寒いぢやないか。」と、階子段を上りながら俺の方からも聲をかけると、彼の顔にはいひやうもない暗い影が浮いて、

「もうぢきに雪がやつて來まさらあ。」と、その雪を待ちあぐんでゐる様な意地の悪い聲で呟く。そして盃の縁を噛むやうに酒を啜りながらその儘ふつりと口を嚙んで外方を向いてしまふ。

俺はその容子をみるといつてもひどく不愉快な氣持に打たれて、軽い反感を起さない譯にはいかない。唯黙つてそのまゝ、階段をのぼつて、人氣のない冷たい俺の室へ歸る。そして小婢が點けてくれるストーヴの火にあたりながら彼の身の上を種々に想像してみる。

それから一時間ばかり経つと、必ず階段のところでもしりみしりと重い足音が聞えて、入口の戸がごとりと開く。そこから主人の瘦せた體がぬつと入つて來る。その時はもう彼は全く別人のやうになつてゐる。頬は紅く酒に火照つて、陰鬱な額口の皺ものびて、暗い眼眸さへ何處となく濕みをもつて人懐かしさうにみえるのである。

彼はその儘ずつとストーヴの側へ来て、自分で薪をくべながら、「寒うがすな。」と、俺の氣を讀むやうに靜かに云つて、粗雑ながら何處か謙遜したやうな口調で俺の話相手にならうとする。譬へ俺がそれに返事をしなくても、彼は返事を絞り取らうとするやうに話を仕向ける。そして彼が船員であつた時代の豊富な閱歷やいろ／＼な面白い海上生活の話の間はず語りにやりはじめるのである。

昨夜、人が寢靜まつてから後のことであつた。彼はいつものやうに強い泡盛の匂ひをさせながら上つて来て寢そびれて困つてゐた俺を引起こして、又新にストーヴに薪を加へながら一場の物凄い話をして聞かせた。俺にはその話が彼の半生の海賊のやうな生活と、その背景になつてゐる極北の恐ろしい海の心持とを髣髴させるやうに思はれて、鋭い戰慄を感じながらも非常な興味をもつて聞いた。

その話はかうである。……

彼はその頃小樽の漁業會社の持船の運轉士を勤めてゐた。その船は毎年冬の漁期になるとお

もに樺太の北端から占守の方面へ臘臘獸獵に出かけた。その年も例年のやうに十一月の月始めにはもう雪と氷に閉ざされた千島の附近に出獵してゐたが、生憎にも目星しい海獸はひどく不獵で、折角見込をつけて行つた方針も途中で全然放擲しなければならぬやうなみじめな羽目に陥つた。で、彼等は已むを得ず一旦小樽の根據地へ引歸して、漁具の積みかへをした上で更に天鹽の沿岸へ鱈漁に出る計劃を立て、其の月の下旬にはそろ／＼南の方へ針路を轉じて歸途に就いた。

香深の港へ着いた頃には、寂しい海上生活をするもの、常として、彼等の心はまるで野獸のやうに渴してゐた。で、錨を投げるとすぐに魚油の幾樽かをそつと魚商人の手に賣渡して、その金を懐にしたまゝ、漁期を當に小樽の方から入り込んでゐる女や酒の自由になる街へ上陸した。

あり金の續く限りそこで彼等は飲んでのんで飲みあかした。金がなくなると今度は内地から來てゐる體の弱い出稼ぎの漁夫に血腥い喧嘩を賣つて、その仲裁の代として又酒を買はせた。そして一週間ばかりの間恐ろしい掠奪者のやうにそこいらを散々荒し廻つた後、漸う再び香深

を出帆した。

その晩は薄じい吹雪であつた。さすが北海の怒濤には馴れた者共のことゝて、甲板では勇ましい叫び聲が此處彼處に起つて、眞黒な防水衣に身を固めた水夫達は烟のやうに渦巻く雪と、波の飛沫に粉れながら甲斐甲斐しく立働いてゐた。彼は漸次と陸岸の方へ吹き寄せられてゆく船の針路を案じながら、補助の汽罐に火を入れさせようと思つて、甲板から汽罐室の方へ降りて行つた。そして二番船艙の前まで來かゝると、彼は騒々しい波の音のなかにふと異様な物音を聞いた。はじめは戸か何か、船の動搖につれて軋むのだらうと思つて何氣なく行過ぎようとしたが、よく耳をとめて聞くとそれは正しく人の呻き聲で、而も息も絶えだえな女の聲だつた。

彼は激しい好奇心に驅られて、突如その戸を開け放した。そして手に持つた角燈を振り照らして四邊をみると、幻のやうな一道の半圓形の光のなかには魚油の樽や、鹽俵が朦朧と浮び出て、薬屑や漁具の堆く積んであるほかには人らしい姿もみえなかつた。で、彼は呻く聲をたよりに腰を屈めて漸次と奥の方へ入つて行つたが、常は密閉してあるところなので踏ゑたやう

な重苦しい腐魚の匂ひが息も出來ぬほどあたり立ち罩め、空氣は鹽氣で氣味わるくしつとりと汗ばむてゐる。彼は樽と樽との間を探して歩いたが、そのうちに呻き聲が急にはたと止んで、角燈の光のなかに薄白い一個の怪しげな肉塊を發見した。

それはまだ十六七の小娘であつた。鹽びきにした魚肉の上に薬を敷いて、殆んど半裸體のままそのなかに横たへられてゐる。そしてその側には上に掛けてゐたらしい帆布の古いのが散々に揉みくちやにされて、長い間この女が其處らちう轉々と身悶えして轉げ歩いた痕跡を歴然と示してゐた。

彼が近寄つて來るのをみると、娘は又急に憎えたやうに聲を振り絞つて泣きはじめた。そして激しく身悶えしながら薬のなかへ俯向けに顔を伏せたが、とみると、手も足も太い麻繩でしつかり緊縛されてゐるのである。彼は思ひもかけぬ光景に驚かされて、突如その肩へ手をかけ、體ごと引起して、角燈の光で顔を見た。

それはお鶴といつて香深の下濱にある小料理店の婢だつた。人前では碌々口もきけないやうな氣弱ものでいつも涙ぐむやうな哀れつばい眼つきをしながら店先にしよんぼり坐つてゐるや

うな女だつた。彼は、蚯蚓影のした、變りはてたその顔を見ると、この慘たらしい所業が水夫達の手によつてなされたのを直覺つたが、それと同時にかうした荒くれた海の生活に馴らされた彼の頑な心には憐愍よりも先づ一種の痛快な反抗心が起つて、水夫達の知らぬ間にこの女を彼等の手から奪ひ取つてしまひ度くなつた。で、その儘ものも云はず縛めを解いて、冷たい裸體を荒々しく引抱へながら船首の方にある彼の室へ連れて行つた。そして吊床から毛布を引降ろして来て、凍えた體に被せてやりながら、

「靜かにしてゐないと、また酷い目に逢ふぞ。」と、威嚇するやうに激しく云ひ放つて、あとで出入りの出来ないやうに戸を堅く閉ざした儘、彼は任務を果すためにまた汽罐室の方へ降りて行つた。

吹雪が少しづつ、風か、つたのはそれから二時間ばかり後のことであつた。

甲板の方が暇になると彼は次の番のものに交代して貰つて、いそいそしながら再び彼の室へ歸つて来た。お鶴はその時室の隅に突俯して、頭から毛布を被つたまゝ、しくしく聲を忍んで泣いてゐた。ざあッ、ざあッと怒濤が舷を打つ度に彼女は鋭い恐怖と、寒氣のためにふるぶ

る肩を慄はせながら身の置きどころもないやうに其處邊を伺つて歩いた。彼はほんやり突立つたまゝ、じつとその様を眺めてゐるが、やがて香深から買込んで来た酒を取出して来て、彼女のすぐ側に坐りながら頻りにそれを叩つた。そして親しげな口調でなだめ賺しながらかうした慘たらしい目に逢はせられた頭末を事細かに訊ねはじめた。

最初は唯泣くばかりで一向に要領を得なかつたが、そのうちに漸次と氣が靜まつて来たとき、先づ彼女は涙を押拭ひながらくどくどと身の不幸を訴へはじめた。彼女は小樽の町端れにたつた一人の母親を持つてゐた。その母親のために彼女はまだ肩上げさへとれぬ纖弱い身を賣つて、留前から禮文三界まで流れて歩かなければならなかつた。便船の都度に必ず來る母親の手紙をみる度に、彼女は海の彼方に眺められる北海の山々を焦りつくやうに戀慕つた。そしてどうにかして島から逃げ出して、もう一度懐かしい母親の家へ歸り度いと思つた。情を知らない同船の水夫達は彼女の願望を巧に利用した。戀しい母親に逢はせてやると云つて厭應なしに彼女を船に乗せた。そして香深の港を出るとすぐ、彼等は彼女を暗い船艙の隅へ監禁して、散々に彼女を弄んだ。はじめの間は母親に逢ひ度い一念に驅られて身を切られるやうな切なさ

堪へてゐたが、到頭しまひには耐へきれなくなつて氣狂ひのやうに暴狂ひながら船倉から遁れ出ようと跳いた。鐵のやうな水夫達の手はやがて彼女の五體を麻繩で緊縛してしまつた。彼はその殘酷な物語りを聞いてゐるうちに何とも云ひやうのない快さを覺えて來た。今迄の生涯の間に幾度となくかうした慘い事實を見聞きもし、又彼自身でも手を下して行つたにも拘はらず、彼は唯の一度も悔恨といふものを感じたことがなかつた。そしてそれが却つて海の上に住むもの、特權で、もあるやうに、或種の誇りさへもつてゐた。で、彼はお鶴の力なく首垂た姿を見ると、それは當然自分に投げ與へられた犠牲のやうな氣がして、「今度は俺の番だ」と、心のなかに北叟笑みしながら、突如彼女の方へ手を投げかけた。

お鶴はその様をみると、憎えたやうに眼を大きく睨りながら彼の手を振りきつてふらふらと立上つた。そして室の中を彼方此方と逃げまはりながら有りあふ差棒を拾ひとつて、必死になつて抵抗した。棒片は幾度か彼の肩先や腕を強く打つた。そしてふとした拍子に思はず受けはづして、その尖つた尖端が彼の頰口を斜にさつと傷つけると、全く獸の心になりきつてゐた彼は俄に火の如き憤怒を感じて、阿修羅のやうにたけり狂ひながら到頭彼女を室の隅に追ひ詰め

た。そして眞蒼になつて今にも鋭い絶叫を發しようとしてゐる彼女の喉笛を上からぐつと抑へつけて、五體も砕けよとばかり強く強く抱き竦めた……

暫くの間はまるで夢中だつた。そのうちに漸次と怒りが靜まつてくると一緒に彼は、自然と抱きすくめたその體を少しづつ、ゆるめた。と、何うしたものかお鶴はその時はもう全く腑がぬけたやうに力を失つて、節くれだつた彼の腕の上へぐたりと倒れか、つて來た。彼は野獸が餌食を弄ぶやうに異様な冷たさをもつた彼女の體を虐げた。

明らかな意識が彼の頭に甦へつてきた頃には憐れなお鶴は全く蒼ざめた死色に掩はれて、冷きつた手足を蟹のやうに床の上へ投げ出してゐた。ほの暗い油燈の光はその淺ましい死態を物凄く照し出した。その刹那、彼ははじめて自分の演じた兇行をはつきり意識して、思はず悚然として戦慄しながら途方に暮れてしまつた。

それから一時間ばかり経つた後、彼は荒蕪に包んだお鶴の死體をしつかり抱いて、雪明りのぼんやり立ち灑んだ後甲板のうへを猫のやうに足音を忍びながら船尾の方へ匂つて行つた。そして四邊に人氣のないのを見すました後、麻繩を結びつけたその菰包みを手早く暗い水の面へ

するすると手繰り上げて、船の進みとともにそれが何處ともなく流されてゆくのをみとゞけると彼は持てるた繩の端をそのまゝ、つツとはなした。そして少時の間、力のぬけはてた體を凍てついた漁具の蔭に隠して、死體の流れ去つたと思はれるあたりをじつと眺めてゐたが、際涯もなく廣がつた海の上にはいつともなく蒼ざめた曉の色が喘いで、目路の果て遠くほのみえる雲の裂けめには不思議な形象をした北斗星がきらきら謎のやうに輝いてゐた。彼はその時、今迄に一度も経験したことのないやうな名状すべからざる恐怖を感じて、周章て、自分の室へ逃げ歸つた。

それ以來、彼は急に船員といふ職業が厭になつて、その後一箇月も経たないうちに船を降りてしまつた。そして夕張の炭坑地を長いこと歩いた末、僅かばかりの資本をつくつて今のところに旅館を開業した。それからもう十年近くも歳月が経つてゐる。二度貰つた女房にも死に別れて今ではたつた獨りの娘を相手にその日の寂しい生活を營んでゐる。そしてその娘が漸次とお鶴の年頃に成つて來るにつれて、彼は何とも知れぬ悔恨の念に胸を刺されるのであつた。主人の長い物語りはそれで盡きてゐる。

俺はその物語りが俺の心象の面に描きだした或種の想像をたゞ矢鏢に立體的に記述してみたに過ぎない。事實はこれよりもつともつと物凄なものではなければならぬ筈である。

雪はまだ盛んに降りしきつてゐる。時折硝子戸に吹きつけるそのもの音がさらさらと喘ぐやうに氣味悪くひびく。そして何處をみても純白な積雪と、骨を嘔むやうな鋭い寒氣がもの寂しく四邊をひき包んでゐる。俺は丁度死に取圍まれてゐるやうな戦慄を感じながら、意味もなく屠られたお鶴を憶ひ、また遠く別れ去つたかの旅役者の群を思ひ、いつかしら眼の前に廣がつたさまざまな人生をその究極するところまで考へ盡さなければならぬやうな張りつめた氣になつてゐる。そしてそれと同時に小なる自己が全く銷磨しつくされるまでこの廓落とした北海の天地をさまよつて歩かなければならぬ運命に思ひ至ると、俺はまたすべての感情に裏切る苦いにかい苦笑を洩らさない譯にはいかないのである。

夜は更けた。俺はもう筆を擱かねばならぬ。美しき燈火の幻影に飾られる都會に住む友よ。さらば、さらば。

古市

新道の廓にある戸田家から古市までの途は丁度宇治山田の繁榮の推移を語る遺跡のやうなものであつた。兩側に建ちつゞく何々太夫といふ嚴めしい看板を懸けた大厦高樓は當年般盛の面影だけを残して、灰色に晒された板羽目や、大きな武家門は何とも云へない傷ましい姿をしなから住む人もないやうにひつそりと静まり返つて居る。垣々とした一路は石灰のやうな細かい砂塵に掩はれながら冴えかへる月の光のなかくつきりと白く先々と迂曲してゆく。紅黄い軒燈のともつた店屋にも人影が寂しく、寒念佛のひと群れが冷たい夜風のなかを滅入るやうな鉦の音を響かせながら通り過ぎていつたあととはもう往來の人にもまるで出逢はなかつた。

私は古市を見るときいふ大きな期待をもつてその寂しい夜道に伸を急がせていつた。前庇をかけた伊勢獨特の家造りを眺めてゆくうちに、その暗い町筋の様子から古めかしい道中圖繪の風俗が思ひ起されて、もう今からは何十百年の昔、諸國の參宮客が或は駕籠で、或は徒歩でこの街

77 道をぞろぞろ古市の方へ歩いていつた時代の面影が髣髴として浮んで来る。今宵の泊りは油屋か、備前屋か、旅に疲れた體をひと夜さとまりの小女郎の情に任せて、放恣な歡樂に酔はふとするその心持ち、殊に伊勢路は京大阪を除いての色どころである。旅人の張りつめた心持は此處らあたりまで來懸つた時、どんなに楽しく時めいていつたことであらう。

そのうちに伸がとある小橋を渡るとそこからは又兩側の家並がたてこんで來て、小さな宿屋の数が漸次と増えてゆく。御泊りと書いた行燈の文字もそのまゝ、昔で、ほの暗い電燈の點つた店先には女中達が寒さうに肩をぢめながら大火鉢に寄り懸つて居眠りをしてるやうな家もある。又雜貨を商ふ小店なども一軒二軒とびとびに起きてゐて、その店口には夜鷹蕎麥のやうな屋臺がしよんぼり止つてゐたりした。

道が大きく曲ると今度は私の眼の前には斜に眉を壓するやうな峻坂が見えて來た。伸夫はそこまで來ると喘ぎながら、

「旦那はん、これが相の山ちう坂でがす。こゝ登つたらもう古市ですに。」と、いふ。
相の山、聞くも懐かしい名ではあるまいか。道中圖繪の肩のところこまを入れて色摺にし

たなかへ書かれる名としては最も相應はしいものではあるまいか。

俣夫は登り馴れてゐると見えて、腹のところへ一寸梶棒を預けてそのまゝ、大跨にその坂へかかつてゆく。山田の停車場から大廟までは電車や自働車の道が便利に開かれてゐるので、昔の本街道であるこの相の山にはもう到底再び恢復することの出来ないやうな衰顔が見えてゐる。さう思ふと黄い煤けた提燈に照らし出されたほの白い路の面までが妙に疲れきつてゐるやうにみえるのであつた。

やつとのことと坂を上りきつてしまふと、やがて俣は古市の廓へ入つていつた。兩側につゞく家々は大方宿屋と妓樓で、なかには烏や蕎麥の看板を出した小さい飲食店などもある。妓樓の門口には大きな暖簾がか、つてゐて、その前には引女らしい女の影が黙々としてみえてゐる。そしてそこから流れ出る燈の光のなかをそれでも偶に嫖客が一人二人づつ通つてゆく。

ふと聞くと何處か遠くの方で太鼓を入れた絃歌のさんざめきがかすかに聞えてゐる。何の唄とも知れないのんびりした節廻しは寒い夜風の底にいちぢけて、却つて旅愁を唆るやうな哀調を響かせてくる。

「旦那はん、あんた呼んでますに、上つて呉れはらんかん。」など、呼ぶ引女の聲が突如として聞えて来るのをみても、唯徒らに私の胸には廢滅してゆく廓だといふ哀愁が迫つて来るばかりであつた。

「旦那はん、こゝが備前屋のあとですに。」と、云ふ俣夫の聲でふと氣付くと、すぐ右手には入山形の大きな軒が見えて、春慶塗りのやうな黒ずんだ雨戸が何處からともなく射して来る月光にてかてか光つてみえる。そこはもう雨戸といふ雨戸は悉く閉ざれて、まるで死んだやうにひつそりとしてゐるのである。それこそ二百有餘年の間古市の廓で伊勢音頭の名も高く全盛を誇つてゐた彼の備前屋の廢屋なのであつた。日に月に數へきれないほどの嫖客を送り迎へたその門口にも今は唯夜の闇と月光とが夢のやうな陰影を描いてゐるのであつた。

私の俣夫は足もゆるめず、その前を走り過ぎてしまつた。私は名残が惜しいやうな氣がするのて俣上から後を振返つてみてるが、その時その少し先の家からはまるで鬼灯のやうな眞紅な衣裳を着た舞妓が三人ほどつながつてひよつくり歩み出て來た。

私はその瞬間の印象が古市といふものを深く印銘して呉れたやうに思へてならないのであつ

たがさうしてゐるうちに仲はやがて今僅かに伊勢音頭の面影をといめてゐる杉本樓といふ家の門へ来てごとりと止まつた。

開墾地

近松秋江様。

その後は随分暫らくお消息を伺ひませんが、相變らずお達者な事と信じます。先頃のお葉書に依ると、もう今頃は春めいた道頓堀あたりの宵闇をぶらぶらと漫歩きをして被居ること、存じます。若しさうでしたら私にも懐かしい京阪の旅路で此手紙を讀んで頂けるだらうと思つて、私の歡びは一層強くなるのでございます。

私は今後志の國の尻別の谿間にある雪に埋もれた此の寂しい僻村へ来て居ります。『未墾地』と云ふものが見度くて耐らなくなりましたので、或人に紹介して貰つて、此處の第何部と云ふやうな組織になつてゐる耕地の農村へ参りました。何かしようと思つてもまるで不案内なので

私は先ず第一眼に映る樹木の名からして訊いて懸らなければなりません。蝦夷松、イタヤ、オシロ、山毛櫨、水楢、落葉松、水松、そんな見も知らぬ樹木が眩ろしい程四邊に簇生してゐて、而も皆一々自分の特色と美觀とを誇示して居ります。白樺が一番見分けい、からと云つて、それ一點張で小説が書けるほど圖々しくもなれませんので、まるで中學校の博物學教室へても出てゐる様に、技手のK氏の跡を追駈けては一々煩く訊いて廻つて居ります。並大抵な苦勞では御座いませんが、併し樹木の發育して行く状態や、雪、風、日光と云つたやうな周圍の關係で樹木そのものがいろいろな變態になつて行く有様などは未開地だけに深い興味を湧かせます。殊に不用木と、用材とを鑑別して歩く技手の言葉と、鑑別された樹木の樹相とを比較してみますと、こんな冷たい自然のなかにも深い皮肉が現はれて面白う御座います。これに萬一植物學にでも興味を持つやうになりましたら何うしようかと思つて居ります。此上又一つ心の窓が開いたら夫こそ終には『自分』といふ彈條が利かなくなつて閉めるにも閉られなくなるだらうと思ひます。

私の今ゐる處からは朝に夕に美しいマツカリヌブリが見えて居ります。一名蝦夷富士と云ふ

のなさうですが、私は此の山に對して今では何とも云へない懐かしみを持つやうになりました。珍らしく九合目邊まで樹木が茂つてゐて、絶巔に近い山角が柔かみのない圓みを持つたま、すうつと平になつて居ります。そして英國の詩人がモン・ブランを歌つた詩の文句を藉りて云へば山全體が一種のクリスタル、シユラインです。積雪の色は唯眞白と云ふだけでは云ひ盡せません、幽かな變動を輝かしてゐる白色の幻影とても云はなければなりません。そして山の皺襞には氷河の痕を思はせるやうな雪の流れが幾條となく美しい陰影を描いて居ります。勿論眞もの、富士山のやうに妙に取濟ました秀麗な處は少しもありませんが、併しかうした未開地にはふさはしい野蠻さと豪宕な風とを示して居ります。そこに男性的な壯嚴を感じない譯にはいきません。そしてこんな處ですから、山に關する傳説や口碑などはまるでありませんが、それとて、あの山には幻怪不可思議な謎を暗示してゐるやうな黒百合の花が咲きます。また寂寥の權化のやうなあの可憐な鈴蘭の花も咲きます。そして茫漠とした裙野には前に申したやうな白樺や、イタヤや、落葉松などが見るから豪放な傾斜の儘で隈もなく繁茂して居ります。凍たやうな寒月が射し懸つてゐる晩なぞにはあの山の姿が何んなに物凄く見えることとせ

う。荒寥とした裙野の原野には積雪が輝いて、樹枝に密着した雪ははり／＼音を立てながら凍つてゆきます。餌を漁る野獸がともするとさういふ晩には村へ下りて参ります。あの光景ばかりはまだ北海道の地をお踏みになつたことのない貴方にはとても御想像が出来まいと思ひます。

私はさういふ晩に此の窓からあの山の姿を振仰いで居りますと、自然の間にも圖太い人間の心を畏怖させる精靈が動いてゐるのを聳と感ぜない譯には参りません。譬へ空疎な感覺の錯誤であらうとも私はその刹那明かにその實在を意識致します。そして酒と女の放埒な生活にだらけきつた私の頭腦もその時ばかりは悚然として引緊つて参ります。今更ながら人生が何んだ、宇宙が何んだといふやうな苦い疑ひも湧いて参ります。今迄は態と見て見ぬ振りをしてゐたいろいろな人間の生活に對する疑惑や問題が赤裸の儘で一時に胸の底へ殺到して参ります。そしてそれに續いて起るのはいつも何うして、か方がつかないやうな不安と焦だ、しさて御座います。自分が生きてゐることを痛切に感じれば感じる程、私は胸苦しく悲しくなつて参ります。それを藝術の上に移して考へてみますと、私は猶更確平と何處かへ行詰つてしまつたや

うな氣持にならずにはゐられませぬ。そんな時に、私は「俺はまだ若いんだから」と威張つて叫んでみますが、それと同時にその聲が深い洞穴のなかへ吸ひ込まれて、もしやうやうな名状することの出来ぬ心細さを覺えます。これは決して詩的感興に驅られて申すのではありません。詩的感興でないだけに猶更始末が悪いので御座います。

私はほの暗い紙燭の燈影で、東山の頂から射しそふ春の宵月を眺めながら、他愛もない「浮名」だの「薄雪」だのといふ物語りを自分でも満足して一生懸命に書いてゐた去年の自分が途方もなく懐かしくて耐りませぬ。あの時分は生活の上でも氣持ちの上でも私は充實しきつて居りました。譬へそれはどんな低級な標準からであつても、私は自分の心の生活を擴充して居りました。確かに今のやうな空虚は感じて居りませんでした。あの時分よく御一緒にゐた貴方は何と思召すか知れませんが、あの宇治の花やしきの小座敷で、興聖寺の鐘聲と、もに沓え渡つて來る月を眺めながらいかにも晏如として、盃をあげてゐた私の顔は今でも覺えてゐて下さることだらうと存じます。

併しそんな愚痴つばいお話はやめにして、その次に貴方にお見せし度いのは此地の吹雪で御

座います。東京に居ります時分にもいろいろ話には聞いて居りましたが、その時自分勝手に想像してゐたことは皆嘘で御座いました。空に薄曇りがして來たかと思ふと、まだ太陽が照してゐるうちから粉のやうなやつがちらりちらりとやつて來ます。と、何處からともなくびゆうつと身を切るやうな冷たい風が吹き添つてきて、みるみるうちに其處らは一面に眞白にかき暮てしまひます。そして空から降ると、大地から捲き上げるのと一緒になつて、まるで大火事の火先のやうに濛々と四邊に奔騰し、狂奔して歩きます。もう見る限り天地は暗澹とした暗灰の一色になつて、遠くへ吹き落ちてゆく風の音ばかりがまるで悲鳴のやうにそのなか、ら聞えてまゐります。東京邊の雪のやうにしとしと、品よく積もるのではなくて、唯矢鱈に吹き溜りを拵へて歩くのです。止んでからみますと、そこいらには一面に小丘のやうな吹溜りが出來て樹木は折れる、凹地は埋まる、今迄とは地形までが變つてしまふのです。その凄まじさはとてもお話にはなりません。若しその吹雪のなかへ出てもしやうものなら、まるで水の流れても渡つてゐるやうに腰から下へ重苦しく吹きつけて、足も何も前へは出せやしないのです。そして外套へついた雪片を、燈に透して見ますと、紋の雪輪にそっくりな結晶がありありと見えて

居ります。

そんな晩にストロヴへうんとイタヤの薪を燻べて、移住して来た農夫達を相手に地酒をちびちびやつてゐるのも、こんな土地では樂みのひとつで御座います。話し好きな男には話をさせます。歌の上手な奴には歌をうたはせます。追分などは至極さうした晩の情趣にふさはしいのですけれども生憎今は上手な奴が居りませんので、樵夫唄で間に合はせて居ります。啄木鳥のやうな寂しい單調なその唄も私には限りない興趣を呼び起させます。酔つて来ると、K技手と一緒になつて手拍子を打つては音頭を取ります。まあ、想像して下さいまし、丸木を打付けて拵へたやうな移住農民の小舎で、毛布を引被りながら譯もなく嘩いてゐる私の姿はどんなに慘めて御座いませう。呵々。

私はさうした晩になると、全くしみじみ京都や大阪のことが思ひ出されてなりません。あれは丁度一昨年の秋の初めて御座いました。あなたと御一緒に祇園から連れていつた舞妓を乗せて宇治川を下つた事が御座いましたね、あの月のい、晩を貴方はまだ覚えて被居いますか。あの時に舞妓達が軽い手拍子を打ちながら唄つた京風の三下がりやをまだ覚えて被居いますか。あ

の眠りを誘ふやうなゆかしい歌に酔ひながら私達の乗つた小舟は古めかしい伏見の中書島の廓へ入りました。私はあの晩の興趣を今に忘れることが出来ません。

もう京都ではあの東山の三十六峰に夢のやうな、ごやかな緑が萌え立つてゐること御座いませう。眞黄な洛西の菜畑にはほそぼそと降る春の雨に濡れながら御影供の鐘が鳴り響いてゐること御座いませう。もうさうかうしてゐるうちに祇園町には紅いつなぎ團子の提灯が灯つて都踊が見小路の宵を賑す頃ともなるて御座いませう。さうした美しい光のなかをぶらぶら歩いて被居る貴方のお顔が眼に見えるやうで御座います。私はそんな事を思ひ續けながら極めて安價なセンチメンタリズムに浸つて居ります。

それからさうした吹雪が止むと、今度は恐ろしい寒氣がやつて参ります。冷たいの、寒いのと云ふよりも肌を感じる觸感に痛いといふ方が適切かも知れませぬ。今年は何程凌ぎよいのださうですが、それでも襟巻にかゝる息が凍つて、はづす時にばらばら零れるやうな事も御座いましたし、又家のなかに置いた卵が凍つた事も御座いました。ひどい時になると、戸外を歩いてゐるうちに鼻毛が凍つて妙にむづ痒いやうな氣持のすることもあるさうです。そして橋の通

り過ぎた跡が及のやうに青くてらてら光つて襟巻で包んだ耳の穴がきりきり痛む晩などに橋曳きが「えらく凍れるてねえか。」など、云ひながら往來してゐる聲を聞くとあゝ寒國だなどと思はずにはゐられません。

私は昨夜もさうした寒氣のなかを馬橋に揺られながら第十七部の耕地の方から歸つて参りました。私の都會に馴らされて繊細い神経がいやが上にも答たれるのはさうした晩なので御座います。音もなく雪を蹴上げながら滑つてゆく橋の上で私はいろんなことを考へさせられました。何だつて此様な處へやつて來たのだらう？こんな疑問は今の私には日に幾度となく繰り返されるので御座います。併し私は自分でもそれに答へる適當な言葉を持ちません。その理由を糺す前に私はまづ私の胸から絞り出される切ない嘆息を抑へずにもゐられません。私はほんとに何を求めて物好きにも此様な山間の僻地へやつて來たので御座いませう。私は眞實こんな苦しい思ひをしなければ自分を省み、自分を答つことが出來ない程墮落してしまつたので御座いませうか。それを考へるといかに圖々しい私でもさすがに涙含まない譯には参りません。いや、併し私はそんなお話しをする心算では御座いませうでした。端唄にも三本目にはつい

愚痴になると云ふ文句が御座いますが、酒も飲まずに愚痴をこぼすやうになつては人間もおしまひで御座います。呵々。

それよりも京阪の地で美酒佳肴（私は敢てかう申します。）に取圍まれながら口紅の光る口から滑らかな美しい言葉を聞いて被居る貴方に此地の女のお話しを致すのも何かの對照になるかも知れないと思ひます。女といへば私は二三日前に餘り淋しいので二里の雪路を馬橋で飛ばして俱知安へ出ました。いかにもがらんとした殖民地らしい町で、そこには町としての設備は殆んど一つもないと申して宜しいのです。そのある蕎麥屋で私は三人の三味線をもつ女を見ました。いづれも腰の太い頬の紅い見事な體軀を持った女でした。私は土音の雜つた荒つぽい言葉を聞きながら酒を呑んでゐるうちに種畜場にある毛並のい、種馬を思ひ出しました。朔風に嘶く逞しい良馬、甚だ感じの鈍い言葉ですが、私にはそんな感じより他には致しませんでした。と、申して決して醜いのは御座いませう。唯都會から來た柔弱な青年にはとても御しきれない程の精悍さをもつてゐるのです。そして生れは何處だと訊ねますと岩内だの、壽都だのと私共には耳遠い地名を並べます。私は彼等の間に起る戀愛がどんなに野生的で、率直であら

うかと思ひますと、何がなしに高島の岬から見える荒海を想像させられました。私はそんな女を前に置いてお作の『津の國や』のなかの句を思ひ出しました。「……蒼いほど白い小さい顔を仰向きに枕の上に載せて……」そして何だか馴染れをしたやうな氣になつて、言葉では云へない心細さを覺えました。

こんな處に居りましたは何よりも内地からの便りが待たれます。何枚も符箋のついた手紙がスタンプの日附から十日も遅れて來るのを封を切つて讀む時の氣持ちは何とも云はれません。時々はその封の切りかたまでが氣になるくらゐで御座います。

それから新聞も又とない慰藉のひとつで御座います。八日も九日も遅れてゐながら矢張り何かしら新しい匂ひに觸れるやうで紙の匂ひまでが懐かしう御座います。海軍問題、博覽會、さう云つたものがまるで外國の出來事でもあるやうに遠く聞かれるのも内地にゐては經驗することの出來ない感じて御座います。

一昨日着いた時事新報を見ますと、その文藝欄の處へふと私の名が出てゐるのに眼が止まりました。こんな處で自分の名の印刷されてゐる新聞紙を受取るといふことが何とも云へず懐か

しかつたので早速何よりも先に讀んでみました。

それは私の作品に對する水野さんの御批評でした。こんな事を申しては失禮に當るかも知れませんが、私は何よりもあゝした文章が大好きなので御座います。貴方は何と思召すか知れませんが、譬へば今日の正宗さんを御批評なすつた條の『氏の熟練は感じたが、豊富は感じなかつた……』云々と云つたやうな如何にも齒切れのいゝ、西洋人が書きさうな文章が私はひどく好きなので御座います。そして私に對する御評言の内容に對してはもう一言も御座いませぬ。あゝした理解のある、所謂批評業者の批評でない嚴肅なお言葉を私は多大の尊敬を以て伺ひました。そして初めて私の作品に接して下さつた水野さんからあれ程の侮蔑を買つたかと思ふと唯々慚愧の他は御座いません。私の以前の作品は見て下さらなかつたのだから、まだ幾らか脈があるなどと氣安めも考へてみました。それも一時の強がりに過ぎないので御座いませう。かうして氏の所謂小説業者にもなり得ない程のしがたない技倆をもちながら性懲りもなく矢張り物を書いては稿料を貰つてゐるのが全く辛くなりました。併し今の私にはそれより他には致し方がないので御座います。僅か二晩か三晩の徹夜で書きなぐつたものでお金を頂いて、そ

れてやつと旅をしたり、本を買つたり、お酒を飲んだりするより他には仕様がなないので御座います。常人の考へてはそれであるべく澤山の食餌を攝取して老病に取附れない用心をしてゐるつもりなのですけれど、もういつの間にか胃の腑のなかには胃痛といふ痼疾が出来てゐて、消化する力がないのです。そして腕ばかりが恐ろしく太くなつて、指の股には醜い蟻が出来て居ります。それを少しも氣づかすに、女房を持つて子を産み廣げるやうな單位生活には甘じられないとか、俺は何かを求めてゐるのだとか多愛もない強がりを並べながら、空虚な若さと云ふ言葉に唆かされて三界に家もなく昨日は東、今日は西と漂泊して歩いてゐる私の姿はどんなに他人様の眼にはみじめに映るて御座いませう。黄昏の薄明りに包まれた雪原の上をしようぼり俛首ながら歩いてゆく時、ふと自分の姿を顧みますと、我れながら時々はほろりと致しませう。私は今自分の心身に根本的の大手術を施さなければ駄目だと思つて居ります。それにはこの荒寥とした峻厳な大自然がとりも直さず私を載せてゐる手術臺なので御座います。今では種々なメスが私の胃痛を散々に切り苛んで居ります。どうか私は水野さんのやうな藝術に對する理解もあり、敬虔の念も持つてゐられる先覺者からこれが生粹の日本出來の藝術品であるとい

ふやうなものを示して頂き度いと思つて居ります。そしてあれ程仰つて下さつたからには、何にも知らずに唯お客様方の前で拙い藝を演じてはお金を頂く事ばかり教へられたこの陋巷の曲藝師に、眞實な藝術の力を吹き込んで下さるだけの御深切はないものかと思つて居ります。私に今度此地へ参りますに就いて、今更めかしくトルストイとツルゲネーフを持薬に持つて参りました。随分本も澤山買ひましたが、御承知の通り今では大方賣り拂つて、水野さんの所謂ヴァジニチイを失ふ飲み代にかへてしまひましたので、手薄な書架のなか、らこれだけを選んでいただけでも常人としては殊勝なことなので御座います。

此地でトルストイやツルゲネーフの作品を讀む心持は何とも云へません。寫眞でみたヤスナヤ・ボリヤナの書齋にあるやうな粗造なイタヤの椅子に腰をかけて頁を繰つて居りますと、戸外では氷の割れる音が致します。弱々しい日射しは向ふ山の傾斜に薄れて、雪が漸次に黄く染まつて行きます。そしてストーヴには薪がことりことりと燃え落ちてゐるのです。そのしんみりした味は何ものにも換へられぬ深さを持つて居ります。あの薄濁りのした豎地らしい尻別川の谿流はそぞろにコウカサスを思ひ起させます。ともすると谿に添つた荒地から今にもコウカ

シアンが馬を飛ばして立現はれて来さうな気がしてなりません。そして吹雪の晩に遠くへ消えてゆく馬橋の鈴音を聞いて居りますと、今アンナが眼深かにヴェルを下ろして莫斯科の停車場へ驅けつけてゆくのではあるまいかと云ふやうな幻想も描かれます。カリプト、オトイネツブ、メナ、その名さへ懐かしいでは御座いませんか。そして私はいつぞや泉州堺の宿屋で貴方と御一緒にヤスナヤ、ボリヤナの偉人のお話をしたことを始終思ひ出して居ります。トルストイの味はひと云ふやうなものを貴方がしみじみお話し下さつたことは今でも感謝して居ります。

私はもう長くは此地にも居りません。天氣が定まりましたら早速岩内の鯨場へ参ります。一日に建網へ鯨が三千石も懸るといふ漁場の壯觀を見ましたら私の繊弱い心がまた何んなに慄へ戦くことと御座いませう。それから日高へ云つてヒラトリのアイヌ部落を見ます。夕張へ行つて地獄のやうな炭坑の坑夫の生活を見ます。そしてその次には神の地を耕してゐるといふトラピストの修道院をも訪ねて見ようと思つて居ります。血の穢れ盡した私が世界で一番嚴格だといはれてゐるあの宗派の祭壇の前へ立たせられた刹那、どんな感じに打たれることと御座いま

せう。それも私には味はつて見たい苦い經驗の一つと御座います。そして私は自分の全て知らない靈魂の『未墾地』がまだ私の行先に數限りもなく横たはつてゐるのを思ひますと、歡びに胸が慄へるので御座います。譬へ消化し得ずその儘下痢してしまふにしても、それを經驗したといふことだけで既に満足しなければなりません。併し水野さんの仰有るやうでは、そんな白々しい申譯は看板だけにして、私は先づ第一に、さうした經驗を何ういふ簡便な方法でローズな『商品』に仕上げるかと云ふことを考へなければならぬのかも知れません。阿々、そして私はこんな笑談を申すにも齒を食緊つて云はなければならぬほど緊張して居ります。今になつてやつと口惜しいと云ふことを知るほどに無恥であつたので御座いませうか。

今頃は宇治も宜しう御座いませう。奈良も宜しう御座いませう、須磨、明石、有馬、和歌の浦、金さへあれば、遊び處の數は盡きませぬ。私はこの雪のなか、ら遙に貴方の旅路の恙なからんことを祈つた居ります。若し私を知る人にお逢ひでしたら、どうぞ呉々も宜しく仰有つて下さいまし。そして私か可愛がつて居りましたあの京の舞妓達にお逢ひになる機會が御座いましたら、私が遠い北の國へ材料を仕込に行つたとも、又は修行に行つたとも宜しきやうにお傳

へを願ひ度う御座います、御健在を祈ります 左様なら、又雪になつて参りました。今夜も寒いこととて御座いませう。晩酌の相手には樵夫唄のうまいマツカリブトの神藤がやつて来ることになつて居ります。私は早く此手紙を橋曳に渡ししてそれを待ちませう。左様なら。

竹生島

96 濃碧に澄んだ琵琶の湖上に竹生島の島影が浮龜のやうに點出されて来たのはもう比良の山裾を通り過ぎて、若狭境ひの山の狭間に今津の村がほの見える頃であつた。私達の乗つた白石丸は近江舞子の砂濱を出るともう全速力をかけてゐるのである。一等室へ入つて、柔かい腰懸けの上へ寝そべつてゐると、いくら窓を開けて置いても日射しの加減で室のなかにはむし／＼する。旋風器をかけたなり、舷から手拭をつるして置いて水をきつては汗を

拭いたりしてみるがどうしても我慢が出来ない。それもその筈、日は八月の十日過ぎ、それに晝食の時に飲み過ぎしたビールの酔ひがまだ残つてゐるのであつた。同行の西垣君は暑い／＼と云つては頻りに轉々反側してゐるが、到頭我慢しかねたと見えて甲板へ上らうと云ふ。甲板は三等の船客を乗せるところになつてゐるので、粗末な疊敷ではあつたが、吹き曝らしなのでまるで涼み臺へでも出てゐるやうな氣がする。私達は階段をあがつて甲板へ出ると、一番舳の高いところへ上つた。遠く霞んだやうな水氣にこめられてゐた竹生島は漸々と大きく、はつきりとして来る。こんもりと繁つた樹立はそれと一緒にひとつ／＼美しい緑葉のけじめをみせて、舷に碎ける水は玉のやうに澄んで来る。さまざまの傳説をもつてゐるそのあたりの山影はこの美しい水に浮んでゐる限り竹生島をば、げにも清淨境とうなづかせるのであつた。航程一時間ばかりで白石丸は漸く島の東側の方の船つきへ入つた。根なし島と云はれるだけあつて、湖底八十尋の深さから柱のやうに屹立してゐる花崗石の島脚は甲板から差覗くと清冽な水の底に手に取るやうに見える。汀から十間も離れた處はもう底の知れぬ深い濃藍の水色に

包まれて、白い岩と、水藻と、三寸ばかりの魚の姿が龍宮の昔譚を思ひ起させるやうにかすかにほの見えてゐる。

私達も他の遊覧客と一緒にやがて甲板から棧橋へ下りた。そして制服をつけた案内者のあとからぞろ／＼と辨財天の方へ上つていつた。鳥は人家といつてもほんの二三戸しきやないのてした、るやうな緑陰が太古のやうな眞晝の静けさを湛へてゐる。諸曲にもあるやうに、緑樹影沈んで、魚樹にのぼる風情がある。

何百級の高い石階を眼の前にもみると西垣君も私もさすがにうんざりしてしまつた。辨財天の方は兎に角あとで裏路の方から登ることにして先づ觀世音の方へ足を向けた。その御堂は桃山時代の傑作のひとつで、古色蒼然としたところにも何とも云へない古雅な匂ひがある。彩色の顔料も色褪せて、幾百年の風雨に蝕ばれた木地はちつとみてるると私達を遠い昔の方へ連れてゆく。そして何處から来たとも知れない巡禮の群が、「四海遍照」などと書いた菅笠を背にして、御本堂の薄暗がりて悲しい御詠歌をあげてゐるのを聞くと、私達は琵琶の湖心に浮ぶ靈地の尊さを覺えて、思はず襟を正さずにはゐられなかつた。

御本堂から廻廊を傳つて大きな岩礁の頂きに建てられた拜殿のうへへ出る。そこは船つきからは樹立の影に隠れた突角になつてゐて、今にも落ちさうな危岩の彼方には物凄く蒼々と澄んだ淵がみえてゐる。湖面は遠く米原、彦根の方まで廣々とひらけて、千波萬波のこまかく起伏する蒼い水には眞白な帆影が三つ四つ流れてゆく。彦根の人煙は針の尖ほどに點々と隠見して、その後には聳えたつ伊吹山の山塊が今西へ傾きか、つた日射しを受けて緑の焰を吐いてゐる。

まるで琴線を弾するやうな微妙な音がしたかと思ふとそれはあたりの松が枝を鳴らす微風のためいきであつた。その音と一緒に冷たい水を渡つて来る風は拜殿に立つ私達の腋の下まですうつと流れ込んで来て、しつとりと汗ばんでゐた肌は瞬間に乾いてしまふ。その次に吹き寄せて来た風は心の底の底まで湖心から湧き起る涼味を吹き込んでいつた。

西垣君はふと口を切つて、

『今夜京都へ歸つても木屋町の涼床は暑いてせう。こんな涼しい風は何處へいつたつて吹きませんよ。』と、ひとり言のやうにいつてゐる。

さういふ西垣君の上布の袖はとみるまにすうつと音もなく肩のあたりまで吹きあげられる。その風が私には水色にみえてゐた。私達は今でもその時の涼しさを忘れることが出来ないのである。

埠頭

灰銀と緑とのゆるやかな諧調——こんなことを考へながら僕は、埠頭の突端に無雑作に投げ出された揚荷の上に腰をかけて、あてどもなく海を眺めてゐた。雲の多い十二月の寒空から、午後四時頃の日光が、折々臆病らしくうつすりと射し込んで、海面は際涯のない寂寥を漂よはせたまゝ、さも備げにまどろんでゐる。その單調な空気のなかへ、白い船、黒い船が真紅な腹を浸して、水禽の群のやうに静かに横たはる。低い空を、汽船や、陸上の造船所や、又諸方の工場の煙突から吐き出される煤煙が、幾條となく極めて不規則な縞を描いて、ゆらく西の方へ流れてゆく。白い鷗が四五羽、餌を求めながら高く低くとび

交ふ。

繫船岸で鈍い起重機の音が喘ぐと、何處かて鐵板を落す音が刺激のない緩漫な律をつくつて重苦しく響く。その周囲の波の喘ぎや、人の叫聲、鋭い汽笛の呻き、地の底にしみわたつてゆくやうなトロツコの駛る音などがごちやごちやと亂雜に立草めて一瞬一瞬に生れては消えてゆく情調を形づくり、解けたり纏れたり、又一緒に相應じてドオムになり渡る管絃樂の噪響のやうに眩ぐるしく渦巻いたりしながら、ぱつと單調な脈搏を海の面へ漲らす。

鹽氣を含んだ微風がそよ／＼と息吐いた。埠頭の周囲の海水は濃碧に澄んで、大きな船の影や、塵芥や、又ぎら／＼と七彩に蕩めく油の斑紋を浮べたまゝ、につと笑ふ。向岸の倉庫も紅く笑つた。

透明な Melody と Melancholy がそこから湧き起つて、一帯の明るい空氣の中を的もなく彷徨つて歩く、港の午後の印象は漸々と瞭然して来る。

出帆準備の銅羅のやうな鐘が鳴つた。と見ると、すぐ間近に繫いだ巨きな汽船から、高い釣橋を渡つて大勢の見送り人が棧橋へぞろ／＼降りて来る。卵黄色に塗られた上甲板も中甲

板も遠い海路の旅をする船客で充ち満ちてゐる。その間を身輕に扮たつた水夫が右往左往に馳せちがつて、ロオブを曳いたり、デツキ、バアを下したり忙しうにたち働いてゐる。ブリツヂに立つた艀顔の脊の高いキャプテンが、太い聲で何事か唶鳴ると、それに應じて、彼方でも此方でも勢のい、懸聲が起つて、鎖のすれる音や、何か物を轉がすやうな響きがトツプの方から船尾までひびき渡る。やがて横腹の橋も取除かれた。サイレンが消魂しい悲鳴をあげる。續いて又一聲と、それを追ふやうに下甲板で奏樂の音が起る。此の港に暫らくの別離を告げる「Lang Syne」の曲だ。船は白い蒸氣を朦々と吐出して、小刻みにぶるぶる震へながら柔かに滑り出す。甲板に立つ船客と、棧橋に見送る群衆との間にはさまざま最後の別離の言葉が取交される。帽子や、手巾がひら／＼海風に翻へる。別れてゆく悲しみは人々の顔に掩ひ盡せぬほど浮んでゐる。憧れるやうな空洞な眼光をして、夢のやうに烟つた港の市街を見つめてゐる西洋人もゐる。艀に顔をうち俯して人眼も厭はず泣きくづをれてゐる女もあつた。船は漸次と油の様に靜まり返つた海の面を裂いて遠ざかる。「For auld Lang Syne my

Dear……」の物悲しい樂聲は千斷れ千斷れに聞えて來て、なほ飽かず見送つてゐる群衆の心に、悲しい別離の印象をさらに深く鑄りつけやうとする。

「もうとてもお眼に懸れないわね。」

「まさかそんな事もありますまいけど、此處七八年はねえ。何しろ遠いところですから、何卒まあ御丈夫でお暮しなさればいいけど……」

「私ね、だけど——笑つちや厭よ。——どうしても此れが一生のお別れになるやうな氣がして、眞箇に心細くつて耐らないわ。」

ふと、耳の近くでさ、やく語聲に誘はれて後を振り返ると、すぐ側に二人の若い女が抱き合ふやうに手を組み合つて、處女らしい大きな眼に涙を浮べたま、もう防波堤の近くまで駛り去つた船の行方をじつと瞻視つてゐる。

「まあ、貴女も随分ね。一生のお別れだなんて縁喜が悪いぢやありませんか。」と、一人が小聲で笑つたが其の冴えない聲の底には斷ち難い悲しみがいたいたしい迄顯然と響いてゐた。別れて行つた人もない僕も、その聲を聞いてゐるうちに何時しか心の底を、一脈の哀愁が忍び足に

過ぎのくのを感ぜずにはゐられなかつた。
 二人の女を跡にして、僕は又ぶら／＼足に任せて歩きだした。棧橋は織るやうな人通りで、其く賑やかだつた。落日に反映してきらきら輝く横木と軌道が陽炎のやうに眼を眩するなかに、群衆が彼方此方へ喚いて、黒くぞろぞろ蠢いてゐる。トロツコを覆した上には、襪襦を纏うた黒人の労働者が六七人腰を下して、煙草の烟を吐きながら、其處に店を開いた行人を冷評してゐる。鶯色に光つた顔が、齒をむき出して笑ふ度に恐ろしく物凄しい形相に變る。又美しい女が通ると、其のなかの或者は餓えた狼のやうな貪婪な眼光をして其のあとを見送る。互に口喧しく饒舌りたてるが、それが何を意味する言葉だか少しも解らない。
 その側には日本人の若い女の小揚人足が一團になつて、朗かな聲で戯れ唄をうたひながら、頻りにタコを巻いてゐる。藍色の船員服を着た肥つた歐羅巴人が、船の甲板から猥らな身振をしてはそれに擲擲ふ。華麗な夜會服を着飾つた Lady が、美しい暗褐色の巻髪を日に輝かしてとほる。支那人が捲髪を額に巻つけて、ぼんやり突立つてゐる。——僅一條の棧橋の上に、斯くの如く殆んど收拾すべからざるほど混亂した人生の尖端が現はれてゐる。それを全般に互

つて總括するのは『日本』でもなければ又『文明』でもない。唯その複雑な生活が示すやうな、無限の運命の搖蕩とその最も露骨な反映とであつた。——僕はかゝる Cosmopolitan の群のなかに隠された悲しい人生の謎をひたと直視したやうな氣がした。そして頼りない不安が漸次と僕の心を貪つた。
 落日は紅く空を染めて、船の影、人の影、棧橋の影を長く海の面に流した。灰色の水は微かに寂しい子守唄をうたひながら、その影を靜かに搖すぶつた。碇泊船で澄んだ夕餐の鐘が鳴つた。霧のやうな深い悲しみが、丁度ヴェールでもひくやうに掩ひかかつて、僕の心は行端のない底の方へ重苦しく沈んでゆく。
 棧橋の端れから税關の前を左へ曲つて、ホテルの建並んだ海岸通りへ出た。逢つたり別れたりしてゐるうちに、自分の閱歷のなかへいろいろなエピソードを添け加へてくれた人達の身の上や、その激しい移り變りをまざまざと眼に見えるやうに思ひ浮べながらゆるい歩調で歩みつけた。

……黄昏になつた。灰銀色に光る海から夕靄が息吐きながら湧き上つて、沖に繫つた船影や、長い棧橋や、税關の巍然とした建物を朦朧とたて罩める。そのさまがまるで灰色の眠りにも囚はれてゆくやうだ。處々に黄褐色にくすんだ燈が點る。ランチが青い舷燈を人魂のやうに長く曳いて岸の近くを駛る。沈みきつた大氣の底に、かすかな海の嘆息が聞える。

海岸通りの並木の蔭のベンチには歐羅巴人の放浪者が幾人も幾人も腰を下ろしてゐた。故郷の懐しい追懐に悩まされるやうな眼眸をして、錆びた銀盤のやうに擴がつた海の面をじつと見つめてゐる。故郷の忘れ得ぬ街々、さては又いとしいジャンやアンの面影が、夏の夜にひびく小夜曲のやうな甘い感じに溶けあつて、彼等の心の底をひそかにさざめき過ぎてゐるのであらう。僕は、その荒れ果た心に澱んでゐる重苦しい寂寥と哀愁とをドラマチカルに想像して、出来ることならその苦痛の幾部分でも共に頷ちたいと思つた。

何處かで不意に透明な笑聲が起る。口早に饒舌る話聲とともに紅い煙草の火が薄闇に流れて、舗石道をふむ靴の音が近づいたり遠ざかつたりした。幾組かの人が來ては去つた。そして孰れもみな冷たいベンチの椅背に凭れて、黙したまま靜かな海の心をみまもつた。

海は漸次と暗くなつてゆく。灰色が抗し難い夜の闇に逐はれてゆく寂しさ、——防波堤の突端には紅い燈臺の火が濕んで、棧橋は紫銀色のアーク燈の光の下に夢みてゐる。黄昏のほのかな Symphony は漸次と夜の幻怪な Solo の旋律に移つてそれを眞正面に瞻視つてゐる僕の心も、音樂的な情調から轉じて、現實の濃烈な刺激に對する激しい飢渴を覺えて來た。

其處を去つて又寒い風に吹きさらされながら、居留地のなかを的もなくぶらついた。グラランド、ホテルの傍から細い裏町へ入ると、兩側を高い洋館でたてこめられた小徑はもう宵闇に包まれて、蒼白い白熱瓦斯の街燈の蔭を美しい顔容をした歐羅巴人の男女が、互に腕を組み合つて往來してゐる。路に臨んだとある家の常春藤の巻きつたい窓から、一人の美しい處女が、半身明るい光を浴ながら往來を見下してゐる。兩手を握りあはせて、豊やかな頬へ押當て、何ごとか小聲で呟いてゐる。“Bon soir”と、その紅い唇が會釋をするやうに見えた。その家の奥の方からは晚餐後の手ずさみらしい、輕快なピアノの音が、滑らかな餘韻をひいて忍びやかに洩れ聞える。僕の眼の前には、何時しか一場のもの悲しい Love scene が描き出される。——下手の方から、絶えざる怨恨を抱いた情人が蒼ざめた顔容をしてたどたと足音を忍

びながら出て来る。リラの花かをる南歐の夜の空は甘く濡んで星の影さへ夢のやうに瞬いてる。噴泉の嘆息、木の葉の囁きは一樣に溶けあつて、いとほのかな愁ひの諧調をひかかせ、折檻の中から Nightingale の眼覺めた啼き聲がきれぎれに高く聞える。窓の扉が開いた。と、明るい燈の光がさつと溢れて、その中に渦巻くやうな金褐色の髪を振り亂した若い女が立現はれ、纖やかな手で情人をさしまねく。紅い花のやうな唇のなかでは、皓齒がちらりと光つた。

「O Annette, Annette!」と男は狂氣のやうに叫んで、窓の下へ走り寄る。白い腕は突如その頸を巻いた。熱情の籠つた接吻の音がづく、……僕は其の跡で、つい二三日前、ボストンで巴里生れの美しい情人に別れた悲しみを細々と書いて寄越した幼馴染の若い工學士の身の上を思ひ起した。

四辻を犬が吠えながら驅けてとほる、自動車が警笛を吹きならして駛せ違ふ。馬車馬の蹄鐵の音も高く響いた。僕はその間を突つきつて、ほの暗い靜かな小路を幾曲りかすると、もう居留地の端れへ來てゐた。河に近い一劃の町は全然違つた光景を僕の眼の前へ展げた。

支那街の黄昏ほど廢頹した人生を感じしめる處はまたとあるまい。毒々しい刺激性な色彩で、窓から、欄干から、羽目板まで何等の統一もなく調和もなく、矢鱈に塗りたくつた家々。

物の饒えてゆくやうな濕つばい匂ひ、亂雑な節制のない生活の澱滓が徐かに腐ちゆく歡喜と絶望に泡立ち醗酵して、一筋の街は地の底へ沈んでゆくやうな深い悲しみを現はしてゐる。灰紅に爛れた落日の餘光と、ほの暗い軒燈の光の中を、紅や、青や、紫の美しい衣を着た木偶のやうな女が、蛙の如く腰を調子よく振つてとほる。鼻へぬける甘い響きをもつた言語が聞える。自然を殊更に誇大した奇怪な裝飾が、既に數世紀の文明に疲弊し爛熟しきつた人種の妄想を反映させる。紅地に青で堅つくるしい文字を描いた幟が、濁つた空氣の中で嘲笑ふやうにゆれる。又門口に佇んで、隣の街をゆく振れ賣の唐人笛の物悲しい忍び音に聞き入りながら、ぼんやり黄昏の夢を凝視めてゐるやうな男もゐた。

華麗な花瓣が行く春の空に崩れ落ちて、その儘饒る朽ちてゆく様な感じのする處だ。併し美しい街だ。

眞腦が變な調子になつた。一杯の強烈な酒精はその場合僕にとつて暖かい夕餐よりも貴重な

欄だつた。支那料理店をと思つて其處らあたりを探したけれども、つい僕の氣に適つた家が見當らない。で、細い横町を左へ曲つて、裏町の路へ入る。恐ろしく穢い家だ。正面には塗りの上げたカウンタアがあつて、土間になつた店一杯に支那風の高卓と椅子がごちやごちやに置き並べてある。周囲の壁は賤しい趣味をあらはした廣告繪や、萬國旗や、あくどい色で彩どつたいろいろなペンキ塗りの器具で掩つてあつて、隅の方の棚の上には商賣もの、玻璃製のコップやグラスが、怪しげな格好をした洋酒の壘と一處に不秩序にずらりと並べてある。カウンタアの傍には大きな酒樽が二つばかり轉がしてあつた。丁度店口のカーテンを掲げて入つたとき、僕の手が感じたと同じやうに、その古布にしみこんだ脂じみた濕つぽさが店中の空氣に漲つてゐた。

飾窓のやうな體裁に出來てゐる入口の隅に椅子を据ゑて、二人の若い女が坐つてゐる。一人は支那人で、他は歐羅巴人だ。白粉を厚く塗りたくつて、各自故國の装ひを凝らしてゐるが、もうその色も匂ひも禿めはて、唇も肌もいたく荒れてゐる。彼等は黙つて下を向いたまゝ、卓巾の裙を弄んでゐる。日本人の客を喜ばないのは彼等の暗い職業の上から云つて無理な

らぬことではあるが、それにしても彼等の客を遇する道は極めて不愛想なものであつた。僕の入つて行つたのを知らないかのごとく、挨拶もしない。

僕は黙つてカウンタアに近い椅子の一つを占めた。腐敗した乾酪のやうな重苦しい匂ひが裏の方から漂つて来る。丁度天井の中央の處に薄ぼけた電燈がただひとつ點つてゐるきりなで、戸外の街燈の光が窓の色硝子を透かして射し込んで来て、酒壘の群へ幻のやうなほのかな影を印してゐる。

“Here, Cognac.” と僕が叫んだとき、先づ顔をあげたのは歐羅巴人の女の方だつた。顔は醜いが、眼だけは活々として美しかつた。蒼い腫の底に何處か投やりなところがほのめいてゐて、僕の顔をきつと大膽に瞻視した。

「貴方、ヴォツカ飲みます。ヴォツカい、です。」と、覺束ない日本語で答へて、僕の傍へ寄つて来て、隣の卓へ坐つた。その語調がいかにも意地悪さうで、何處かに恐ろしい禍心を隠してゐるやうだ。そして鋭い眼光で、彼女は僕の風采を上から下まで仔細に點檢した。僕はその容子をみると裏切りされたやうな羞耻を感じて、急に不愉快になつた。

ヴォツカを呷つた。舌の粘膜に鋭くしみ渡る濃烈な酒精の刺激はやがて僕の理性を奪つた。跡には畸形な意志と感情とが置き去りにされて、丁度織兒が悪戯をするときにやるやうな自棄なしかたで、頼りに渾身の妄動を促したてる。僕は、言葉少なに受け答へをしてゐる異國の女を相手に盛に饒舌つた。埠頭、船、支那街、東京、これがその饒舌の中心になつた。併し、女は恐らくその一語の意味をも正當には解し得なかつたかもしれない。僕は一個の藝術品を創作する時のやうな心地で饒舌つたのだから。そしてまた異國に對する憧憬の激しい苦悶を、辛うじて此の女の上に洩らさうと務めたことも記憶してゐる。見も知らぬ世界の果て生れて、怪しい運命の手に誘拐され、かうして遠い日本の空へ漂泊して來た女、僕はそれに對してただ不可思議な宿縁といふものをしみじみと感ずるだけではどうしても満足されなかつた。重苦しく澱んだ夜の闇の底に怪しく輝く蒼い瞳の光と、柔く肥えた胸のタツチが、僕の好奇心を甚しく惹きたしめた。スフインクスのやうな異國の女の胸にひそむ情緒の閃き、アルモンズの香がするといふその唇、その腕、そんなものが無上に欲しくなつた。畢竟僕の軀の破れた男性が醜い現實の興味に唆かされて、或空虚を盈たさうと欲したのだ。

僕は眼の前にまざまざと描き出された美しい裸形の女をひたと瞻視ながら拙い手段でそのBargain を促した。併しそれは僕にとつては全く未知のことに屬するので徒らに勞力を費やしたばかりで思ひ設けた効果は一つも得られなかつた。

彼女は追窮するにしたがつて、愈々酷薄な態度をあらはして、

『日本人好きません、金ない。』なぞと盲さがしてもするやうにじつと僕の顔を瞻視して冷やかに微笑した。

隣の酒場では外國船の水夫達が酔ひ狂うて、巧みに手風琴を奏しながら、潮風に嘎れたバスの聲で遠い異郷の悲しみを歌ひだした。卑俗な聲調も此冬の夜の情趣にしつくり溶けあつて、海の生活の寂しさがひたと胸に迫る。支那人の女は黙つて首垂れて、虚空に消えゆくその聲の行方を追つてゐる。その無心な姿を見てゐるうちに、涙のてるやうな遺潮なさが自と湧き起つて、僕の心は漸次と深く沈んで行つた。

遠い沖の方で、港へ入る船の汽笛がもの寂しく響いた。

九時をうつと、何處からか又二人の怪しげな日本人の女が出て來て、店は急に賑やかになつ

た。彼等は僕に對して殆んど異邦人のやうな冷たい眼眸をくれた。同じ日本の國に生れて、同じく傳來の習慣に浸つてゐる人から、かうした無關心な待遇——否寧ろ挑戦的な待遇を受けるといふことは、少なくとも此の夜の僕にとつて一種の快感であつた。鼻の紅い老つた歌羅巴人と、瘦せた鳶のやうな鋭い顔容をした支那人が入つて来て別な客となつた。續いて三人連の泥酔した水夫が、大聲をあげて怒鳴り散らしながらとびこんで来た。女は何時の間にか其の傍へ群れ集まつて、其處に初めて自分達の境地を見付けだしたやうな顔容をしながら、骨牌の相手をしたり、笑談を云つたり今迄とはまるで違つた調子で喋りだした。硝子戸になつた店の奥の間から、顔に火傷の痕のある陰鬱な眼光をした老婆が、訝しむやうに客の顔を一々じろじろ睨めまはした。僕は廢類した人生のなかに、ただ一つ取残された偶像のやうに、騒がしい群を離れて、自己の情調を楽しみながら孑然と坐つてゐた。

耐へ難い寂寥の思ひを懷いて其處を出た頃は、もう横濱の夜も靜かに更け渡つて、粉雪がちらちらと降つてゐた。人通りの稀な太田橋の上に立つて港の方を眺めると、朦朧と黒く浮き上つた建物の中から船の櫓が林立して、明るいアアク燈の光が雪空へぼくと映つてゐる。寒氣は

針のやうに鋭い。

酒の醒かかつた不透明な意識の面に浮んだのは、GOLKY と荷風に縛められた囚人のやうな見すばらしい感情の姿だつた。廢類した黄昏のやうな人生の匂ひが、此時身にしみじみと感じられた。夢と現實との間に横たはつた一線が何時しか幅を擴げて、今や到底越ゆべからざる暗渠と變じてゐた。僕は疼くやうな神経の苦悶を覺えながら、運命に呪咀はれたかの Bohemian の漂泊の生涯に無限の憧憬をさへげた。そして其儘車を備つて、暗い夜の大通りを、感覺の耽美を誇りとする街の方へ駛らせた。

鴨川の夕

黄昏の薄明りは漸次と加茂の碓へ降りて来た。

うす曇りのしてゐた西空にはいつか雲切れがしたとみえて、霞のやうな橙紅色の夕陽の反映が何處からともなくうつすりと流れて来て、川向ふの宮川町の廓をぼんやり夢のやうに照らし

出す。金色にきらきら輝やく窓硝子や、軒燈の間にはそれと同時に紅く濕んだ燈火が彼方にも此方にもぼつりぼつりと瞬きだして、賑やかな廓の夜がすぐ間近に迫つてゐることを示す。夕陽の残映はやがて廓の家並から建仁寺の方へ移つて、そこから今度は八坂の塔、清水の山門と、次第次第にゆるやかな東山の傾斜を上へ上へと静かに匂ひあがつてゆく。その跡にはもう燃えきつた灰のやうな冷たい夜がみるみるうちに滲んで来て、積の草叢や礫原はまるで原色寫眞のやうな不自然な色調を帯びて来る。それとともに刻一刻に宵闇が燈火の光を鮮かに浮出させて来るのである。

宿の縁先から清い水の流れてゐる磧へ高く架け渡した床のうへで、私は殆んど勞働者のやうな努力をもつて『尼僧』の稿を續けてゐるのである。漸次と濃くなつて来る闇のために遮られて薄白い紙面にはペンの運びがたどたどしくなつて来る。婢衆はやがて絹張りの古風な雪灯に火を入れて持つて来て呉れる。そして鼻にかゝるやはらかな聲で、

『もう御夕食に致しますさかい、お置きやしたらどうで御座ります。』と、云ふ。

私は黙つて筆を擱いた。そして薄明るい光の中で、今朝から堪へがたい酷暑と悪闘しながら

書きつゞけた原稿の紙数を数へてみる。丁度二十二枚ある。その投げやりな努力の跡をみるともううんざりして、その儘荒々しく折疊みながらインキ壺と一緒に机の下へ抛り込んでしまふ。そして崩れるやうに横に倒れて、美しい燈火の色を瞻めながら、何故こんな苦しい思ひをしてまで書かなければならぬだらうかななどと取留めのない事を考へてみる。そのうちに影繪のやうな黒い東山の頂線のうへがぼうつと蒼白く明るんで来て、宵闇の沈靜な空氣の底に六迭の鐘の音が靜かな餘韻をひきながら鳴り渡つて来る。私は疲勞と困憊とに極度まで惱まされ、いつとも知らず體ごとと溶け去つてゆくやうなデリリウムに襲はれる。やがて東山の頂きには洗ひ出されたやうな光のない月がぼつと浮び出る。それと一緒に涼しい夜風がそよそよと動き出して、松原から四條まで軒を連ねた西石垣の貸席の床々には薄明るい雪灯の光が漸次と數を増してゆく。そして神經の顫動のやうに細かいせせらぎをたてながら流れてゆく加茂の水には、廓の燈火と、月の光が互に相透ながら溶けて来る。

私は雪灯の火影で今日の勞力を祝福するため、盃をあげる。そして又今夜少時の散歩の後、更に稿を續ける準備のために、濃い酒を啜りながら作の順序を冥想する。いろいろな腦底

に起る空華が暫らくの間私を現實から引離してゆく。

二本目の酒が空になる頃にはもうすべての不純な思念が悉く消え去つて 私の胸には藝術的な感激が一杯に充ち溢れて来る。限りない興會とともに、何となく涙ぐまれるやうな旅愁が湧いて、東山から五條の方へかけて展がつた夜の色が耐らなく美しくみえて来る。私は歡喜と悲哀との辻に佇みながら茫然として空虛をみつめてゐる。

「長田はん。長田はん。」と、細い透明な聲が何處からともなく聞えてくる。と、みると、床のすぐ下の破には春來た時見知り越しになつた××子といふ若い藝妓とひとりの舞妓がいつの間にかやつて来て、蒼ざめた月光のなかに肩寒げな浴衣姿をくつきりと浮出させながら佇んでゐる。

上から聲をかけると、

「お、ほんまに長田はんえ。まあ、まあ長いこと。あんたはんのおいてやしたこと今日おたかはん姐はんに聞きましたえ。」と、云つて淺い小流れのなかに白い脛をふみ入れながら床の方へ歩み寄つて来る。そして月の光に眞白な横顔をみせながら私の方を振り仰いで、

「ほんまに長いことどしたえなあ。今度は又長いこと此方へおるやすの？」

人懐こい滑らかな言葉はまるで音楽のやうな美しい響を以て私の耳に觸れる。すべての感觸は一時にその尖鋭な閃きを、さめて、まるで大理石の球の如くに滑らかなになつてくる。

「ちよつと此處へ降りといでやす。そこでは遠うて、話が出来まへんがな。」

情趣の奴隷となつた私はやがて妓の命ずるがまゝ、に下床へ降りて、そこから冷たい水を渡つて、彼等の立つてゐる破へ出て行く。婢衆から席坐を放つて貰つて、汀の草叢へ敷いて、その上に坐つた。

「まあ怪體な形どすな。まるで乞食のやうやわ。」と、舞妓は口を抑へながらくすくす笑つてゐる。そして銀色に顔へる月光のなかに私達はいろ／＼な取留めもないことを語り合ひながら時間の移るのも忘れてゐた。

やがて暫らくすると、三四軒河上の床から「××子はん。××子はん。もう歸つといでやす。餘り夜露に當ると毒どつせ。」と、呼ぶ聲がする。それに促されて彼等は漸く立ち上りながら、

「あてえ今濱の家の床へ来てんのどつせ。又あとて寄せて貰ひますわ。さいなら。」と云つて、磯原を危げに辿りながらおはなで招ばれて来てゐる床の方へ歸つてゆく。その後姿が雪灯の火影の透いてみえる霞賣のなかへ隠れてしまふまで、私はその儘横にしよんぼり佇みながら見送つてゐた。

丁度午前の二時頃である。

流石に異常な努力を續けて来た私も到頭渾然とした疲労に打敗られて机の上に片脇つきながらうと／＼してゐると、又下の積で、

「長田はん。長田はん。」と、かすかに呼ぶ聲がする。

霞戸をあけて椽先へ出てみると、月はいつの間にか後へ廻つて、白晝のやうな明るい光が眞正面に加茂川を照らしてゐる。夜といふものを知らない京都の床には更け静まつたこの時分にもまだ方々に濕んだやうな紅い雪灯が點つて、絃歌の聲や、妓達の嘩く聲が賑やかに聞えてゐる。

すぐ下の積には又さつききの藝妓と舞妓と、それに頭の禿あがつた一人の老人が立つてゐる。

「長田はん。あてえ手紙あげまつせ。」と、妓が云ふと、客らしいその老人はやがて長い棹の先へ辻占賣がするやうに一封の手紙を挿んで、

「是非御本人に手渡し致します。」などと、酔つた聲で云ひながらその棹を私の方へ突き出す。私がそれを受取つて禮を云ふと、彼等は口々に浮々した言葉を云ひかはしながら、

「ほんなら又そのうちに、是非一遍知らしとくれやしや」と、その儘もと来た道を歸つてゆく。崩れるやうな笑ひ聲が漸次と遠のいてゆく。私は積の石に残つた月光を瞻めながら忍びやかな女の膚の匂ひの如く四邊に漂ふ情緒の澱滓を啜らなければならなかつた。

疲労しつくした心と、漸次に減退してゆく創作力とに鞭を加へやうとして、私はその翌晩、祇園のお多佳さんを訪ねた。暗い白川の流れにかけた座敷で、二時間ばかり面白い雑談に耽つた後、私は二人の美しい舞妓をかりて戸外へ出た。ほの暗い茶屋町から繩手へ出て、竹村屋橋を渡つて、古風な行燈のつゝいた先斗町の小路をぶらついたあとで、私達は漸う下木屋町

の宿へ歸つて来た。

二人の舞妓は方々へ手紙を書いたり、無邪氣な話をしたりして暫らくの間遊んでゐるが、やがて、

「お仕事をしやす邪魔になるといきまへんよつて、あてえらお先に寝まつせ。」と、云ひながらめい／＼自分て人形のやうな衣裳をぬぎかへて臥床のなかへ入つた。横になつたかと思ふと、もうかすかな寢息がす／＼と聞えて来た。

京風に結いた二つの鬘は薄暗い光のなかに紅い鹿の子のかけものをくつきり見せて、朱塗の小枕のうへに行儀よく横たはつてゐる。少し口を開けた儘、白い可憐な頬には何とも云へぬ安らかな夢を漂よばせて、形も崩さず寝てゐるその寢姿の美しさ、私は酔つたやうになつてうつとりその姿を眺めてゐた。月の光は縁端に一杯さし入つて、背の口から吹きしきつてゐる風がごと／＼と段戸をならしてゐる、果して、私の胸には燃えるやうな感興が湧き上つて来た。私はすぐさま机に向つて、異常な興奮を覚えながら稿を續けた。

併しその興奮状態は二時間と續かなかつた。連日の疲勞と、倦怠とてペンをもつ指先からは

漸次と力が失はれて行つた。そしてそれと同時に發熱でもして来たのか、軽い眩暈と胸苦しさが襲ひか、つて来て、座に耐えられないほど氣がいらして来る。「尼僧」の稿はまだあと六十枚の餘も残つてゐる。T氏からの催促の電報が二通も机の隅に載つてゐる、私は倒れる迄、書いて書いて書續なければならぬ。さう思ふと私は底氣味の悪い戦慄を覺えて再び病的な興奮に心を煽られながら筆を續けた。と今度は舞妓達の寢顔にさしか、つた蒼白い月光がいつともなく私を物語のなかにある夢幻境のやうな處へ連れて行つて、甘い思ひ出のやうな果敢ないもの、忍音が私の胸にほそ／＼と聞えて来る。それと、もに私の筆の尖端から描寫の誠實と云ふものが漸次と奪はれてゆく。現實といふ狡猾な手におへないしろものが何處か遠くて私を嘲笑つてゐる私は原人の血の記憶を喚び覺まして霽のやうに眼を掩つた幻影と悪闘しなければならぬかと思ふと、もううんざりして再び筆をからりと投げ捨て、しまつた。

西へ傾きか、つた月光は川向ふの廓から東山一體の傾斜に銀色の顫動を與へてゐる。賑やかな妓の笑聲がかすかに水を渡つて聞えて来る。積には咬くやうな潮の音に紛れて寂しげに鳴く蟲の聲が聞える。私はそつと舞妓達の枕元に歩み寄つて、彼等の美しい頬に指を觸れようとし

た。併し心の弱くなつた私はそれをするには餘りに彼等の無心の夢が脆いのを恐れた。で、その儘椽端の藤椅子に疲れ果た體を倚せかけて、限りなくひろがつた夜を凝視した。

私の腦底にはその時、既にゾラの教訓もフロウベルの教訓も何にもなかつた。冷たい省察を以て自己を顧みることとはもとより、皮肉な『描寫』と云ふ楯を持つて現實に迫つてゆく元氣すら出て來なかつた。かうした美しい情趣に浸るためには何ものをも犠牲にしても惜しくない。生活も、自己も。そして單に生活のために生活してゆくことの出来る人々の幸福を嘲笑ふと同時に詩がなくては満足の出來ない自分、感激がなければ作をすることの出來ない自分を決して可哀想だとは思はなかつた。

『尼僧』はその時からそろ／＼破綻を示して來た。悲しい斷念と、失望が私の心を暗くした。尼僧の主人公となるべき××庵の××尼からは急に今迄の人間らしさが消えて、彼女の柔かな頬に浮かぶ微笑が急に私を呪つてゐるやうな恐ろしい形相に變つて來た。私は今迄書いた原稿をこなく／＼に引割いて、あの可憐な舞妓の手で加茂川の水に流させてしまはうかと思つた。そして無數の蝶のやうにひらひら夜の空に消えてゆく紙片を思ひ、駄々兒のやうな不貞腐れな

氣になりながら明け易い夏の夜が東山の頂から曉の光を持ち來たす頃までぼんやり加茂の碛を眺めてゐた。

堺の町

私はその晩、夷橋の南詰にある蠅船の狭い小座敷へたつた獨りてしよんぼり坐つてゐた。電燈の光に照された明るい餉臺の上にはごて焼きの鍋が靜かな音をたてながらぐつ／＼煮えてゐる。酢蠣や、赤黄い廣島漬の皿が食欲を誘ふといふよりも寧ろ蠅船特有の情趣を味は、せるやうにごたく／＼に置き並べてある。私は漸次と深いところへ沈んでゆく自分の寂しい心をもつめながら、残り少になつた三本目の銚子から濃い酒を注いで飲む注いで飲む注いで飲むしてゐた。

この四日の間一緒になつて大阪の夜を讚美して歩いてゐた連れの人は一人別れ、ふたり別れして、到頭今夜になつて私ひとり道頓堀の熱鬧のなかへ置き去りにされたのであつた。ふと、氣づくくと、芝居の表飾りや、眩ろしいイルミネーションや、さまざまの彩旗に彩どられた大阪

唯一の歡樂境とも云ふべきその廣い街筋には私の見も知らぬ他國の人々が眞黒に群りながら右往左往にぞよめいてゐる。『だつせ』だんがな』など、云ふ耳馴れぬ語尾をもつた言葉が今更の如く旅人の耳を脅威するやうに私の周圍を圍繞してゐる。

旅人の寂しい心地はその時忽ちにして私の胸に甦へつて來た。煮沸するやうに激しく搖蕩してゐる賑やかな雑踏のなかで私は頼りない孤獨の寂しさをしみるゝと感じた。どうしよう、もうこの儘明るい大阪の夜を見捨て、堺の宿へ歸らうか……疲れ果てた心の底に閃いて來た最初の思考はこれであつた。で、其儘夕餐を濟まさうと思つて、私は前後を顧みる隙もなくすこすごと河岸の暗い路次を降りてこの蠅船へ來たのであつた。

最初の銚子は私からまづ疲勞を奪つた。その次の銚子は僅かに残された感溺の歡びを再び甦へらせてくれた。そして最後の銚子は興奮の後に起る極度の焦燥さと、球のやうに冷たい觸面をもつた異様な哀愁を私に與へた。

私はこの矛盾した二つの心地に浸りながら歡樂の殘滓のやうな苦がい酒を留度なくちびくゝ啜つた。と、みると硝子で割られた障子の外には暗い河の面がすぐ眼の前に高く浮き上つてゐる。

る。彼岸に軒を連ねた宗右衛門町の妓樓々々の灯は濕んだやうな懐かしげな光をその上に滴らして黒い船が音もなく通り過ぎてゆく度に、皺ばむだやうな波紋の影には橋の上をゆく車の提灯までが細く搖れる。そして廣告の電燈が明暗するにつれて纏つた荷船の腹や、筏や、黒い水のながへ脛を沒した橋杭までが夜の暗闇の底に朦朧と隠見して大都會の底を流れてゐる堀割の何處となくしつとりした匂ひがあり／＼と浮き上つて來る。

橋の上には雜然とした足音が騒々しく流れてゐた。芝居を見にくく人、明るい光のなかを漫歩する人、それから又酒と女の巷へ急ぐ人、いづれも皆夜の歡樂を逐つてゆく浮き立つた足音である、それがいつしか水の上へ零れ落ちて、閉めきつた船の障子の面へかすかな反響をひかす。そしてその動擾の彼方には何處からとなく啜かすやうな浮いた絃歌のさゞめきが聞えてゐる。

私の心はその街の聲に衝き動かされて、次第々々に慘めな破綻を現はして來た。道頓堀の濃い空氣と夜の色彩が全く私の胸に浸み徹つて來ると同時に、樂慾に對する新なる飢渴が又卒然として湧き起つて來た。そして純一を欲する心と、亂醉を欲する心とは俄に激しく相撻ちはじ

めた。

そのうちにいつとなくこの三四日の間、誘はれるがまゝに飲んで廻つた廊々の出来事が走馬燈のやうになつて、面白可笑しく映つて来た。新町で逢つた美しい藝妓の紅い唇や、南地の廊でみた羽左衛門に似たまんだの横顔。それから純大阪風の食ものを食はせる料理屋の座敷の敷物などが次から次と映つて来た。そして断片的な幻影はその當座々々の興味と感激とを再び思ひ起させて、底力のある執拗な魅力をもつて頻りに私を誘つたが、それと同時に心の何處かに微かながら自意識の影がさして来るやうな気がして、冷たい自己が亂酔と濃烈な樂慾を食らうとする欲念の底からこつそり意地の悪い瞳を据えて凝視してゐる様な異様な心地になつた。と、いつか重苦しい悲しみが再び心を暗くして、凡ての境遇や生活の條件を無視しつ、放蕩の底に耽溺してゐる自分の姿が、いかにも見すばらしく情なく映つて来た。そして舵を失つた船が無限に廣がつた海の上を當もなく流れ歩いてゐるやうに、酒と女の巷を唯徒に誘はれるがまゝに彷徨してゐる自分の凡ての行爲が何等の意味もない徒勞のやうに思へて来た。と、其利那、ありと有らゆる幻影はたちどころに翼を殺がれて、盡きせぬ思ひ出はその儘黒い志のやう

になつて心の表面に烙きついてしまつた。……

それから一時間ばかりの後、私は末吉橋の畔にある『松の亭』の土間から紙燭と瓦斯の光に彩られた豊婉な呂昇の顔を真正面に凝視してゐた。口紅を濃く塗つた若々しい彼女の唇からはてらてらに磨きあげた碧玉の膚のやうな聲が少しの滯滞もなく次々と溢れ出て来る。五彩に輝く石鹼玉がすうつと膨らんでばつと音もなく潰えてゆくやうに、纏れかゝる三味線の音につれて、その聲の律はさまざま美しい變化をみせる。私は先づその比類のない聲調の美に心を奪はれて、いつか木偶のやうな呆けた顔をしながらうつとり聞き惚れてゐた。

『またも都を迷ひいで……。』『宿屋』のなかで最も婉麗な、そして最も深い哀愁の籠つた口説きの一節になると、どうしたものか私は再び藝に對する感激から匂ひ出して、比較的冷い自己に歸つてゐた。ほの暗い光のなかに押し重なつてゐる熱心な聽客の顔も、限りない漂泊の悲しみを唄ふ賑らんだ呂昇の顔も、柱の陰に垂れた紅い幟も、すべてが次第々々に私の心を壓迫する重荷のやうに見えて来た。そして藝術といふものに對する熾烈な慾望が私を焦だ、せると、

もに、今までは際涯もなく廣げられてゐた自己が云ひやうもないほど小さく、醜く思はれて来て、自ら嘲る苦い心地が頻りに私を鞭うつた。

松の亭を出て、更け静まつた河岸を歩いてゆく時、私は全く憂愁の底に沈みきつてゐた。燃えつきた残灰のやうに、私の心は指を觸れたらその儘ほろほろと崩れて落ちてしまひさうに力なくなつてゐた。

寒い風は暗い河の面から時折すうつと吹きあげて来て、寂れた街筋には夜めにも分るほどの白く砂塵が舞ひ立つてゐた。そして下駄の音ばかり訝え返る静けさのなかを、人氣の少い電車が脅かすやうな鈴の音を響かせながら疾風のやうに駛り過ぎてゆく。私はそのなかをとぼとぼと歩いて再び賑やかな千日前の方へ歸つて行つた。

眩ろしい燈火の輝きと、雑沓とは再び私の眼の前にあつた。併しそれも私にとつては凍えついた玻璃畫をみるやうに思はれるばかりで、そのなか、ら生れて来る複雑な音響と色彩とは何等の刺衝も與へなかつた。

何をしようといふ意志もなくぶらぶらさまよつてゐるうちに、私はいつか難波の停車場へ来てしまつた。そしてそのまゝ、酔つた乗客や、遠出をする藝妓達の多い最終の電車に乗つた。

滑るやうななめらかな車の動搖に浸りながら、私はいつともなく再び呂昇の豊婉な聲を思ひ出して、ふと暗い氣持ちになつた。藝術といふもの、不可思議な姿がまるで霧のやうになつて私の眼の前に立塞がつて来た。そして電車が寂しい堺の町へ着くまで、さまざまな疑問や、斷定が私の頭腦のなかで眩ろしく旋轉した。

袋のやうになつた狭い堺の港は蒼ざめた半月の光の底に眠つてゐた。帆船の櫓は針のやうに數限もなく冷たい夜天の星を刺して、薄明りの立ち漱んだ静かな海の面には泊り船の舳燈が頼りなげにぼつ／＼と瞬いてゐた。私は港の岸に沿つた街を通つて寂しい大濱公園まで來ると、宿へは歸らずそのまゝ、港の入口の防波堤の上へ出た。そしてその突端にある小さな燈臺の下まで行つて、その石階の上へくづれるやうに腰を下した。

霧のやうな月光は廣々とした海上にも薄明るく流れてゐた。ひそやかな波の咬はすぐ脚下

から湧き上つて来て、人氣のない寂寥は彼方に延びた黒い旅館の軒並にも、砂溜にも、一面に限りなく溢れてゐた。そして遙北西の空には大阪の燈火が自己の存在の權威を誇るやうにぼうつと低い空を染めてゐた。

すつかり酒の醒めきつた私の心にはその特徴な戦慄が断絶なしに襲ひかゝつて来た。何となく涙のさしぐまれるやうな孤獨の悲しみが聳々と胸に迫つて、昨日は東、今日は西と、止み難い衝動の誘ふがまゝに流轉して歩いてゐる自分が宛かも指先で觸れる様に鮮かに意識される。

「さうだ、去年の今頃は野寄の町で旅役者達と一緒に暮してゐたんだなあ。」

私はふと嘆息をつくやうな聲を出して呟いた。と三百里も四百里も距つた遠い北の國の町々の思ひ出が突然に湧き起つて来て、あの摯實な自然と、何處か力の充ち溢れた彼地の生活が途方もなく懐かしくなつて来た。そしてそれと同時に今現在眼の前に廣がつてゐる飽くどいまでの色彩と幻夢に充ちた泡沫のやうな生活が衷心から厭はしく、呪はしく思はれて来た。

「いつまでこんな事をして迷ひ歩いてゐるのだらう。」この頃になつてよく浮かんて来るその思考が又執念深く心に喰ひ入つて来た。と、今度は泊り／＼の宿で、時さま／＼の慌たゞしい心

持ちに窮追されながら、及び腰になつてペンを駛らせてゐる自分の姿が漸次と浮かんて来た。自己の生活に豊富な色彩と、極まりない變化とを與へるために總てを擲つて投げやりな仕事を續けてゐる自分、否寧ろ自分の心内に燃えてゐる熾烈な、至純な藝術的慾望を刻々に濫費し盡さうとしてゐる自分が急に情なくなつて来た。

深い悔恨の念はいつか私の心に力強く浸潤して来た。そして果敢ない蜃氣樓のやうなあえかな生活から漸次と遠く背けられてゆく眼路の果には夜の闇に包まれた沈靜な境地が自づと開けて来た。その方へ惹きつけられてゆく心地はやがて私に何とも知れぬ力を與へた。丁度貝類が岩の面へ固着してゐるやうに安固な生活に固着して我れとわが自己をひたと凝視しながら何かいゝものを是非とも製作しなければならぬと云ふ希望は次第次第に私を幸福にして呉れた。

さうだ、明日は愈々此地を引き上げて奈良へ行かう、そして閑寂な寺院の庫裡へでも入つて廢滅してゆく古藝術の匂ひに浸りながら専心に筆を執らう。かう心を決めた時、私の心は常になく輕かつた。寢靜まつた宿の戸を叩いて漸う明るい室へ歸り着いた時、私は何とも云へない歡びを覺えた。妓樓の座敷で、悪酒の酔ひに惱まされながら寝苦しい幾夜を過ぎした事の愚か

さがしみじみと思ひ返された。雪白なシートと、柔かな夜具、そして静まり返つた室内の空氣は疲れ果てた私の心をじつと温かく抱きしめてくれるやうで、云ひ知れぬ懐かしさが胸に溢れて来た。私はその儘着換へをして寢床の中へ入らうとした。と、すぐ枕元の料紙箱のなかに留守の間に來たらしい手紙が幾通となく入つてゐた。そのなかには思ひがけない京都の舞妓が寄越した消息も混じつてゐた。

封を切つてみると、なかには生漉きのやうな薄い巻紙へ

「あんたはんがながいことかへつてきておくれやしまへんゆゑ、あてえもさびしうてさびしうてかないまへん……」などと姐さんに教へて貰つた儘らしい稚氣ない文句を、覺束なげな平假名で一杯に書き綴つてある。私はそれをみると薄暗い紙燭の蔭にほのめく紅いだらりの帯や、玉蟲色の彼等の唇や、鶯のやうな優しい饒舌を思ひ出して、一時はひどく懐かしい氣になつたが、併し人形を愛翫する心持で溺愛してゐた彼等さへ既にもう私を再び愛欲の巻へ引戻すことは出来なかつた。

「明日はどうしても奈良へ行く。」と、私は勝ち誇つたやうに叫んで、その儘夜具をぐつと引被

河霧

つて、すべてのものから眼旨ひてゆくことを欲するやうに固く眼を瞑つてしまつた。

もう明日は愈々此の土地にも別れを告げるといふ前の晩のこと、私はせめてもの名残りを惜しむために、町の本通りをぶらついて歩いたあとで、石狩川の河面のひと眼に見渡される裏町の喜月亭といふ小料理屋へ上つた。旅から旅を放浪して歩く身には、たとひ一月二月ひとつ土地に滞在してゐたとて知人の出來よう筈もなく、その町でも私は宿屋のものと、それからよく飲みに行く旗亭の女と四五人の藝者、それだけの知己しか得ることが出来なかつたのであつた。それもとゞ行摺りに逢ふ旅の人で、その間には普通の客と媚を賣る女との關係以外には何の羈絆もなく、どちらかと云ふと名残りの惜まれるのは人よりも却つて索漠とした冬枯れの自然の方なのであつた。

喜月亭ではいつものやうに二階の座敷へ通して呉れた。漁期で景氣はたつてゐたが、その晩

はどうしたものか他には一組の客もなく、三間ぶつとほしの座敷には洋燈の光だけが明るく點つて、粗末な鐵製のストーヴが獸のやうに黒く蹲くまつてゐる。婢は何よりも先にイタヤの大薪と火種とを運んで来て、そのストーヴへ火を入れる支度をしてくれた。

酒肴もそろつて、體のあいてゐる内箱の藝者が三人ばかり上つて来ると、どうやら四邊も少しづつ、色めかしくなつて来た。多くは小樽から來てゐる妓なので各自で饒舌つてゐる時にはその土地の方言なども出て、いかにも鄙びた心持がしたが、しかし私には土地柄だけにそれが又妙に興味を添へるのであつた。私はそのなかで一番喉のい、勇次といふ妓を愛した。顔は寧ろ醜い方で、別にとりたて、云ふほど眼に立つ處もなかつたが、併しその妓は、つとめに似合はぬ正直なところがあつて、鄙びた喉で唄ふ追分節が耐らなくよかつた。私は口に苦い酒をちびちび舐めながら、澤山數のないその追分節に耳を傾けるのが、このうへもない樂しみなのであつた。

勇次の外にも方々を渡り歩いて來たらしい莫連者の時子、花次など、いふ妓がゐるが、私は荒んだ心持ちをその唇から強ひられるばかりでそれまで別に何と云つて興味も持ち得なかつ

た。しかし喜月亭へいく時にはその妓達の顔が揃はなければ寂しかつた。

その晩は十二月の初旬によくあるどんよりと曇つた底冷えのする晩で河口の方から吹き込んで來る風は石狩川のひろくとした川面に細かい漣を一面に刻んでゐる。枯葦は動んだ黄ろに末枯れて、彼岸の堤の腹にはまだ薄い根雪がところ／＼にほの白く光つてゐる。黄昏は息をひくやうに漸次と夜の闇に移つて、みる／＼うちに村里の寂しい灯影の幾つかを残してあとは灰明るい夜に包まれ、物音もない静けさが何處からともなく河面を閉ざしてゆくのであつた。

私は今夜が別れかと思ふと何とない切なさにもいつもよりずつと酒が進んだ。酔へば酔ふほど至純な心持ちが湧いて來るやうな氣がして、じつと自分の心を見つめてゐるその寂しさと云つたらなかつた。

私は到頭我慢が出来なくなつて、妓達に明日は愈々此の地を去ることを打明けて話した。通りすがりの客とは云へ、さすがに馴染んでみると妓達にも幾分か別れを惜しむ心持ちがあると見え、勇次などは、

『ほんとですか？擔いぢやいけませんよ。』など、云ひながら妙な顔をして私を見た。

明日立つことが愈々嘘でないのが分ると、妓達は妙にしんみりした顔色になつて、
 『ぢや今夜がもうお別れねえ。』など、云つて、今更らしく酌をしてくれたりした。
 勇次は素人のやうな口振りになつて、

『どうせ一度はお歸りにならなかりやならないんだけれど、それにしても別れつて云ふものは何となく厭なもんですわねえ。でも又いつか此方へ被來ることはあるんでせう？』と、云ふ。
 私は盃を彼女へさしながら、仕方なしに、

『さあ、どうなるかねえ。』と、あやふやな調子で返事をする。一度此の町を去つてしまへば、無論私には二度とふた、びこんな土地の土を踏む望みはないのである。札幌や小樽あたりまでは或は何かの用で來ないとも限らないが、併し何の由縁もないかけ離れた此の町へどうしてももう一度來る機會があらう。従つてこの妓達とも今夜が長の別れて、運命の不思議な紛糾がない限り私はもう一生彼等に逢ふことはあるまいと思はれる。それを思ふと私は流轉の悲しみが胸に迫つて、冷まさる夜寒がぞく／＼と肌を刺して來た。

いつもは眞先になつて騒ぐ時子がどうしたのか今夜は初めから妙に打沈んでるたが、その時

ふと静かになつたはずみに心の底から洩れるやうな深い溜息をつく。私は變な氣がしたので、態と笑談にまぎらかしながら、

『馬鹿に情氣てるぢやないか。どうかしたのかい？』と、云つて冷評すと彼女はさも耐らな
 いと云つたやうに返事もしらずに低く首を垂れてしまふ。

花次はそれを傍から引取つて、

『今日は時ちゃん、大變ですの。もう朝つばらからかうして辟息ばかり吐いてるんですのよ』
 と、時子の方を見ながら云ふ。

『は、、、、いつにないこつたね。扱ては何か悪い便りでもあつたのかね。』

『い、え、そんなことぢやないの。もつと／＼大事が持ち上つたんです。』

『お母が死にでもしたかね？』

『ほ、、、お母はよかつたね。そんなことぢやないの。ねえ、時ちゃん、云つてもい、かしら？』
 と、花次は時子の顔を覗き込みながら云ふ。

時子は黙つて合點くばかりであつた。

花次はそれを見ると急に眞顔になつて、

「ねえ、旦那、實はね、時ちやん今度外へ住替へすることになりましたのよ。」

私は餘り思ひ懸けないので吃驚しながら、

「住替へする？何處へ？」

「何處へつて、それが大變なところなの、樺太の豊原へいくんですわ。」

「樺太？そりや大變だね。一體どうしてそんな果てへいくんだね。」

「それにやいろく、深い事情がありましたね。…」と、云ひながらそれと同時に花次も妙に打

怖れてしまふ。そして自分も深い嘆息を吐きながら「ほんとにこの稼業ぐらゐ厭なものはありませんわ。お金で身を賣りやそれまでなんですものねえ。自分の體が自分のでなくなるんですものねえ。」

「そりやまあそんなものだが、併し樺太とは思ひ切つたもんだなあ。」

「私も樺太だけはおよしつて随分止めたんですけど、何しろ當人がもう全然自棄になつちま

つてゐるもんですからねえ。考へてみりや全く無理ありませんわ。私時ちやんの心のなかを察しるとほんとに耐らなくなるんですの。」

「花ちやん。もうそんな話しはよしとくれよ。」と云つたが、色蒼ざめたその頬はいつの間にか洗つたやうに涙に濡れてゐて、思ひの切なさや寒げなその肩にも現はれてゐる。そしてその儘じいつと眼を据ゑて花次の顔を見つめてゐるが、やがてそこにあつた椀の蓋をついと取上げて、

「ねえ、花ちやん、お酌しとくれな。私氣が減入つて仕様がなから今夜はぐづくに酔はうかしら」と、云つて、今度はぼんやりしてゐる勇次の方を向いて、

「ねえ、勇ちやん。お前さんも何か追分を唄つておくれよ。旦那も明日は東京へ歸つておしま

ひなさるんだつて云ふし、私ももう十日ばかりたつと此の土地にやるなくなるんだし、今夜はお別れにしみるゝあんなの追分が聞き度いわねえ、旦那。」さう云ひながら彼女は花次が注ぐ酒

をなみくくと受けて、眼を瞑つたま、ぐつと干してしまふ。

勇次はそれを見るとほろりとして、少時すると黙つて三味線をとりあげた。そして波の音の相方を弾きながらやがて追分節のひとつしをいかにも張り切つた調子で唄ひだした。

「山瀬風、別れの風だよあきらめしやんせ、またいつ逢ふやら、逢はぬやら。暗い北方の海の波浪に咽ぶ海鳥の悲鳴、それにも似た節調の悲しさは脈々として嘔り泣くやうに間内にひびいてゆく。」

私は引入れられるやうなその聲に聞惚れながら見るともなく硝子窓から戸外の方を見たが、ふと氣付くと、その時四邊の光景はまるで一變してゐた。今しがたまで燈影の隠見してゐた向岸はいつかしら全く視界からかき消されて索漠とした石狩川の河面には銀灰色にほの明るむ濛氣が一面に掩ひか、つてゐる。それは風が吹き止むと一緒に海の方から忍び込んで來た霧であつた、そして霧の底の何處かてかすかに河蒸汽の汽笛が鳴つてゐる。私はその刹那の感動を今に忘れることが出來ないのである。

落日

思ひ出の多い旅路の記憶が胸の底に甦つて來る度に、私は諸國の泊りてみた五つの美しい

落日の光景を思ひ起さずにはゐられない。落日の詩趣、落日の悲哀、落日の榮光、それはいづこ如何なる國里に於ても、眺める人の心持ちによつて深く淺く、とりどりに感ぜられるものである。孤影を追うてさすらひゆく寂しい旅路で、私はその五つの黄昏からどんなに深い、そしてどんなに忘れ難い印銘を得たであらう。それ等の幻影が眼のまへに髣髴して來る度に、私はいつもいつも無限な藝術的感激に陶醉しずにはゐられないのである。

丁度二月の中旬のことであつた。

私は石狩川の源流からかの有名な狩勝の嶮處を越えて、十勝の曠原の方へ下る釧路ゆきの列車に乗つてゐた。長い分水嶺のトンネルを出ると今迄は針葉樹林の底にほの明るく嘆いてゐた冬の夕陽がいつの間にか國境の連槽の彼方に春いて、そこらに積もつてゐる雪層はまるで凍つた紅蓮のやうにざらざら輝きだした。ゆるやかな傾斜をひいて平原の方へ流れ落ちてゆく狩勝嶽の山腹はたゞみる一望の大雪原で、その面のところどころにひよろひよろと立ち腐れた樹木は、今その落日の名残を斜に受けながら病み呆けたやうな長い影を倒してゐる。そして見渡す

限り海のやうに茫漠と廣がつた平原の果は、もうそろそろ薄紫の靄に包まれて、人煙の薄い彼方此方の開墾地には、村里の夜を飾る灯一つ瞬いてゐない。絶対の静寂と、陰暗とした黄昏の中には落ちてゆく夕陽の悲しみだけが刻一刻に濃くなつてくる。私は廣い廣い神祕の郷國を俯瞰してゐるやうな心持ちで、じつと十勝の平野を見下してゐた。

その時私の胸には寂寥など、云ふ感じは悉く消え去つて、重苦しい鉛のやうな恐怖だけが残つた。文明も、繁榮も、動搖もすべてが地上から消え失せて、嘗てみた北方の絶海に浮ぶ氷山の姿だけが幻のやうになつて眼底に膠着してきた。原始のまゝの落暉を浴びながら「假象」そのもの、如くに影さへ薄く、暗い海上を「虚無」の方へ徐々と蠢動してゆくその神祕な氷山の姿、永遠を暗示したその幻影。私は十勝の國に沈む落日のなかに自然の威容を發見するよりも、先づその自然の底に隠された恐怖を見たのであつた。

私は凍えたやうな冷たい車窓の板硝子に頬を押し當てたまゝ、最後の薄明が空から消え落ちるまでじつと凝視してゐた。北斗星の爛々と輝く暗い夜は却つて私をその恐怖から救つて呉れたのであつた。

後志の照岸の鯨場してみた落日。

その日はこそりとも風の動かぬ底寒い日で、黄昏はアルカリ水に浸した檢酸紙のやうに、透明な空氣の底からいつともなくぼうつと色づいて來た。薄紅い靄のやうな光は次第々々に燦けたゞれて、海上は少時の間に眞紅な影なき焰に掩はれてしまつた。岩礁に咽ぶ波浪の飛沫も、鯨骨も、海上に漂ふ漁船もすべて一様に燃えあがつて、その反射は無限の虚空に向つて微妙な夕暮のコーラスを唱へはじめると、太陽は赤褐色の大盆のやうに光薄れて、いつのまにか壽都岬の沖合遠く沈んでゆく。その姿が水平線の上に少しづつ、蝕ばまれていつたかと思ふと、眞紅な靄を浮べた浩蕩たる波路の果には一條の金蛇が漸々と金鱗の數を消して、その落日を頌榮する浮雲もない寂しみのうちに、息をひくやうにすうつと姿を晦ましてしまふ。ほんとに何が荒寥としてゐるといつて、北日本海に沈む落日ほど荒寥とした光景は又とあるまい。

日が落ちると海上には瞬くうちに残暉が消えて蒼ざめた紫色の空からは待ち兼ねてゐたやうに暗い夜が滲み出て來るのである。

やがて鯨のつく時が来る。

遠い沖合から三羽四羽づつ、海鷗が寂しさに啼きつれながら飛んで来たかと思ふと、薄い薄明りの残つた西空には螟蟲のやうに打群れたその鳥の集團が見えて来て、低く水上をかすめて飛ぶ姿が雪片のやうにちらちら暗を破りだす。

「それ鯨がついた」誰からともなく口々に傳へられるその言葉が、出船の櫓拍子と一緒に岩礁の多い荒磯を騒がす頃には、もうそこらはとつぷりと暮れて、篝火のあかあかと燃えたつ動擾の夜となつてしまふのである。

私はもう十年ほど前に八ヶ嶽の絶巔で見た落日を忘れることが出来ない。その頃から私には異常な旅行癖があつたので、暑中休暇になると私は必ず學校の制服に雑糞ばかりの輕装をと、のへ殊に山地の旅を好んでゐたので、たつたひとりて甲斐信濃の深山幽谷に分け入つたものであつた。

八ヶ嶽に登つたのもさうした機會の一つで、諏訪の町で逢つたさる大學生と一緒に、私は槻

木口から本澤への登山道をのぼつた。その日は茅野を出る時には妙にしぐれさうな蒸暑い空合だつたが、漸次と登るにつれて蒼々とした空がすぐ頭の上に展けて来て、四周の展望はきかなくとも、灌木林に照りつける日光は綠色のいきれをたてるやうで、何とも云へない壯快な感じがした。

その日の夕方、赤嶽の裾を廻つて温泉の方へ下りようとする時、私は突然恐ろしい雷雲のなかに巻き込まれてしまつた。はじめは霽かと思はれるやうな濛氣が山嶺の方から少しづつ降りて来たが、みるみるうちに濃くなつて、まるで生きもの、やうに息をしながら厚い雲が層をなして四邊を引包んで来る。冷たい濕氣はじとじと首筋へからみつくやうで私は呼吸塞迫を覺えて来た。

そこへ突然、私達の踏んで立つてゐる山肌が俄かにぶるぶる微動を傳へて来て、何處かて巨獸が咆哮してゐるやうな重苦しい轟響が聞えたかと思ふと、すぐ眼の前で今度は凄まじい大爆音が起つて、紫色の火柱がさつと天に沖した。その時の私の恐怖はどんなであつたらう。友なる大學生は、

「そらッ噴火だッ」と叫んだつきり、私もなにも置き去りにして、方角も分らぬ濃い雲のなかを何方へともなく姿を消してしまつた。

私は途方に暮れて、すぐ鼻の先へ迫つて來さうな火柱を眺めながら手足を縛りつけられてもしたやうに突立つてゐるが、やがてはつと正氣に返つて、そのまゝ、無我夢中で友の後を追つた。何町ほど駆け降りたか、自分ではまるで知らない。なにかにばつたり蹴つまづいたかと思ふと私の體はついと宙に浮んで、そのまゝ、私は全く人事不省に陥つてしまつた。

少時して友の聲に呼び覺まされてふと眼をあけて見ると、私はどうしたのか、高さ二丈ばかりもあらうかと思はれる斷崖のうへから大きな地隙のなかへ落ちてゐたのであつた。幸ひ大した怪我はなかつたが、右の足の踝のところを打つたと見えて、足袋が破れて、そこからは血が赤く流れ出てゐた。

その時になつてはじめて氣がついてみると、噴火と思つたのは間違ひで、私達は恐ろしい雷に追はれたのであつた。四邊には既に雲の群は消えて、赤嶽の頂あたりの丁度雲と峰とキスしたやうな形になつてゐる處では凄まじい紫電が閃々と迸發してゐた。

私は少時の間は腰が痛んで歩けさうもないので、その儘横になつて、友に介抱して貰つた。その時は天も地も最早夕暮になつてゐて、下界に重疊した密雲の間からは光環を背負つたやうな夕陽が斜に光芒を落しながら顔を出してゐた。槍ヶ嶽、燒嶽、蓼科、駒ヶ嶽の絶峰はいづれも雲の海に浮ぶ島影のやうに奇怪な形をした頭角を黒々と現はしてゐる。夕陽は時折雲の縁線に分光され、紅、緑、黄、紫などの五彩に輝いて、人界から遠く隔絶した天上の美觀をそこに集めてゐる、その刹那の美感こそ實に天樂聞え、虚空に散華する天女の羽裳をみるとても云はうか。壯嚴、神祕、端麗、あらゆる言葉を以てしても到底その真相を描破することは出来な

い。
夕陽が山麓の彼方に没してしまふと、空の一方に射出される残暉がまた更に美しい色彩の詩趣を現はし、肩をなした雲の群は茜色に濃く淡く染めなされて、それが刻一刻に死灰色に褪せてゆく寂しさ。藍黄色の空は濃い紺碧に變つて、それがまたいつともなく眞紫に移つてゆく。そしてそこにさかしげな眼を睜く星の数々と一緒に、群山の頂も、深い谿谷も夜の沈黙と冥想の底に葬られてしまふのである。

私はその頃熱愛してゐたツルゲニエフのユングフラウの散文詩を思ひ起しながら、宇宙といふものに對する驚異の念に打たれたのであつた。

時は七月の末である。

私は大空まで汗をかきさうな暑い日に、大利根から霞ヶ浦へ通ずる小利根の堀割を小さな帆船に乗つて旅してゐた。

もうそろそろ黄昏れそめる時分に、船は牛堀の村を左にみて潮來へかよふ水路へ入つた。兩岸は青々とした蘆荻の原で、薄濁りのした夏の水にその縁が漂ふほとりからは行々舟の聲がしつきりなしに聞えてくる。そして夕暮れと、もに少しづつ、喘いできた微風は廣々とした水面を擦るやうに撫で、今まで眠りを誘ふやうに響いてゐた櫓聲はいつかしらはたはたとゆらめく帆のさ、やきに變つた。時々舵の動く音がぎいッぎいッと靜かな河面へ響いてゆく。

私の傍には、何處へ出稼ぎにゆくのか、二人の酌婦らしい女が、胴の間の横木へだらしなく寄りか、りながら眠りこけてゐる。中形の派手な浴衣の八つ口のところから見える白い腕はう

すく汗ばんで、披けた胸には安白粉が斑に浮きあがつてゐる。私は蘆荻と水との間の半日の旅に疲れて、眠いやうな、頼りないやうな備い心持ちでその女達の寢姿を眺めながら、今宵の泊りのことなどを考へてゐた。

ふと氣づくくと、四邊はいつのまにか薄暗くなつてゐる。そして女の顔には何かしらほの紅い色がさしてきて、それが見るみるうちに爛れたやうに焼けてゆく。思はず後を振り返ると、私は悸乎として眼を瞑らずにはゐられなかつた。牛堀の彼方に見える低い地平線には今血のやうに熱れた夕陽がひと抱へもありさうな大きさになつて沈みか、つてゐるのである。帆の影も、船頭の横顔も、蘆荻の原も、村の白壁もその瞬間、沈みゆく夕陽の色と一樣に燃えたゞれて、陽炎のやうに燃えたつその紅い霧のなかを一群の晩鴉が遠く啼きつれながら環を描いてとんでゐる。

しかしその美観は十分と續かなかつた。灰色の黄昏は忽ちにして空を包み、水を包み、潮來の町の灯がちらちらと見えそめる頃には、東の空に夢のやうな姿を浮べてゐた月が、澄んだ銀色の光で下界の夜を照らしはじめた。

蘆荻の叢からついついと出て来る歸り舟は一艘一艘数を増して行つた。後になり先になり戯れながら漕いでゆくその小舟のなか、らは若い女達の唄聲が月の出潮をたへるやうに響いて来た。

伊勢路は桑名の町の春の夕暮ほど美しいものはない。

狭い小路には合羽屋や行燈屋などの古めかしい店格子が宵闇にほのめいて、そこらに遊ぶ子供達の唄聲は、私に少年時代の甘い情緒を呼び醒ましてくれた。車の軌り、工場の汽笛さへ聞えぬ夕暮の沈静が私にはどんなになつかしかつたらう。

廊へ入ると、小格子のなまめかしい茶屋々々の軒にはほつかりとした春の風が吹いて、白粉の匂ひがそのなか、らかすかに湧き上つてくるやうな氣持ちがする。稽古三味線のしのび音も頼りなげに響いて、おはなにく伎達の襟あしや、舞妓の白足袋には庇間から流れてくる夕陽の光が喰ひつくやうにしみついでる。そして軒燈の光がそのなかでぼけたやうな夢をみてる。

船津屋の奥座敷からみた落日は今に忘れることが出来ない。揖斐の大江は庭先まで満々とたたへて、泊り船の櫓にとまつた一羽の鴉だけが紅く染まつてゐる。夕陽の光は最早家並の彼方に沈んでしまつたので、最後の閃が僅かに櫓の尖端に残つてゐるのである。

東の空に浮んだ雲の峰々はだんだんと薔薇色にうるんで来た。その影は河面に落ちて、夕陽の沈んでゆく有様が刻々にその面へ刻まれる。その静かな、夢のやうな光景を眺めてゐると、私の胸には春の夜を戯れ暮らす戀が思ひ起されて来た。私は夕暮れに人を待つといつたやうな淡い情緒を久しぶりて覚えさせられた。日が落ちてしまつてからも、温い春風は女の紅い唇を洩れる嘆息のやうにそよそよと吹いてゐた。

滯

羊蹄、樽前の山脈を越えて凄じい北風がもう間もなく雪を運んで来ようとす頃であつた。黄褐色に色どられた荒涼とした膽振の原野の彼方此方に散在してゐる新開の村落を流れ歩いてゐた中村一座は兼ねて古馴染の巡業地の一つになつてゐた室蘭へ乗り込んで、久々芝居小屋らしい表がかりのある末廣座の蓋をあけた。夏場から引續いての不入りでひどく惱まされた揚句、一座の屋臺骨になつてゐた鶴藏は網走へ興行にゆく途中、上常呂の寂しい谿間の驛で病死してしまふし、旭川ではまた立女形の梅吉に逃げられてしまつたので、今度の室蘭の興行も苦い経験を嘗めつくした座頭の眼にはもう初日から大方底が見えすいてゐたのである。

その晩は丁度三の替はりの出しものとして『忠臣蔵』と『矢口渡』の頓兵衛内の場を演じた。旅藝人の拙い演技とはいひながらこの二つはいつ出しても相應に入りのある狂言だつたが、生憎宵の口から降り出した雨に抑へられて八時過ぎになつても一向に客足がつかず、たゞツケを打

つ音ばかりが小屋の外まで勢ひよく響いてゐた。

茶屋場のだれた一幕がすむと、お輕に扮した美しい田之助は平右衛門が置き忘れていつた手拭が足もとに落ち散つてゐるのを見付けて、そつとそれを拾ひあげながら誰れよりも遅れて舞臺をひいた。道具と道具の間の狭い通路を襦袢の裾を氣にしながら張りもの、裏へ入ると、そこは穴藏のやうな暗がりて、揚屋の道具をこはす鐵槌の音が妙に冷たくひびきわたつてゐた。

「おい、田之さん。ちよいと待ちねえ。」と、張りもの、陰からいきなりしや嘎れた聲が彼を呼びとめた。その呼びかたがあまり唐突だつたので彼は吃驚して思はずそこへたちどまりながらじつと眼をすゑて暗闇の中をみつめた。呼びとめたのは九太夫に扮した扇昇といふ年老つた朋輩だつた。

「おい、田之さん。お前もい、腕になつたなあ。」といひながら扇昇は田之助のそばへ歩み寄つて、「今夜はもう安宅の關ぢやあ通されねえ。さあ目をつぶつて二分出いな。」
「何をいつてるのさ。何がい、腕だい。」

「おい、おい。いゝ加減にシラをきるもんだぜ。情人が出来るとどいつもこいつもみんな圖々しくなりやがるなあ。棧敷の四つ目は一體どうをさまりをつけるんだい。」

「棧敷の四つ目？それがどうしたの？」

「それ見やがれ、ぎつくりだらう。」

「また一件かい、あれを今更種にするなあ野暮ぢやないか。」

「笑談いつちやいけねえ、俺のいふなあイ印のことぢやねえぜ。…それぢやお前まだ知らねえんだな。驚いた奴があるぜ。ぢや俺が教へてやるからちよいと来な。一目みて吃驚するなよ。」と、扇昇は一人て合點しながら田之助の長い袂をつかんで張りもの、裏を鳴物の溜の方へ引張つて行つた。下手の道具はもうあらかたこはされて薄明るい舞臺の光が大部屋の梯子段のあたりまで斜に流れこんでゐた。

囃しのところには鳴物を受持つてゐる雇ひ婆さんがたつた一人て三味線を抱へたま、薄暗い中で頻りに居眠りをしてゐた。扇昇はそのそばから體を横にのして棧敷になつた小さな口をあけながら観客席の方を覗いてゐたが、やがてそれへ田之助の重い髪をおしつけるやうにして、

「さあ、文句をいはずに棧敷の四つ目を見な、代は見てのお歸りだ。」

田之助はそこからそつと観客席をみた。薄明るい電燈の光に照らし出された穢い小屋の一部が、濁つた水の底へても沈んでゐるやうにぼんやり霞んでみえた。やつと百五十ばかりの入りなので土間も棧敷も齒がぬけたやうに穴があいて、舞臺からみた時よりも猶一層がらんとしてもの寂しく思はれた。彼は棧敷の一から順にみていつた。そして四つ目に來たときはつと胸を衝かれて思はず頭を後へひいた。——丁度三つ目を占めてゐる三人連れの男客の陰に銀杏返に結つた蒼白い女の顔がみえた。しかもそれは彼の記憶にまだ生々しい痕跡を残してゐる女の顔だつた。

「どうして來たんだらう」と、彼は自分の心に問ひかけるやうに呟いた。八月の末に小樽で別れた筈の女が汽車で小一日もかゝるこの室蘭へどうしてやつて來たのだらう、女の身分と位置とをよく知つてゐる彼にはそれが殆んどあり得べからざるこのやうに思へたので、疑ひは思ひもかけぬ激しい心の擾亂を喚びおこした。

「どうだい、見えたかい。確かに小樽のレコだらう。」と、扇昇はぼんやりしてゐる彼の肩をた

たきながら訊いた。

「あ、、だけどどうしてこんな處へやつて來やがつたんだらう。」

「それを俺が知つたことかい。はるばるあ、して尋ねて來たからにやどうせ悪いことはねえやな。なんでもい、から二分出しな。この年寄に一杯まかなつて罪亡ぼしをして置かねえと跡で崇るぜ。」と、扇昇は人のよささうな聲をだして笑つた。

「ちよいとお待ちよ。次第によつちや二分出すけど……」田之助は鬢を傾けてもう一度穴から棧敷をみた。眉の濃いところといひ、鼻のたかいたところといひ、その女はたしかに小樽の女だつた。お勝さんだつた。

屋根裏のやうな樂屋へ歸つて來て、下廻り達と一緒に衣裳の始末をしたり、顔を洗つたりする間も彼は棧敷の女のことばかり思ひつゞけてゐた。幾度か挨拶にゆかうと思ひ惑つて到頭ゆき得なかつた。何か彼の心を重く抑へつけてゐるやうで、さう安々と女に逢つてはならないといふ聲が何處からともなく聞えて來るやうな氣がした。

やがて次の幕があいた。冴えかへつた拍子木の音がやんでしまふと樂屋は急に靜かになつた。彼は窓際の鏡臺の前へ坐つて次の幕の力彌の顔をつくりながら今度は落ちついて女のことを考へはじめた。しかし幾度考へなほしても彼女が室蘭へやつて來た理由はまるで雲をつかむやうであてさへつかかなかつた。戀しい自分の跡を慕つて逢ひに來たものとしては、過ぐる日小樽での別れが餘りにあつさすぎてるたやうに思へた。そしてしまひには何かしら重大な事件が眼のまへに迫つて來てゐるやうな淡い恐れさへ覺えて、胸が揉まれてゐるやうに軽く躍つてきた。

顔をつくつてしまふと、彼はつと立ちあがつて、いつでもするやうに後の壁にかけてある古びた姿見の前へ立つた。横あひから射して來る電燈の光は白粉と砥の粉とで巧みに彩どつた彼の顔を似顔繪のやうに美しく鏡の面へ浮きださせた。それをみると彼は何とも云ひやうのない満足と誇りとを感じて、艶やかに微笑んだり、口を斜にひきゆがめたりいろいろに表情をかへながらうつと見惚れた。この美しさに迷はない女が何處にあらう、四十里五十里の路は遠くてもこんな美しい男のために旅をするのなら、それが却つて女の身にとつてはうれい種に

なるのかも知れないと思ふと、今迄心の底に蟠つてゐた小樽の女のことを譯もなくかたづけしてしまつたやうで急に明るい心に歸つた。そして彼が今迄に経験した情事のなかつても華やかな色彩をもつてゐる彼女との間の關係をこたはりのない氣持で再び心に思ひ起すことが出来た。

160
 …女は小樽でも二流と下らない角正といふ有福な運送店の總領嬢であつた。名はお勝さんと云つて、年はもう二十歳を越えてゐたらしかつた。初めて彼と關係の出来たのは丁度去年の冬の事で、一座が小樽の花園座でしきりにかぶつてゐる最中であつた。或晩佐川といふ名で樂屋へ纏頭が通つたが、その金高は並はづれて多かつたので、田之助は座頭に連れられて棧敷にゐる客のところへ挨拶に行つた。客といふのは二人連れの人だつた。一人は土地で名高い湖月といふ料理店の女將で、もう一人がそのお勝さんだつた。そしてその翌晩、芝居がはねるとすぐ田之助は湖月へよばれていつたが、まだ子供氣の失せなかつた彼は譯もなく恐ろしくて、座敷の敷居を跨ぐときぶるぶる戦へた。浮いた稼業はしてゐても、旅から旅を渡り歩いてゐる憐れな藝人にはかうした晴れがましい座敷へ出ることが既に意外な出来事だつたのである。その

時座敷にはお勝さんの外に女將もゐた。そして何もかも呑み込んでゐるやうな落ちついた顔つきをして頻りに二人の間をとりなしてゐたが、時分を見計らつて巧みに座をはづしてしまつた。「もつと此方へお寄りな。」と、初めてお勝さんに聲をかけられたとき彼はまたぶるぶる肩をふるはした。そして兩方の頬が焼けるやうになつたのを今でもはつきり覚えてゐるが、我儘な氣のきつさうなお勝さんの眼つきはその時からもう田之助の心をすつかり征服してしまつた。その眸の下にゐる間は身動きもすることも出来ないのだといふやうな意識が不思議な位彼の心の底深く喰ひ込んだ。そして彼としては奴隸のやうに身を卑くして、女のいふ通りになつてゐるより外はなかつた。

二度目に逢つたのは恐ろしい吹雪の晩であつた。樂屋口からすぐ橋に乗せられてお勝さんと一緒にまた湖月へ行つた。その時幌の隙間から見たそとの景色はどんなに物凄かつたらう、街燈の暗い光に照された街には降りしきる雪が煙のやうに渦巻いて、人の往來は全く途絶えてゐた。橋がある坂路へかゝつた時、死んだやうな雪の夜の沈黙を破つて何處からともなく凄厲な犬の遠吠が聞えて來た。彼は恐ろしさにぞつとて思はず女の膝へ手を措いた。すると女は何

と思つたかいきなり彼の肩へ腕をまはしてじいつと抱きしめながら冷たい頬をすりよせた。板片のやうに固く凍つた綾織りのコートの袖が痛いほど強く彼の首筋を抑へた。——その晩彼は到頭物置きのやうな寂しい樂屋の二階へ歸ることを許されなかつた。そしてその翌朝今迄に擱つたことのないほど澤山な金を貰つてやつと執拗な女の手から解放された。

三週間の日数をうつつてしまふと一座は其處からすぐ旭川へ移つて、暫らくの間おもにその附近の町々を興行して歩いてゐたので、二人は自然と逢瀬を断たれてしまつた。今年に入つてから三月と八月に一座はまた小樽の土を踏むことが出来た。その都度面白をかしい追憶の數々が薫りのたかい酒のやうになつて彼の心に残つた。

しかし田之助も今では女の心持がすつかり呑みこめて來た。それと同時に處女であるながら茶屋遊びでも何んでもやつてのける氣性の激しい、妙にひねくれた性質を少しづつ、持て餘すやうにもなつた。殊に發作のやうなはげしい愛撫を受けるとき、彼は幾度か顔をそむけて苦笑したが、戀の上でさへ對等の位置にたつことの出来ない彼の身としては飽くまでも自分を抑へて専心女の氣に入るやうに振舞ふより外はなかつた。……

「成駒屋さん。ちよいと樂屋口まで。」と、聞きなれた聲がいきなり彼を呼んだ。果しなくのびてゆく思ひ出の絲がふつりと切れて彼は急に我に返つた。そしてどきまぎしながら後を向いて、「何か用かい？」

「え、是非お眼にかゝり度いつてえ人が來てゐますぜ。」と、道具方の爺さんは梯子段のところから首を出して、額の禿あがつた長い顔に思惑ありげな笑ひ顔を浮かべながら云つた。

彼の胸はまた激しく躍りだした。あの女だと思ふとなんだか三方塞がりのところへ追ひこまれたやうな氣がして、どうしても落着いてゐられなかつた。急いで衣紋をつくろつて、先づ第一に何と云つて挨拶をしようなどと考へながら、道具方の跡から恐る恐る樂屋口へ出てみた。そして土間から顔をだしてのぞくと、開戸の陰に一人の襖をとつた女が立つてゐた。電燈の光はそこまで届かないので誰だかまるで分らなかつた。

「誰方です？」彼は強て氣を張りながら聲をかけてみた。するとその女はいきなり彼のそばへつかつかと歩み寄つて、

「私よ。」と、小聲で云ひ放つてクスクス笑ひだした。それは近頃彼がひいきになつてゐる小糸

といふ藝者だつた。腰のよく据わらないところをみると、だいぶ酔つてゐるらしく強い酒の匂ひが彼女のまはりに濃く漂つてゐた。

「おや小糸姐さんですか。私は又誰方かと思つた。さあお入んなさい。そこちや雨がかります」と、彼はやつと安心の吐息をつきながら、いつものやうに愛想よく女を迎へた。

「いゝえ、さうしちやゐられないの、今開春樓のお座敷で阿彌陀をやつてね、私が八百屋のくじをひいちやつたもんだから行きがけの駄賃に一寸寄つたの」小糸は肩を揉みながら浮々した調子でいつたが、急に彼の耳のそばへ口を寄せて囁くやうに、「今夜都合はどう？」

「え、有難う。別段差支はないんですけれど……」

「厭に浮かないのねえ。體でも悪くつて？」

「いゝえ、そんな譯ぢやないんですけど……」と、田之助は口の中で呟いた。そこへ先刻の扇昇が樂屋着の半纏をひつかけてぬつと出て來た。そして不思議さうに田之助の後姿をみてゐたが、やがてにやりと笑つて、

「おい、田之さん、ちつたあ人前もあるぜ。」

「あら、扇昇さん、今晚は。」と、小糸はついと半身明るみのなかへのり出して艶やかに笑ひながら、「あんたも年甲斐がないのねえ。」

「ほ、姐さんでしたか。こいつあ大笑はれた。私はまた餘り容子がい、から何處かの方かと思ひましたよ。」扇昇はてつきり小樽の女だとふんでゐたのがはづれたので少しテレながら「そこは端近だ。まあこつちへお入んなせえ。立話しも餘りおつぢやありませんぜ。」

「有難う。少しばかり恥かしう御座んすから……」と、いつて小糸はまた面白さうに笑つた。そして懐から紙入れを出して、そのなか、ら小さく折つた紙幣をとりだし、ぼんやりしてゐる田之助の手にそつと握らせながら、扇昇には聞えないほどの聲で、

「これで何か通して下さいな。」と、云つた。

「どうも毎度恐れ入ります。こんなことしなくつてもよう御座んすのに。」

「だけど私氣がすまないから。そして今夜何時頃來られて？」

「大切りへは出ませんから十時過ぎには伺へませう。」

「さう。ちや彼處へね、きつとよ。」と、小糸は薄暗のなか、ら名残り惜しさうに田之助の眼の

ところをじつとみてゐるが、
 「ぢや、きつとよ。後程。」と、小聲でいつて涎蛇の目の傘を伊達にさしかけながら樂屋から裏木戸へ通ふ狭い露路を歸つて行つた。田之助は涙ぐんだやうな力のない眼眸をしてその跡をいつまでも見送つてゐた。

「田之さん。何んだつてそんなところで見得をきつてゐるんだな。見つともねえぢやねか。」扇昇は小道具の側の土間へ下りてかんかん熾つてゐる爐の上へ股火をしながら彼の方を見かへつた。皺だらけな小さな顔には事を好むやうな意地の悪い笑ひが漂よつてゐた。田之助はそれをきくとふと我に歸つて扇昇と顔をみあはせたまゝ、クスクスと意味もなく笑つた。そして彼の側へ歩み寄つて丁度小糸がさつきしたやうに貰つた紙幣を黙つて扇昇の手へ渡した。

「何んだい、こりやあ……。」

「先刻のお約束さ。小糸さんから樂屋へお通しですと。」と云放つて田之助は女のやうに美しく笑ひながらじつと扇昇を見下ろした。

「へえ、旨くやつてやがるな。」彼の顔にはこの若い朋輩に對して禍心のない敵意を示す表情が

動いた。そして何か辛辣な冷評でも加へようとするらしかつたが、その言葉は不知不識の間に溶けて、彼の口元へ意味のない笑ひを刻んだ。

「成駒屋さん、そろそろ出幕ですぜ。」張物の陰からのそりと出て來た鳴物の八公は後からかう呼びかけた。それを聞くと田之助は周章で、部屋へ歸つて出幕の用意をした。着附けをしながら耳を澄ますと舞臺の方からはもう加古川本藏の怒罵する聲が高く低く波うつて聞えて來た。

チヨボの地につれて傷ついた本藏は苦しげに物語りをはじめた。……その時、田之助ははじめで棧敷の方へ眼を配つた。どうしたものか其處にはもう小樽の女の姿はみえなかつた。便所へでも立つたのかと思つて、幾度となく氣をとめてみてるたが、女は到頭最後まで歸つて來なかつた。

彼は冷たい舞臺の板敷の上へ坐りながらひどく心をいためた。一年と云ふ長い年月の間寒いにつけ暑いにつけ敷へ盡せぬほど世話になつてゐながらはるばる訪ねて來てくれたのに挨拶にもいかなかつたのを女は怒つて歸つてしまつたのではなからうか。もしさうとすればこれが縁

のきれめになつて、もう二度とふたたび逢はれなくなるのではあるまいか。平生から私の強い女のことだから、一旦別れると云ひだしたら、理が非でもそれを押しとほさなければ置かないだらうと思ふと彼は急に翼を断たれたやうに心細くなつて、一刻も早くあとを追ひかけていつて詫をしなければならぬやうな、つきつめた思ひが頻りに胸先へこみあげて来た。事實彼は女が戀しいから別れ度ないのではなかつた。彼の胸には先づあの女と別れてから後の物質上の損害、殊に金銭上の大きな損害が、電のやうに閃き過ぎた。今迄の経験によると、彼は小樽へ行く度毎に必ず思ひもかけない利益にありつくことが間々あつた。興行が當らうが當るまいがそんなことは全然氣にかける必要はなかつた。女は金銭上の世話から衣類の世話まで一切引受けてやつて呉れた。そして別れる時にはきつと二三箇月の間は少しも不自由をしない位な小使錢をくれた。さうした打算的な關係が戀しい懐かしいと云ふ感情の羈絆よりもより強く彼を縛めてゐたのであつた。

「……ちや彼處へね。きつとよ。」思ひ惑つた彼の心の底へ突然また小糸の聲がよみがへつてきた。蜜のやうな甘い囁きは靈魂までも蝕ばむやうに深く深く響きわたつた。と、彼は俄に力を

得てこんな浮氣稼業をしてゐればさうさう義理などを守つていけるものぢやない、その日その日の岸を求めて流れていけば末はどうかなるにきまつてゐる。といふやうな投げ遣りな心持になりながら無理な首尾をして小糸と逢曳した幾夜の思ひ出を丁度盃の数でも重ねていくやうに食りはじめた。そしていつか小糸の美しい横顔を思浮べて、それと舞臺の端に坐つた小浪御寮の頤の長い顔とを幻の中てくらべてみて竊かに今夜の思ひがけない逢瀬を樂しんだ。拍子木が入つた後までも彼はまだうつとりした眼眸をして眼の前に廣がつた幕をみつめてゐた。繼ぎはぎのある煤けたその面には夜風が惜えたやうな波をうたせながらすうツと匂ひか、つた。そのなかにさへ彼は小糸の白い頬に漂よふ微笑を見附けだしたほど亢奮してゐた。

樂屋へ歸つてみると扇昇は薄暗い電燈の光のなかで遊んでゐる下廻りを相手にもう酒宴をはじめてゐた。一座の定紋のついた古葛籠が餉臺かはりに彼等の真中へ据ゑられて、その上には餅の乾物や豆が新聞紙に包んだま、置いてあつた。酒の弱い下廻りはもう眼のまはりを真紅にして頻りに鼻唄をうたつてゐた。

「田之さん、お先へはじめたぜ。」と、扇昇は彼の姿をみるやいなや云つた。そして嬉しさうに

笑ひながら、「お前ももう體があいたんだから早くそのズダ袋をぬいて仲間へ入んな。久し振りて面白く飲まうぢやねえか。酒は白瀧をきばつといたから無類飛切りだぜ。」

「まあ、お前さんおやりよ、私やこれからちよいと出て来なくつちやならないから、」田之助は其方へは見向きもせず衣裳をぬぐ手ももどかしさうにそわそわしながら答へた。

「畜生、又今夜も旨えくちがあるのか。馬鹿にしねえぜ。」扇昇は盃がはりの茶碗へ手酌でつぎながら、「この酒もお前の情事のカスリかと思ふと餘りい、氣持はしねえなあ。」と云つて腹の底まで見えるやうな大口をあいて面白さうに笑つた。

田之助はそのまゝ、一風呂浴びて小樽の女から去年の冬作つて貰つた座敷着に着換へて出支度をした。そして何をするともなく鏡臺の前へ坐つてじつと考へてゐると、ふとまた小樽の女のことゝが氣になり出した。このまゝ出てしまつて、跡へもし使ひでも来たらどうしよう、此處まではるばる訪ねて来て逢はずに歸ることがどうしてあの女に出来よう、きつと何か思惑があつて早く芝居を出たに違ひない。……そのうちに何んだか急に逢つてみたいやうな思ひも少しだして氣が妙に沈んで來た。そしてどうして、かまるで決斷がつかなくなつてしまつた。

酒宴は漸次面白さうにはずんで來た。終には道具方の爺さんまで座に加はつて、各自賽の目で金高を争ひながら十錢二十錢のはした金を集めて、それで酒を買ひたして飲みはじめた。扇昇は酔ふときつと持ち出す昔話をそろそろ出しかけた。それは彼がまだ旅へ出ない時代の思ひ出で、もう今は大方世の中から忘れられてしまつた江戸の芝居小屋や、または亡き人の數に入つた多くの名優の逸話がおもであつた。

「丁度俺が吾妻座につとめてゐた頃だつたな……。」と、いふやうな前置きをして、諄々と物語りをすゝめてゆくとき、彼は不思議な若々しさを帯びて來るのが常であつた。熱のこもつた眼眸無数の皺を刻みつけられた口もとには、それと同時に言葉よりもさらに深い或ものが漂つて、涙の出るやうな悲惨な矛盾が自づと彼の身邊に湧きあがつて來た。零落はもう禿あがつた額から小刻みに慄へる指の先まですつかり浸みとほつてゐたのである。

「どうしたい色男、行かねえのかい。」扇昇はふと話の腰をきつて問ひかけた。田之助は喪心したやうに押し黙つて、鏡の面にふるへてゐる自分の映像をじつとみつめてゐたが、問はれた方へはみむきもせず、

「まだ時間があるから。」と力なげに呟いた。
 「早く行つてやんな。餘り待たせるもんぢやねえぜ。」と、扇昇は眞顔で云つて、何と思つたかいきなり田之助の肩へ手をかけ、さびた中音でつひぞ出したことのない唄を唄ひはじめた。それは今から二十年も三十年も昔に流行した小唄の一つで、低く沈んでゆく節まはしは、まるで聲を忍んで歎歎してゐるやうに聞きなされた。ごろごろ寝そべつてゐる下まはりどもは愚鈍な顔をくづして譯もなくゲラゲラ笑つたが、田之助はつひその聲の悲しさにひき入れられてうつとり聞き入つた。年老つた憐れな朋輩の胸の底を今ひそかに流れてゆく過ぎし日の幻影が、彼の心にそれとなく反映するやうに思はれた。女にする苦勞の頼りなさがそれとともにしみじみ思ひ出されて、なんだか唯一人暗い穴の底へても落ちてゆくやうな寂しさが彼の心を掩つた。彼は堪らなくなつて扇昇の茶碗をかりて、苦い酒をたてつづけに呷つた。そして怪訝な顔つきをして彼を顧みてゐる扇昇の眼のところをじつとみつめながら寂しく笑つた。亞鉛葺の屋根に降りそそぐひややかな雨の音にまぎれて、港を出てゆく汽笛のひびきが遠くきれぎれに聞えてきた。

「大切の幕があいてから間もない頃だつた、平生餘り樂屋の方へ出入りしない木戸番が、田之助に宛てた一通の封書を持つて入つて來た。佐川といふ女文字の裏書を見ると、田之助は急に眼が覺めたやうな心地になつて酔ひ痴れた一座のものに氣取られないやうに隅の方の電燈の下へ行つて手早く封を切つた。

「のうべ急に思ひたつて今やつと此の地へつきました。お前さまのからだがあいたらすぐ來て下さい。ぜひぜひ逢ひたいの、あたしは明日のあけがたの汽船で遠方へいくのだから今夜逢へなければもう一生逢へなくなるかもしれない……」と、薄墨でロオル紙へ走り書きした小樽の女の手紙をみると田之助は先づ激しい驚愕に胸を衝かれた。心待ちに待つてゐた或一大事が、思ひも懸けぬ姿をして眼の前へ暴露して來たやうな感亂を感じながら、事の真相を捕へようとして、幾度となく同じ文面を読み返した。そのうちに、僅か六行に足りない、短い文言の間から、女の思ひ盡してゐる逢ひたさ、懐かしさだけが自づと浮きあがつて、胸から胸へしみ

じみとしみ透つていくやうに思はれて来た。

「木戸へ車が待つてますが……。』手持ち無沙汰さうに突立つてゐた木戸番は、後から待ち兼ねて聲をかけた。

それを聞くと田之助は妙に周章しながら、

「今すぐ行くよ。」と、小聲で云放つて、その儘手紙を懐中へ捻込んで、樂屋から舞臺裏へ降りる階子段の方へ行かうとした。

「おい、田之さん何處へ行くんだい？」今迄悲しげな小唄を身も心も溶けて行くやうな果敢ない調子でうたひ續けてゐた扇昇は、その時、ふと田之助の後姿を見附けて追ひ縋るやうに呼びかけた。そして何時の間にか空になつてしまつた徳利を倒にして、思ひ切り悪さうに酒の滴ををきりながら、

「お前が行つてしまつちやあ、俺あ寂しくなるぢやねえか。」

「ぢき歸つて来るよ。」と、田之助は暗い階子段を二三段降りながら振顧りもせず云つた。そして歎だらけな蒼い顔に寂しい表情を浮かべながら、じつと彼の後姿を見送つてゐる憐れな朋輩

を後に残して其儘急いで舞臺裏へ降りてしまつた。

紅提灯と繪看板で飾られた木戸口から、迎ひの車に乗つて末廣座を出ると、暗く更け靜まつた街路には驟雨が煙のやうに降り罩めてゐた。幌の隙間から時々冷たいその滴が酒に熱つた彼の頬へ颯と心地好く吹きつけた。何處を何う通つて、何處へひかれてゆくのか、まるで知らなかつた。心の中は唯もう今逢はうとする女のこと一杯になつてゐた。中にも明日の曉方の汽船で遠方へ旅立ちをするといふ手紙の文面がまるで黒い毒藥のやうに彼の心を戦かした。そして今女の身の上に、何か大きな變事が降り懸つてゐるといふことだけは確かに腑に落ちたが、それが果して何事であるか、殆んど想像の緒を得ることさへ出来なかつた。彼は暗闇を手探るやうな心地でその想像のつかない事實をあれか、これかと頻りに思ひつづけた。

夢から夢へ流れてゆくやうな、取留めのない思ひは、やがて車の梶棒がごとりと地につくと同時にふつりと破れてしまつた。彼は躍る胸を抑へながら徐に明るい三和土の玄關へ降りた。其處は彼も兼々聞知つてゐた菊壽亭といふ室蘭きつての料理店だつた。

物音を聞きつけて、帳場の方から白粉をつけた女中がぞろ／＼出て来た。迎ひを出す時から

噂になつてゐたものと見えて、中には延び上つて彼の方を見てゐる女もゐた。
 『さ、どうぞ此方へ。先程からお待兼ねてすよ。』と、その中の一人が云つて、氣恥しさに眼を逸らしてゐる彼を、奥まつた二階の方へ案内した。薄暗い廊下を歩いて行くとき、彼は一歩毎に胸が烈しく亂れていくのを覺えたが、やがて女中は突當りの唐紙の前へ立つて、
 『お連れ様が被りました。』と、云ひながら、そつとそれを開けると、中は電燈の光の眩しい小座敷で、小樽の女がたつたひとりいろいろな皿を並べた膳を前にして、しよんぼり坐つてゐた。

『どうも遅くなりましたして……』田之助は端近に坐りながら、喉を押絞められるやうにやつとこれだけ云つた。

お勝さんは一度きつと彼の方をみて、また眼を逸らしながら、

『あたし晩の八時の汽車で、此處へ着いたんだよ。吃驚したらう？』と、存外平氣な調子で云つて、袂から巻煙草を出して吸ひはじめた。

田之助は女が怒つてゐるのではあるまいかと思つて、辯解でもするやうに、『實は先程幕間に

一寸御挨拶に出ませうと思つてゐたんですけど……』

『あら、私があるたのを知つてたの？』と、お勝さんは嬉しさに笑ひながら云つて、もう一度田之助の方をじつと見た。そして態とらしい假面を脱いだやうな、感情の添つた語調で、『ほんとの事を云ふと、私は芝居でよそながらお前さんに別れをして、その儘立つてしまはうと思つてたんだよ。』

『何處へ被往るんです？』と、田之助は少し酔つてゐるせるか、胸をそ、られるやうな氣持ちになりながら、訊いた。

『それに就いて、お前さんにも相談しなけりやならない事があるんだけど、……まあ、一杯おあがりよ。』と云つて、お勝さんは冷たい酒をぐつと呷つて、滴雫もきらずにつと盃を田之助へさした。彼はそれを受けながら、はじめて女の顔を偷みみた。小樽で別れた頃よりもひどく寝れて、蒼ざめた頬には小鼻のあたりから陰鬱な影がさして、妙に險を帯びて見えた。彼は何だか恐ろしいやうな氣がしてなるだけ重大な話題に觸れないやうに、苦小牧から室蘭への苦しい興行の話などしながら、矢鱈に盃の数を重ねた。そして飲んではずす盃を女は少しも拒

まなかつたが酔ひは漸次と蒼白いその頬を染めて、濁つた眼眸は丁度絶望した人のやうな、異様な輝きをもつて来た。

二人は抗し難い力に遮られるやうに漸次と口敷をきかなくなつた。終には唯燃えるやうな眸を見詰めながら黙つて坐つてゐた。下座敷には土地の大盡客でも來てゐるらしく、先刻から三挺ばかりの三味線に下方まで入つて賑やかに唄ひ興じてゐたのが、何時の間にか火の消えたやうに靜かになつて寂しげな端唄の絲の音ばかりが雨滴の軒を傳ふ音にまじつて、細々と聞えて來た。

「寂しいねえ。お名残に藝者でも招ぼうか。」と、妙に勢づいては云つたが、その時流石に氣の強いお勝さんの眼にも涙が一杯に溢れて來た。そして堪らなくなつたやうに、涙聲で、

「私は何も彼もお前さんに隠して、此儘別れてしまはうと思つてゐただけど、もう迎も我慢が出来ないから、いつそ、悉皆話してしまはうねえ。」と云つて、強て涙を隠すやうに聲を呑んだ。

お勝さんは家出をして、東京にゐる伯母さんの處へ逃げて行く途中だつた。父親が樺太の漁

場で失敗したのが元になつて、彼女の家はこの夏頃から少しづつ、折合が悪くなつてゐたところへ、今度又子供の時分から彼女の敵になつてゐた繼母と結婚の事から端なくも新しい争ひが起つて彼女は到頭家を出奔しなければならぬやうになつた。昨日の朝、愈心を決して家の者共の起き上らない朝まだきに裏門からこつそり脱け出して、直ぐ小樽から汽車で函館へ行つてしまふ心算だつたが、愈永の別れとなると妙に田之助に未練が残つて、昨日一日札幌の宿屋で暮らして、今日到頭室蘭行の汽車に乗つたのだと、彼女は事細かに物語つて聞かせた。

田之助は今迄に聞いた事もない不思議な物語を聞かせられるやうな好奇心をもつて、うつとりと聞き入つた。芝居でよくやるやうなその筋道が殊更に彼の情緒に媚びた。そして家出をして來たといふ實在の女を考へるまへに、まづ舞臺で芝居をしてゐるやうな氣持になりながら、

「それぢやこれが永のお別れになるんですねえ。」と、しみじみ云つた。

それを聞くとお勝さんは又眼を濕ませて、

「私、逢ふまではその心算でゐただけど、かうして逢つてみると何だかお前さんを手離すのが厭になつちやつた。」と、云つて、じつと田之助の思ひ入つたやうな美しい顔を見詰めてゐた。

が、やがて狂氣のやうに彼の側へすり寄つて、突然膝の上へ身を投げながら、

「ねえ、お前さん、お前さんも私と一緒に東京へ行つてお呉れな。」

田之助は吃驚して、身をひかうとした。次の瞬間に歎息してゐるやうな女の肩の顛へが胸の底に滲んでいくと、彼はふと又反抗することの出来ない權威に壓しつけられたやうな氣がして、唯寂しく笑ひながら、何とも答へることが出来なかつた。

女は漸う顔をあげて、譚話のやうな言葉を續けた。

「お前さんだつて、一生此様な旅役者で終る氣はなからうし東京へ出て今のうちに何か手頃な商賣でも始めて見たら何うだらうと思ふの。それともまた此の商賣がい、と云ふんなら、東京にや幾らでもい、師匠があるんだから、そんな人の弟子にして貰つて、立派な舞臺でみつしり修業したら、私どんなにかい、だらうと思ふんだよ……」

東京！ 檜舞臺！ かうした華やかな幻影は、遠い北の果ての國々を漂泊してゐる無智な彼等にとつて、まるで天國のやうな美しさを見せる憧憬なのであつた。新聞町の貧しい小屋に寝る夜な夜な、凍えたやうな豆洋燈の光をかきたてながら、扇昇が昔囃のやうに物語つて聞かせ

た大江戸の芝居町の賑はひや、一睨み千兩と云はれたやうな名優の姿などが、お勝さんの言葉と一緒に髣髴として彼の眼の前に浮び上つて來た。あ、行きたい、一生のうちに一度はどうにかしてさう云ふ華やかな境遇に身を置いてみたい。と思へば思ふ程、若い彼の心には意地の悪い苦痛の陰影が射して來た。

「ねえ、田之助さん私と一緒に行く氣はなくつて？」と女は黙つて俯向いてゐる田之助の首へ腕をまはして、根柢から彼の心を揺り動かすやうにせがんだ。

「有難う御座います。さう願へりや結構なんですけど、私もあの座頭にや親も及ばないほど世話になつて居りますから……」

「だけど座頭だつてお前が一廉の立派な役者にならうと云ふのを、まさか悪くも思ふまいぢやないの。」と、云つて又じつと彼の眼のところを見詰めたが、家を捨て、親を捨て、來た彼女の思ひ入つた眼眸は常より幾層倍も力強く彼の心の底へ食ひ入つて行くやうに思はれた。

彼はもう答へる言葉も封ぜられて、たゞ冷たい盃の縁を噛みながら、深い思ひに沈んだ。十三歳の時拾はれて、初めて舞臺を踏んでから丁度六年といふ長い歲月の間、一座にどんな激

しい出替はりがあつても彼れはあの座頭の側を離れようとしなかつた。座頭も子飼ひから育てた憐れな弟子には、人一倍苦勞をした、けに、自づと煩惱が懸つて、親身の親兄弟も及ばないやうな世話をして呉れた。譬ひ一座が明日の飯に困つて、衣裳から小道具のやうなものまで、太夫元へ入質して、愈ちりぢりに解散してしまはなければならぬやうな場合になつても、彼は憐れな弟子だけは捨てなかつた。その座頭の大恩を賣つて、たとひ自分の立身の爲めとはいひながら、今女と一緒に出奔してしまふと云ふ事は到底彼のなし得る處ではなかつた。假しまたなし得るにしても、そんな事で今の身の上から救はれようとは夢にも信じられなかつたのである。下座敷では絃の音も唄聲もふつと止んでしまつた。そして更けまさる夜と、もに雨の音ばかりが高く低く聞えて遣りばのない悲しみがひよる長い影のやうになつて、ふらふらと間内を漂つてゐるやうに思はれた。田之助は女を抱いたまゝ、詮方なしに押黙つてゐるが、その時、ふと今迄女の勢に氣壓されてすつかり忘れてゐた小糸との約束を思ひ出した。十時過ぎには行くといつて置いたから今頃はさぞあのくらしい燈の下で待ち焦れてゐることだらうと思ふと、彼は急に胸苦しくなつて、座にゐた、まれないやうな氣持になつた。そしてあの可愛い

小糸や、懐かしい一座の者達から自分を引離さうとする恐ろしいお勝さんの姿をみると、涙に滲んだ眼眦から、小刻みに顔へてゐる後れ毛までみんな憎らしくなつて、身を投げ出してゐるのを幸ひに、打つて打つてうちのめして、一刻も早く此場を逃去つてしまひ度いやうな残酷な氣もして來た。

お勝さんは餘り彼が黙つてゐるので、もどかしがりながら到頭顔を上げて、「どうするの、行つて呉れるの？」

「私にやどうしても座頭に濟まないやうな氣がしてなりませんから……」と、彼はきれぎれに答へて、暫らくの間躊躇してゐるが、やがて酒の力をかりてきつぱり言葉を續けた。「それに今夜も明日の稽古をして置かなければなりませんので、餘り遅くまでお邪魔をしてゐる譯には参りませんから、いづれまた明日でも座頭とよく相談しました上で御返事致しませう。」

それを聞くと、お勝さんは突如身を起こして、「そんな事をしてゐりや私の方が駄目になつてしまはあね。何しろ家からお金や證券やなんかどつさり持出して來たんだから、私の體にやいつ追手が懸るか知れやしないんだもの。」と、云

ひながら、彼女は床の間の上に置いてあつた臘納獸皮の小さな鞆をあけて、田之助に見せた。中には書類のやうなものが一杯入つてゐた。

彼はそれを見ると又妙に、恐くなつて、眼を逸しながら、

「私の方もまた明日から狂言が替はるもんですから。」と、飽くまで彼女から逃げ去る手段を盡さうとしたが、それはもう彼にとつて全く無駄な努力だつた。

女はそれと見て取つたらしく、忽ち顔色を變へながら、彼の顔を穴のあくほど見詰めてゐたが、やがて唇のあたりを神經的に痙攣させて、

「お前さんも随分薄情なんだねえ。そんな氣ならどうでも勝手にするさ。」と、投げつけるやうに激しく云ひ放つて、ついと顔を背けてしまつた。

その強い一言で、彼はまた氣を挫かれてしまつた。胸の中ではどんなに焦れても、このうへ反抗することは到底彼には出来なかつた。その儘立つにも立れないやうな、みじめな顔容をして心の底では小糸のいとしい幻影を貪りながら、彼はまた冷たい盃を唇へ持つていつた。

夜はもう十二時過ぎて、船着きの町もひつそりと寢靜まつた頃、酒の酔ひに意識を晦まされた二人は停車場の隣りにある船車連絡の待合室へ來てゐた。ぼやけたやうな力のない電燈の光は土間に置並べた三つの大きな卓子を寂しく照らして、隅の方の疊敷きになつた處へゐきたなく眠り倒れてゐる二三人の旅客の躰聲が、凍えきつた静けさの底を這ふやうに聞えてゐた。ふたりは山のやうに炭火を熾した大火鉢の傍に座を占めて、互に顔を見合はせながらまるで夢のやうな事を思ひ耽つてゐた。中にも田之助はいろいろに説伏せられてやつと女と一緒に旅へ出る氣になつた身でゐながら、今は全く東京と云ふ華やかな幻影に眩惑されて、もう一座のことも小糸のこともすつかり忘れてしまつたやうな氣持になつてゐた。東京へ出たらあゝもしようかうもしようと云ふやうな取留めのない企てが酔つた頭の底に數限りなく簇り起つて、空想はそれからそれへと絲巻をほぐすやうに際限なく續いた。

「貴方がたは何方へおいてです？」と、突然、眠むさうな聲が何處からか訊いた。女は肩でも

突かれたやうに吃驚して、思はず聲のした方を振顧へると、いつの間に出て来たのか料理場の戸口の處へ、洋服の上から襦袢のやうなアツシを着込んだ一人のボオイがぼんやり突立つてこつちを見てゐた。

「森へ行きたいと思ふんだが、船は何時に出るんだい？」と女は體を捻向けたまゝ、いらいらした聲で訊きかへした。するとボオイはその鋭い視線を避けるやうに顔を背けながら、「森行きは午前三時の振洋丸です。」と、他事のやうに呟いて、さも堪へきれないといふ風に眼をしばた、きながら大きな欠びをしたが、やがて「そんならもうぢきに解船が出来ますから切符を買つてお乗込みになつたらいい、てせう。」と、氣のない聲で添け加へた。

女はそれを聞くと直ぐ出札口へ行つて、二等の切符を二枚買った。そして係員から船客名簿へ載せる姓名を訊かれた時、つとめて平氣に装ひながら、小樽區色内町荒井みつ、同じく政次郎と澁みもなく答へた。そして再びもとの席へ歸ると、うつとり思ひ入つてゐる田之助の耳へ口を寄せて、

「お前さんと私は姉弟なんだからそのつもりでおいでよ。」と、囁いて、苦もなさ、うに艶やか

に微笑んだ。

程なく頭からすつぽり外套をかぶつた若い船頭が解船の出ることを知らせに來た。疊の上へ眠り倒れてゐた他の旅客も同船の人々とみえて欠伸をしながら起き上つて寒さにふるへながら身支度をはじめた。ひとわたり小荷物の手配や、解券の受渡しがすんでしまふと、やがて一同は船頭に導かれて待合室を出た。

雨はいつかしら雪になつてゐた。音もなく更け靜まつた小砂利道には、片側だけ薄白く降り積もつて、ところどころの水溜りにこぼれた軒燈の光も凍えたやうに冷たかつた。二人は連れの人達から少し遅れてひとつの傘の下に身を押し縮めながら歩いた。冷たい女の手は傘の柄を持ち添へた男の手を上からしつかり握りしめてゐた。

移民取扱所の角から海岸づたひに波止場へ出ると、頬を劈くやうな冷たい風が俄に横様に吹きつけて、一團になつた人々は齒を喰ひしぼりながら、思はず軽い呻き聲をたてた。眼の前に擴がった海は黒耀石のやうに暗く澁んで、右往左往に入り亂れながら降りしきる雪は吸ひ込まれるやうに音もなくその面に消えた。そして荷揚場の巨大なアーク燈が息つく度に、陸岸近

く繋つた汽船の姿が怪物のやうな沈黙をまもつた儘、影のやうに浮きあがつたり消えたりした。一同は吹雪に弄ばれながら、そのまゝ、波止場の突端から小さな舢舨船に乗り移つて、五町ばかり沖に碇泊してゐる本船へ向つた。

森がよひの振洋丸は、僅か百五十噸ばかりの小蒸氣船だつた。舢舨船から舷梯へ上るとき田之助は紅い碇泊燈の光に照らされた薄闇の中で、足許の定まらない女の體を強く抱きしめながらやつと引き上げた。甲板へ上ると、もう雪が布を敷いたやうに眞白に積つて、船員の室では五人圓座になつて酒を飲みながら大聲で何やら笑ひ興じてゐた。彼等は微かな燈の光をたよりに裾にまみれた雪を拂ひ落しながら、穴藏のやうな暗い船室へ降りて行つた。

二等室には彼等のほかに一人は相客もなかつた。豆洋燈のやうな暗い光に照らされた人氣のない室の氣勢ひは何となく恐ろしげであつたが、彼等にとつてはそれが却つて自分達の世間離れた寂しい棲處のやうて心安かつた。

「何日頃東京へ着くんでせう？」と、田之助はじめじめした疊の上へ腰をおろすとすぐ待ち兼ねたやうに口をきつた。

「さあ、仙臺か何處かてほとぼりの冷めるまで隠れてゐたいと思ふから、あとどうしても一週間位はかゝるだらうね」と答へた女の聲にも何處となくいきいきとした力が籠つてゐた。

「一週間？そんなに長くかゝるんですか？ 私また明後日頃は着くのかと思つてました。」

「ほほ、ゝゝ、そんなに早く東京へ行き度いの？」

「え、出来ることなら早く行つて見度う御座います。」と、田之助は憧憬をその儘口へ出すやうに答へた。女はそれを聞くと笑ひながら、

「お前さんも妙な人だね。つい今しがたまで行くのは厭だつてあんなに私を困らした癖に、もう眞底から氣が變つたんだねえ。」と、擲論ふやうに云つたが、やがて調子をかへて、「そりやお前さんがその氣なら、私の方はどうでも都合するわ。」

「い、え。なにもそんなに急ぐ譯ぢやないんですけど、千兩役者のする芝居つてもものがどんなものか早く見たいやうな氣がしましてね……」と、云ひさして、田之助は處女のやうな細りした顔に美しい微笑を浮べた。

それから二人の間には東京へ着いてからあとの種々の計畫が話題に上つた。空想はもう嚴平

とした事實の様に物語られた。殊に田之助は若々しい歡びに亢奮して、平常よりも二倍も三倍も口まめに饒舌つた。そのうちに體が温まつて来るにつれて、今迄寒氣のために勢を奪はれてゐた酒の酔ひが、再び彼等の心臓へ歸つて來た。ひとしきり燃えるやうな熱い血があらゆる脈管に漲りわたると、やがてそのあとから體の節々も蕩けてゆくやうな甘い快感が昏々として續いた。彼等は何時の間にか語るべき言葉さへ奪はれて、恍惚と顔を見合はせながら幾度か唇を寄せて接吻した。

出帆間際になつて一人の旅客が彼等の室へ乗り込んで來た。不格好な毛皮の外套を猪首に着て、顎鬚を長く生やした老紳士だつた。ボオイに荷物を運ばせて傲然と振舞つてゐる様子を見ると、彼等は俄に何とも云ひやうのない暗い氣持ちになつて、自分達の幸福を盗む爲めに闖入して來たやうなこの新來の客を心底から憎んだ。

孤獨の寂しさを訴へるやうな汽笛が、暗澹たる夜の空へ遠くきざれに響きわたつた。それと共に異様な静けさに掩はれてゐた甲板が俄にどよめいて來て、船員の靴音が右往左往に行違つた。船橋の方では船長の太い叫び聲が手にとるやうに聞えて、鐵鎖の觸れる音と脈搏のやう

な忙しい機關の音とが騒々しく纏れあふと、やがて船は小刻みに慄へながら徐に動きはじめた。

二人は小高い疊敷の處へ座を移して、圓い舷窓から遠く別れゆく室蘭の町を眺めつくした。いつ明けるとも知れない夜の闇を背景に、山の中腹からなだらな傾斜につれて海の方へ擴がつてゐる街々には、暈のやうな燈の光が幾列となく縞をなして、青や紅の碇泊燈を點したま、吹雪の底に眠つてゐる泊り船の群にも、北の國の寂れた港を思はせるやうな深い悲しみが慄へてゐた。船が進むに従つてその燈の色も次第次第に薄れて、終にはとある岬に遮られて全く影を没してしまつた。飽かず見送つてゐた二人の心には、その時ふと聞き馴れた港の哀歌が何處からともなく、いとほのかに響いて來るやうに思はれた。

船は出てゆく、鵞はのおこる、

波は磯うつ、日は暮る、……

暗い海の底で歎息してゐるやうな哀切な肉聲は機關の音に紛れながら縷々として斷續した。何處まで行つても際涯のない別離の怨みがその聲と、もにかすかに咽んでゐた。そしてその果敢ない幻覺は實感よりも遙かに執拗な力をもつて彼等の心の底へ滲んでいつた。彼等は知らぬ